當家物語

67-425
1200501281625
67
25

始

源氏物語

六

昭和一〇・八・廿五 帝國文庫

67-425

巻第六

曾我物語 下編

十郎大磯へ行き立聞の事

さても十郎祐成は、三浦より曾我へ歸りけるが、さだめなき憂世の習、つくづくと案ずるに、明日富士野にうち出でて、歸らんことは不定なり、この二三年情をかけて淺からぬ、虎に暇乞はんと、宿河原、松先田と申す所より、大磯にこそ行きにけれ。折節鎌倉殿召に從ひ、近國の大名小名、連れ〳〵通りけり。十郎虎が宿所に立ち寄りてありけるが、心をかへて思ひけるは、國々の侍、多く通る折節なれば、流れ立つる遊者、又我ならぬ人に情もやと、心許なく思はれて、暫く駒を控へて、内の體をぞ聞きゐたる。折節虎が住家には、友の遊君數多竝み居て、物語しける中に、虎が聲と覺しくて、「只今上る人々は何處の國の誰人ぞ、聞き給はずや」「先陣は横山藤馬丞」とぞ申しける。虎聞きて、「實や孔子の言葉に、耳の樂む時には愼むべし、心の驕る時には、恣にすべからざれとは申せども、あはれ實に、この殿原の、馬鞍鎧腹卷を、妾にくれよかし」女房たち聞き

て「あはぬ願物、何の御用にや」といふ。「祐成に參らせ、思ふことを」とばかりいひて、涙を浮べけり。友の遊君聞きて、不思議やな、思ふ事は何なるらんと、怪みながら、問ふべきにあらず。敵討ちて後にこそ、この事よとは知られけり。さればこの人も豫てより、知りけるよとは申し合ひけり。祐成物ごしに聞きて、如何でか、是程情深きものに、立聞したりと思はれては、後の怨も殘るべし。後暗くも思ひなば、來ぬこそと思ひつゝ、知らざる體にもてなし、駒の口を暫し控へ、何となく廣緣に下り、鞭にて簾をうち揚げて内に入りぬ。虎もやがて出で、何時よりも睦じく、語り寄り、飽かぬ世の中の夢か現かと思ひ居たりける處に、思ひの外なる事こそ出で來たれ。

二　和田義盛酒宴の事

さる程に和田義盛一門、百八十騎うち連れて、下野へ通りけるが、子どもに向ひいひけるは、「都の事は限あり、田舍にては、黄瀬川の龜鶴、手越の少將、大磯の虎とて、海道一の遊君ぞかし。一獻進めて通らばや」「然るべく候ふ」とて、かの長の方へ使を立てゝ、「斯くぞ」と云はせけるに、長斜ならずに悦びて、遠侍の塵取らせ、「義盛これへ」と請じけり。虎に劣らぬ女房ども、三十餘人いで立たせ、座敷へこそは出しけれ。朝比奈三郎義秀、古郡左衞門胤氏をさきとして、八十餘

人居流れて、既に酒宴そ始りける。されども虎は座敷へ出でざりけり。義盛心得ず思ひて、「この君達もさる事なれども、虎御前の見參の爲なり。などや見え給はぬ。義盛あしくや參りて候ふか」といひければ、母聞きて、「この程煩はしくて」といひながら、座敷を立ち虎が方へ行き、「などや遲く出で給ふぞ。疾く疾く」といひ置きて、母は座敷へ出で、「唯今虎はまゐり候」といひければ、義盛盃控へ、今やと待てども見えざりけり。なか〳〵始より心地例ならでと云ひなば、よかるべきを、唯今といふにより、義盛色を損じ、「御心に背くことあらば、罷り立つて重ねてまゐるべし」といふ。母聞き惡様にや、と思ひ、また座敷を立ち、「何とて出で給はぬぞや。時世に從ふならひ、思はぬ人に馴るゝもさのみこそ候へ。怨めしの御振舞や」とて佇む。虎はまた十郎が心をかねて、衣引きかづき打ち臥しぬ。母はこの心を見かねて、「如何にや昔のふん女が事をば知り給はずや。さやうの事だにあるぞかし。なほも出でまじくば、六字の名號も御照覽候へ。生々世々不孝する」といひ捨て、座敷へこそは出でにけれ。

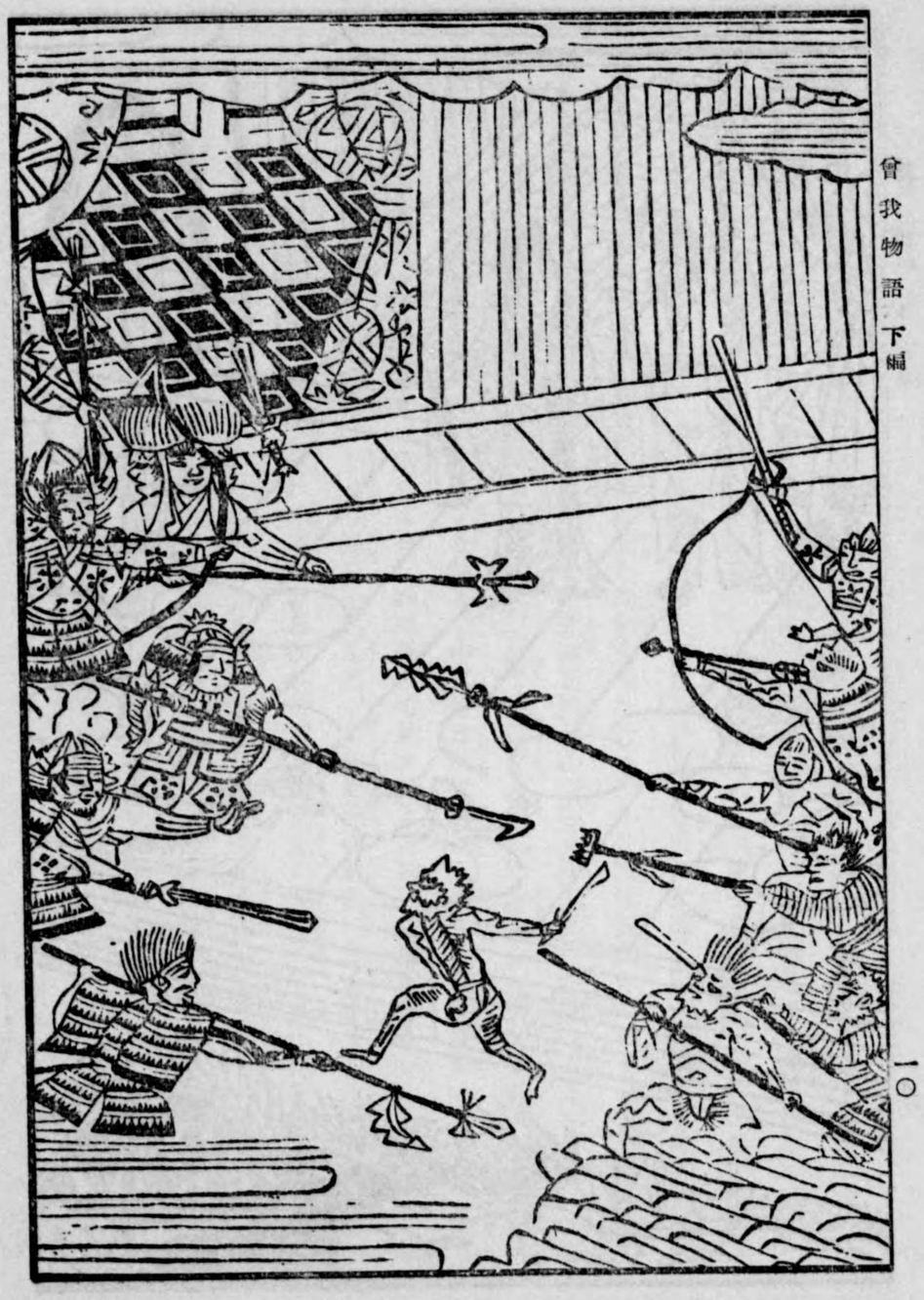
三　ふん女が事

そも〳〵ふん女と申す由來を委しく尋ぬるに、昔大國流砂の水上に、ふん女といへる女あり、天

下に聞ゆる長者なり。金銀珠玉のみならず、七珍萬寶、四方の藏にあまりけり。然れども、如何なる罪の報にや、一人の子なし。悲みて祈れどもかなはず。ある時思はざるに懐妊す。悦びの思ひをなすに、苦めることいふばかりなし。されども子の出で來ぬべきことの嬉しさに、物の數とも思はざりけり。日數積る程に、產の紐を解く。見れば人にはあらで、卵を五百生みたり。「これは如何に、一つなりとも不思議なるぞかし。五百まで生るゝこと、唯事にあらず。緣なき子を强ひて祈るによつて、天の憎を蒙ると覺えたり。孵りなば如何なるものにて親をも損じ、人をも害すべきやらん。その上胎卵濕化のうち、卵生罪深し、と說かれたり。置くべからず」とて箱に入れて、流砂の浪に流し捨てけり。不思議なる例なり。遙の川の末に、れうかんといふ所に、きよはくといふひんたう無緣の老人あり。旦暮この河の魚族を漁り、身命を助かりけるが、折節釣する所へこの箱流れ寄りたり。取り上げ開き見れば卵なり。何者の子やらんと思ひ、家に取りて歸り、妻にかくと語る。女これを見て、「恐しや如何なるものにか孵りなん。主も樣ありてこそ捨てつらん。急ぎ元の川に入れよ」といふ。男の曰く、「唯置き候へ。斯樣なるものには不思議もこそあれ。たとひ僻事ありとも、吾等が齡幾程かあるべきならねば、彼が樣を見よ」とて、物に包み暖にして置きたりければ、程もなく美しき男子に孵りぬ。「吾古より子のなき事を歎きに思ふに、然るべき瑞相、天の憐にや」

と悅びて、また見れば、孵り〳〵て、五百人にぞ孵り揃ひける。一つを捨てゝ一つを養はん事怨めしく默止しがたくて、取り集め養ひけるに、一つも恙なく成長しけるぞ不思議なる。實に夫婦二人の時だにも、渡世かなひ難く乏しかりけるに、況してこの者共を育てける程に、朝夕の生路に佗びければ、此處や彼處に徘徊し、命を助からんとする程に、心ならず猛惡になり、思はずも慾心に住す。嗔恚を旨として、驕慢にあまりければ、外道にも近づきけり。或時彼等いひけるは、「吾等一人ならず、饑餓に及べり。さればとて徒に身を捨つべきにあらず。この川上にふん女とて長者あり。財寶を藏におき餘る、いざや行きてうち破り、寶を取りぬべし」といひければ、一人が進み出でいふ樣、「さる事なれども、それ程いみじき果報者を、我等卑しき貧力にて、寶を奪はん事思ひも寄らず、却つて身の仇となりぬべし。案じ給へ」といふ。今一人進みていふやう、「さらば外道どもを詣らひ、彼等が、神通の力を借りて破つて見ん」「然るべし」とて、飛天外道といふ者の許へいひ遣りたりければ、素より鬪爭修羅を好むものなれば、同類を催し打ち立ちける。裝束には、流轉生死の鎧直垂に、惡業煩惱の籠手をさし、貪慾の脇立に、因果撥無の脛當に、愚癡暗蔽のつなぬき履き、極大邪見の膝甲に、誹謗三寶の裙金物をぞ打つたりける。三界無安の白星の兜に、六趣輪廻の頰當、嗔恚憤怒の刀をさし、放逸無慚の太刀を佩き、殺生偸盜の大弓に、破戒無明の弦をかけ、苦患極重

の箙には、諸法愛著の矢數をさし、四天王の馬の太く逞しきに、四苦八苦の鞍置きてぞ乘つたりける。異類異形の下外道ども、思ひ思ひの裝束に、色々の旗さゝせ、數を知らずぞ集りける。城中には靜りかへりて音もせず、されども用心嚴しくて、容易く入るべきやうはなし。時を移してゆらへたり。かのふん女と申すは、同じ福者といひながら、三寶を崇め、仁義を亂さぬ賢人なり。如何でか諸天も捨て給ふべきならねば、ふん女を渴仰し給ひけり。かくては如何あるべきとて、死生知らざる外道ども、喚き叫んで亂れ入る。その時惡魔を降伏の、四天十二天、影向なりて、四角四方を守り給ふ。四天はもとより甲冑をよろひ、弓箭を離さぬ勇士なれば、面もふらず障へ給ふ。火天猛火を放し、風天風を吹かせ、各城を守り給ふ。中にも水天は弓矢を守らんと誓ひ給ふなれば、數の眷屬を引き連れ、妙觀みつちの旗さゝせ、殊に進みて見え給ふ。其日の御裝束には、九品正覺の直垂に、相好莊嚴の籠手をさし、上求菩提の小具足に、下化衆生の脛當、しくりやうくわんの頰貫はき、大悲大衆の頰當し、無趣方便の赤糸のけをひかせ、紫磨黃金の裾金物をこそ打つたりけれ。萬德圓滿の月眞向にうち、畢竟、空心の四方白の兜を猪首に着、五劫思惟の嗔物造の太刀を佩き、首楞嚴定の刀をさし、火舍三昧の槻弓、實相般若の弦をかけ、智德無量の矢數をさし、隨類化現を羽に交へ、筈高に負ひなし給ふ。元より手馴れし大蛇、後より制ひかゝり、左右の肩に手をおき、



兜の上に頭をもたせ、兩眼の光明にして、時々電四方に散り、紫の舌の色鮮にして、折々火焔を吹き出す勢天に餘る。今の世に兜の龍頭を打つこと、この時よりも始りけり。各床几に腰をかけ宣ひけるは、「大修羅王が戰の强きも、佛力にはかなはず。ましてやいはん彼等が勇、物の數にて數ならず、蟻の塔と覺えたり。城中靜まれ」とぞ下知し給ふ。こゝに城の中より武者一人進み出で申しけるは、「唯今寄せ來る兵は、何處の國の如何なる者ぞ。また如何なる宿意あるぞ。委しく名のれ」といひければ、五百人の兵聞きて、「彼等には親もなし、氏、系圖もなし、生るゝ所を知らざれば、何條誰と名のるべし。朝夕思ふ事とては、寶の欲しきばかりなり。急ぎ藏を開き、財寶を與へ給へ。吾等思ふ程取りて歸らん」といふ。「心得ぬ言葉かな。人により分に隨ひ、氏も名字もある者を、猛惡の身が不思議なり。委しく申せ」といひければ、「問うては何にし給ふべき。さりながら、この川上より流れ來たる五百人の卵の流人なり。謂なければ人知らず。急ぎ寶を施して、歸すべし」とぞ申しける。流れ來たる兵といふを、ふん女つくゞくと聞きて、怪しく思ひ、櫓の下に歩み出でて、「五百人の殿ばら近く寄り給へ。尋ぬべき事あり」といひければ、一人塀の際に寄りたり。「そもく流れ來たると仰せられつる言葉について申すぞとよ 姿は何にて流れけるぞ」「寶をば出さでむづかし」とは言ひながら、「吾等が昔如何なるものか生みたりけん。五百の卵にて水上

より流れたりけるを、取り上げて育てけるが、かくなりぬ」といふ。さればこそ、と思ひ、「その孵は何に入れけるぞ」「玉の手箱に入れ、上には銘を書きしなり」「銘をば何と書きたるぞ」「はうしやうろうの箱と書けり」「扨は疑ふ所なし、是はそなたのししやうなり。此方の證據には、若し此卵恙なく成長あらば訪ね來よ。ふん女と書きて判を捺し、箱の底に入れたりしが、刹那も肌を離さじと、頸に懸けて持ちたり」とて、懐よりも取り出す。「さては疑ふ所なし。汝等は自らが子どもなり」とて、門戸を開きて出でければ、尾花の如く支へたる、鉾劍をも捨てにけり。母も子どもの懐しさに、劍の刃も忘れつゝ、彼等が中へ走り入りて見廻せば、兵も兜を脱ぎ、弓矢を横たへ、各大地に跪く。何時しか母は懐しく、思ひの涙に袖しぼる。竝み居たる兵も、同じ心になりにけり。彼もこれもそかといふ情の袖も香しく、憐み憐む裝は、見るに涙も進みけり。實にや恩愛の中ほど悲しき事あらじ。誠や夜叉羅刹を從へて、猛く勇める武士も、母一人の言葉に、皆々靡くぞ哀なる。かくて城中に誘ひ入れ、親子の睦懇なり。

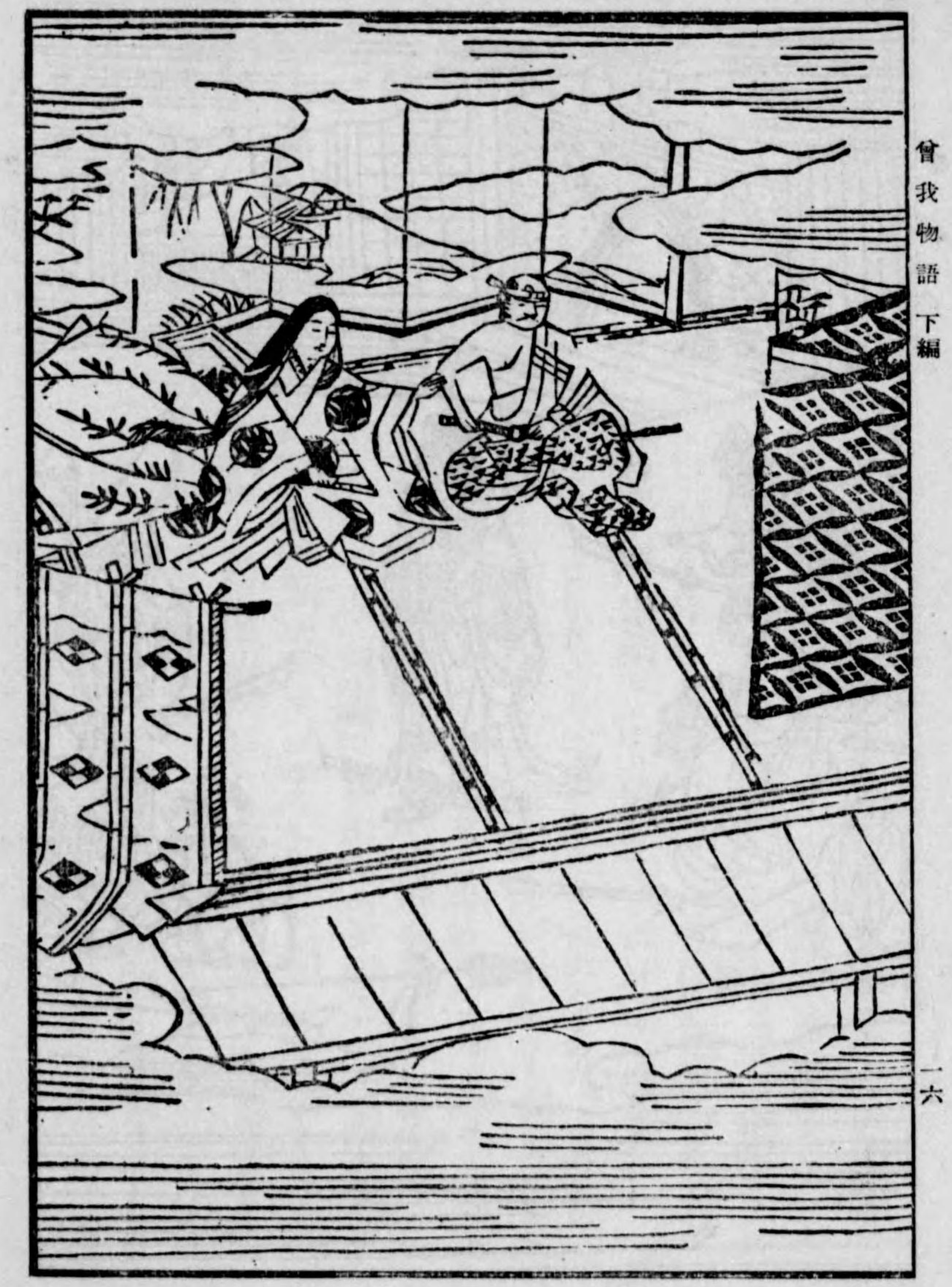
四　辨財天の事

かのふん女と申しゝ人、後には大辨財天と現れ給ふとかや。五百人の人々は、五百童子となり、その一は、いんやく預り給ふ神と現れ、はうしやうろうの箱をも、その中に持たせ給ふ。一切衆生の願をことゞく汲みて、安樂世界に迎へんと誓ひたまふ。かやうに猛き弓取も、母には從ふ習ぞかし。

五　朝比奈、虎が局へ迎にゆきし事

さても母は虎を制しかね、「なにとて母には從はざるや」とぞいひける。虎はなほも涙に咽び、「流を立つる身ほど悲しきことはなし。夫の心を思ひ知れば、母の命に背き、また母に從へば、時の綺羅にめづるに似たり。とにもかくにもわが思ひ、亂れそめける黑髪の、あかぬ情の悲しさよ。如何なる罪の報にや、女の身とは生れけん。されば にや五障三從と說き給ひけるぞや」とて、さめ〳〵と泣き居たり。十郎この有樣を見て、「何かは苦しかるべき。一旦こそあれ、座敷に出で給へ。母の命に背きなば、冥の照覽も恐し」と申しければ、虎はこれにも從はず、唯泣くより外の事はなし。義盛これをば知らずして、「何とて虎は遲きやらん」とて、一座の興を失ひけり。母も待ちかねけるにや、「曾我の十郎殿ましますが、さてや出でかねぬ候ふらん」和田はこれを聞き、「心得ぬ十郎が振舞かな。我こそ出でて對面せざらめ、流の遊君を、塞ぐべきか。誠に僻事なり。四郎左衛門朝比奈は

なきか。御迎にまゐれ」といふ。四百餘人の殿ばらも、はや事出で來ぬと色めきけり。祐成が在所近ければ、義盛が言葉手に取るやうにぞ聞えける。「不思議やな、思はぬ最期の出で來たるぞや。身に思ひのあれば、千金萬玉よりも、惜しき命なり。されども遁れぬ所は力なし。徒なる死して、五郎に怨みられん事こそ、思ひやられて悲しけれ。さりながら、かやうの所は神も佛も許し給へ」といふまゝに、烏帽子おしなほし、直垂の露結んで肩にかけ、伊東重代の赤銅造の太刀を二三寸ぬきかけ、片膝おし立て、一方の扉を開き、「ことゞしや三浦の者ども、何十人もあれ、一番に入らん朝比奈がもろ膝なぎふせ、續かん奴ばら物の數にやあるべき。伊東の手竝見せん。遲し」とこそは待ちかけたり。虎もこの有樣を見て、實にや冥途より來るなる、獄卒の追つ立つる途だにも、主君師匠の命には代るぞかし。ましてや夫婦恩愛の契淺からずとは、古今までも傳へ聞くなるものを、後の世までも離れじと、思ひ切つて守刀、衣の褄に取り含み、三浦の人々如何に勇み亂れ入るとも、何となく立ち廻り、よき隙に義盛を一刀さし、如何にもならんと唯一筋に思ひ定め、祐成近く寄り、今やと待つぞ優しき。時移りにければ、和田いよ〳〵腹を立て、「如何に朝比奈はなきか、御迎に參れ。無骨の訴訟も苦しかるまじ」とぞ怒りける。義秀聞きかね、座敷を立ち、虎が迎に行きけるが、つく〴〵案ずるやう、十郎といふも、伊東の嫡々たり、心も亦たて切つたり。始より出



さでかやうになりてはよも出でじ。我またあらく怒りて出さんも恥辱なり。所詮難なきやうにうち向ひ、賺さばや、と思ひければ、靜に歩み入りけるが、この殿ばら兄弟は、身こそ貧なりとも、心は貧にあらばこそ。疎忽に入つて細頸うち落され、惡しかりなんと思ひ、扇笏に取りなほし、畏つて、「これに曾我の十郎殿の御入の由、父にて候者承り、御迎のために義秀を參らせられて候。何かは苦しく候べき。御出ありて親にて候ものに、御對面や候べき。それにまた某一期の所望の候。御前の事ゆかしき事に、義盛思はれ候が、御座を存じて義秀申し止めて候。然るべくは諸共に、御出ありて父が所望をもかなへ、義秀が面目、施すやうに御計ひ候へ。一向頼み奉り候。さりながら、御心に違ひ候はば、罷り歸り候べし」と、障子越にいひければ、十郎聞きて、頼むといふに和ぎて、「左右にや及ぶ朝比奈殿、いかでか異議に及ぶべき。立ち給へや御前、祐成も出でん」とて、烏帽子の筒おし立て、直垂の衣紋引き繕ひ、虎を先に立てゝ、各三人出でたりけり。さてこそ竝み居たりける人々も、生きたる心地はしたりけり。誠に義秀の振舞優なるものかな。座敷に事も起らず、虎も出でて、十郎も心を破らで事過ぎにけり。これやせうろんに、國の將にそきする事は奸臣にあり、家の將に盛に貴うする事は忠臣によつてなり、といへり。かやうの事をや申すべき。朝比奈なかりせば、よしなき事出で來、十郎も討たれ、和田も人多く亡びて失せなん。誠に深淵に臨んで、

薄氷を履むが如く、危かりし事どもなり。

六　虎が盃十郎にさしぬる事

義盛は虎を見給ひて、嬉しげにしてのたまひけるは、「さても十郎殿の内にまし〳〵けるや、他所がましく心を隔て給ふものかな。御入を知り候はゞ、始より申すべかりつるものを、これへ〳〵」と請ぜらる。十郎笏とりなほし、さん候ふ、御目にかゝるべきを、異體の無骨に候へば、罷り出でざる由色代して、左手の疊になほりけり。虎も座敷に定まれば、盃前にぞ置きたりける。義盛虎をつく〴〵見て、「聞きしはものゝ數ならず、かゝるものもありけるよ。十郎が心をかねて出でざるさへ優しく覺ゆるにや。それ〳〵」といふ。何となく盃取り上げ、その盃和田飲みて祐成にさす。その盃義秀飲みて面々に下し、思ひざし思ひどり、その後は亂舞になる。こゝに復始めたる土器虎が前にぞ置きたりける。取り上げけるを今一度と強ひられて、受けて持ちけるが、義盛これを見て、「いかに御前、その盃何方へも思し召さん方へ思ざしし給へ。これぞ誠の心ならん」とありければ、七分に受けたる盃に、千々に心を使ひけり。和田にさしたらんは時の賞玩異議なし、されども祐成の心のうち恥し。流を立つる身なればとて、睦びし人を打ち置きながら、座敷に出づる

は本意ならず。況してやこの盃義盛にさしなば、さらに愛でたりと思ひ給はんも口惜し。祐成にさすならば、座敷に事起りなん。斯くあるべしと知るならば、初より出でもせで、内にて如何にもなるべきを、再物思ふ悲しさよ。よしよしこれも前世の事。思はざることあらば、和田の前下りにさし給ふ刀こそ、妾がものよ。支ゆる體にもてなし、奪ひ取り、一刀刺し、とにもかくにも思ひ定めて、義盛一目、祐成一目、心を使ひ案じけり。和田は我にならでは、と思ふ所に、さはなくて、「許させ給へ。さりとては、思ひの方を」と打ち笑ひ、十郎にこそさゝれけれ。一座の人々目を見合せ、これは如何にと見る所に、祐成盃とり上げて、「某賜らん事狼藉に似たり。これをば御前に」といふ。義盛聞いて、「志の横取無骨なり、如何でかさるべき。はや〳〵」と色代なり、さのみ辭すべきにあらず。十郎盃とり上げ三度ぞ酌む。義盛居丈高になり、「一年ほど物憂き事はなし。義盛が齢二十だにも若くば、御前には背かれじ。たとひ一旦嫌はるゝとも、かやうの思ひざし、他所へは渡さじ。南無阿彌陀佛」と高聲なりければ、殊の外にが〳〵しくぞ見えにける。九十三騎の人人も、義秀の方を見やりて、事や出で來なんと色めきたる體、さしあらはれたり。十郎もとより騒がぬ男にて、何程の事かあるべき。事出で來なば何十人もあれ、義盛と引つ組んで、勝負をせんずるまで、と思ひ切り、嘲笑ひてぞ居たりける。

七　五郎大磯へ行きし事

こゝに五郎時致は曾我に居たりけるが、父の爲に法華經誦みて、本尊に向ひ念誦しけるが、頻に胸騒しけり。心得ぬ今の胸騒や。いかさま祐成の大磯へ越し給ひぬるが、東國の武士共、富士野へ打出る折節なり。流の遊君ゆゑ事仕出し給ふにや、と心許なく思ひければ、帳臺に走り入り、緋縅の腹卷取つて引つ懸け、伊東重代の四尺六寸の赤銅作の太刀、十文字に結び下げ、鞍置くべき暇なければ、裸馬に打乘り、二十餘町のその程をたゞ一馬場に驅けつけ、見渡せば、長者の門のほとりに、鞍おき馬一二百疋引つ立てたり。遠侍には物の具の音頻にして、唯今こと出で來ぬ、とぞ見えける。入るべきところなくして、門の外を廻り、日比祐成に行き連れて通りし細道を廻り、虎が居所にこそ着きにけれ。さて「十郎殿は如何に」と問へば、「和田殿と盃を論じて、唯今事出で來ぬ」と申す。さればこそ、と思ひ、透垣を跳ね越え、兄の居たりける後の障子を隔て立ちたりけり。時致是にありと知られん爲に、笄にて障子越に、袴の着際を刺しければ、十郎「誰そ」と問ふ。五郎小聲になりて、「時致是にあり」といふ。十郎聞きて、千萬騎の兵を後に持ちたるよりも、頼もしくぞ思ひける。義盛の聲として、「上もなく振舞ふものかな」と聞えける。祐成の御事ぞと心得、

何事もあらば、障子一重踏み破り飛び出でて、一の太刀にて義盛、二の太刀にて朝比奈、その外の奴原何十人もあれかし、物の數にてあらばこそと思ひ切り、四尺六寸の太刀、杖につきて立つ。忍びかねたる有様は、たう八毘沙門の悪魔を降伏し給ふかとぞ覺えける。夕日脚の事なれば、太刀影の障子に透きて見えければ、朝比奈是を見て推量し、誠や彼等兄弟は、兄が座敷にある時は、弟が後に立ち添ひ、弟が座敷にある時は、兄が後にあるものを、如何様五郎は後にありと覺えたり。さしたる事もなきに、大事引き出して、何の益かあらん。又さりとは親しき仲ぞかし。何となき體にもてなし、座敷を立たばやと、思ひければ、紅に月出したる扇を開き、「何とやらん御座敷静りたり。謡へ殿原、はやせや舞はん」とて、既に座敷を立ちければ、面々にこそ囃しけれ。義秀拍子を打立てさせ、

君が代は千代に八千代を細石の
と絞り上げて、
巌となりて苔のむすまで
と短く舞うてをさめけり。

八　朝比奈と五郎力競の事

かくて朝比奈三郎、舞も過ぎぬれば、五郎が立ちたる前の障子を引き開け見れば、案に違はず、時致は四天王を作り損じたる様にて、踏みしかりてぞ立ちたりける。朝比奈過たず、狂言に取りなして、「客人ましますぞや。此方へ入らせ給へ」とて、草摺二三間むずと取り引きけれども、少しも働かず。磐石なりとも、義秀が手をかけなば、動かぬことやあるべきと思ひ、力に任せ、えいやえいやと引きけれども、五郎は物とも思はねば、引くともなく、引かるゝともなく、嘲笑ひてぞ立つたりける。大力に引かれて、横縫草摺こらへずして、一度に切れて、朝比奈は後へどうど倒れけり。五郎は少しも働かで仁王立にぞ立つたりける。扨こそ五郎時致はみぎは優りの大力と、他所の人まで知りにけり。實やこの者の父河津の三郎は、東八箇國に聞ゆる股野五郎に、片手を放ちて角力三番勝ちてこそ、大力の覺は取りたりしぞかし。その子なるをや。力競は叶ふまじ。賺さんものをと打笑ひ、「これへ〳〵」と請ずれば、「餘りの辭退は無禮なり。異體は御免候へ」といひ〳〵座敷に出でけるが、持ちたる太刀と草摺にて、末座なる人々の、頸の廻り側顔を打毆り、さし越え〳〵行き過ぎて、朝比奈が下なる疊に直りける。座敷に餘りて見えたりけり。朝比奈急ぎ座敷を立ち、義盛の前にありける盃を、五郎が前にぞ置きたりける。時致盃とり上げて、酌に立つたる朝比奈に色代して、「御盃の前後は遲參の無禮御免あれ。御盃は賜り候」とて、三度までこそ乾したりけれ。「その盃思ひ取り申さん」とて、元の座敷になほりけり。五郎も酌に手をかけ、「近くもまゐらぬ御酌に、時致立たん」とゆるぎ立つ。四郎左衛門座を立つて、「某是に候」とて、銚子に取りつけば、五郎も暫色代す。義盛これを見て、「客人の御酌然るべからず。それ〳〵」とありければ、常氏酌にぞ立つたりける。朝比奈盃取り上げ三度乾す。その盃を、虎飲みて義盛にさす。その時五郎、扇笏に取直し、「今暫くも候べけれども、曾我にさしあたる用の事御座候。後日におとづれ申さん」とて、兄諸共に立ちければ、虎も同じく立ちにけり。一座も不興至極にして、和田は鎌倉へ通りければ、この人々はうち連れて、曾我へとてこそ歸りけれ。

九　曾我にて虎が名殘惜みし事

まことにこの殿原の事は、これや名鳥昊天に翼をならべ遊ぶと雖も、沼澤に下りてきうそうの憂に遭ひ、大魚深淵の底に尾をふれども、陸に上る思ひありと見えたり。十郎も身に思ひのある者ぞかし。よしなき女の許にて、思はずの難に遭はんとしけるぞ、危ふかりし次第なり。かくて祐成は

虎を具して曾我に歸り、常に住みける所に隱しおき、何時よりも細々とうち語りしは、「この度御狩の御供申し、思はずのおごしの矢にも中り、朽ちはつる埋木ともなるならば、身こそ貧に生れめ、鬢なるちりの見苦しさよ、と人の言はんも口惜し、髮梳りて給び候へ」といひければ、虎は何とも思はで、數の櫛をとり散らし、暫く髮をぞ梳りける。十郎は女の膝に臥しながら、虎が顏をつくづくと見て、祐成を睦じと見んも、これぞ限なるべき、と思へば、流るゝ涙を見て、「例ならぬ御涙心許なさよ。何なるらん」と問ひければ、「今に始めぬ事とは言ひながら、憂世の中の定なさよ。この程のよろづあぢきなく、何事も心細く覺ゆれば、徒に契りおきし同じ世の、名の立つ程も如何にやと思へば、心に浮ぶ涙の零るゝぞ。實にや賴まぬ身の習、歎つ命も露の間も、忌しくこそ思はれ」「實にもさやうに思ひ給はゞ、この度の御狩、思し召し止り給へかし。君に知らるゝ宮仕の、暇なき業にも候はず。止り給へ」といひければ、「思ひ立つ御供なり。何事かは」といひながら、斯程深く思ふ中、思ひ知らせず出でなば、情の色も絕えぬべし。せめて夢程この事を、知らせばやとは思へども、女は甲斐なきものなれば、飽かぬ別の悲しさに、止めん爲に母にもや語り廣めん。この度は思ひ定めたるもの故、叶はぬ事を母聞きて、思ひの種ともなりぬべし。または五郎も怨みなん。思ひ切りたる一大事、女にさぞといはんこと、惡しかるべしと思ひ切り、何としもなく、戲れけり。

忍ぶとすれどその色の、怪しく思ひ奉り、「覺束なし」と問ひければ、深き思ひの切なるに、束の間も思ひ合はする事なくて、はてぬるものならば、後の怨も深かるべし、よし思出に一端を、いひて や心を安むる、と身の有樣を思ふには、憂きが住の詮なくて、世には住まじのその故を、いかにといひて知らすべき。「さればにや祖父入道の謀叛によつて、斬られまゐらせし孫なれば、君にも召し使はれず、御恩蒙ることもなし。況して先祖の本領は、年月餘所に見なすうへ、馬の一疋もけなだらかに飼はず、又父のためとて經卷の一部も書かず。あるとしもなき身の仕儀、人に見ゆるも恥しく、面ならぶる便もなし。さればこの度御狩より歸りなば、出家を遂げ、墨の衣に染めかへて、頭陀乞食して靈佛靈社に參り、父の後世をも弔ひ、わが身をも助からん、と思ひ候なり。世にありとも夢幻の如く、法身を殘すべきにあらず。花山法皇だにも、萬乘の位を去りて、山林に交り給ふぞかし。況してや、貧道、無緣の祐成が、何に命も惜しかるべし。今度の御供を最期に定め、再び歸らじと思へば、飽かぬ別の道すて難くて」と申しければ、虎聞きもあへず十郎が膝にかゝり、暫は物も言はざりけり。稍ありて、「怨めしや、問はずば知らせじと思し召すかや。實妾は大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思し召さじなれども、女の身の果敢なさ、身に代へてもとこそ思ひ奉れ。見え初めしより、などやらん、思ひの色の深草よ、忍の袖の摺衣、忘れ奉る便

もなし。御志は知らねども、御豫言の違ふをば、僞に又なるらんと、心を盡し待たれしに、さやうに思ひ立ち給はゞ、妾も同じく髪剃りおろし、墨の衣に身を窶し、一つ庵にあらばこそ、外に庵室ひき結び、衣を濯ぎて參らせん。香を供へ給はゞ、花を摘み、薪を拾ひ給はゞ、閼伽の水を掬び、一つ蓮の縁をも願はん。その睦をも、否と宣はゞ、山々寺々を修行して、他所ながら見奉らん。それも憚り思し召さば、聞き給へ、身を投げ、一日片時もながらへじ」とて涙に咽び申しけり。誠に十郎が膝の上も虎が涙に浮く許、袖も絞りぞかねたりける。十郎はつくづくと案ずるに、これほど思ひ入りたる志、つゆ程も知らせずして、心強く隱し遂げぬるものならば、長き怨となりぬべし。若し立ち返らぬ習あらば、思ひ出して念佛をも申すべし。さればとて、人に漏すなといはん事を空にやすべき。その上日數なければ、知らせばやと思ひ、「此事母にだにも知らせ奉らで、過ぎしかども、御身のこゝろざし切にして、知らせ奉るぞ。洩し給ふべからず。眞の道心にもあらず、出家また遁世にてもなし。年比祐成が身に思ありとは知り給ひぬらん。その本意を遂げんと思へば、この度出でて後、再び歸るまじければ、相見んことも今宵ばかりなり。さてしも何となく申し契りて、時の間と思へども、三年になりぬ。いつ思出もなく果てん事こそ無念なれ。御志の程こそ有り難く思ひ奉れ。面々如きの人は、祐成風情の貧しく賴む所なきに、何によりてか、露の情もあるべきに、

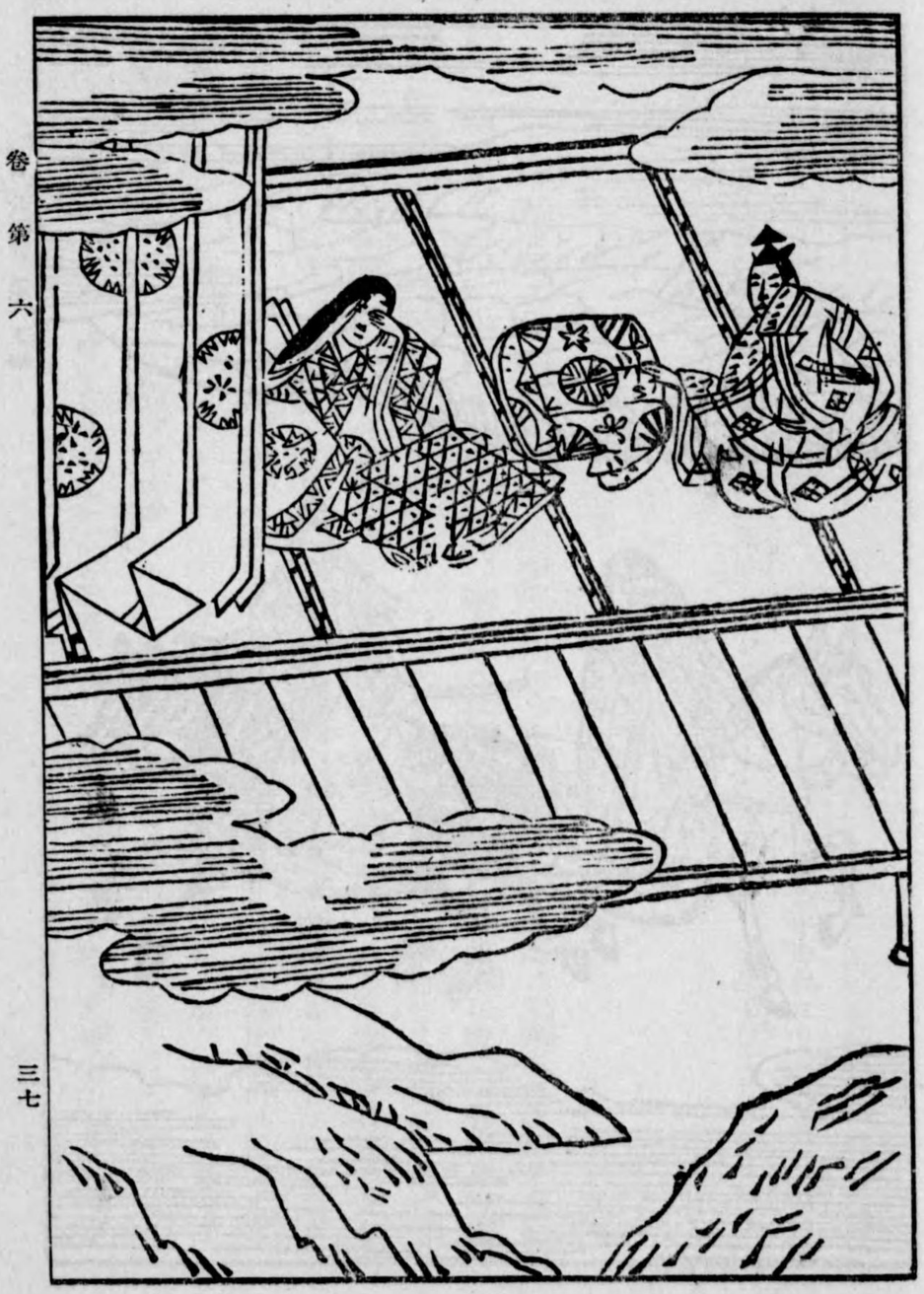
三年の間の顏の、變らぬ色は常磐山、おのれ鳴きてや時鳥、憂世の夢か朝顏の、果敢なくならん身の程を、恥ぢず忘れぬ情の袖、前世の事といひながら、過ぎにし事の恥しさよ。奉公の身ならねば、御恩の時ともいはれず、くわいせんの身ならねば、理のあらん折ともいはれず、思出のなき事を思ひ出し給はんことよ」とて、さめ〴〵と泣きにけり。虎もこの言葉を聞きて、また打伏して泣くより外の事ぞなき。稍ありて起きなほり、「そもこれは何となり行く事どもぞや。是程の大事、はかなき女の身なりとも、いかでか人に洩すべき。一人まします母にだにも、聞かせたてまつらず振り棄てゝ、心強く思ひ立ち給はんこと、數ならぬ妾申すとも、止り給ふべきか。何につけても、飽かぬ別の道こそ悲みても餘りあり。斯樣の大事心おかず知らせ給ふこそ、返す返すも嬉しけれ。さてもこの年月の御馴染、いつの世にかは忘るべき。思ふに叶はぬ事なれども、御物具の見苦しきを、見まゐらする折節は、人々しき身なりせば、などや便にもなり奉らざらんと、しづ心を盡し、明し暮しつるに、世を捨てゝ何處ともなくならんと仰せらるゝをこそ、身の置處なかりしに、思ひも寄らぬ永き別路とならん悲しさよ」とて、聲も惜まず泣き居たり。十郎もせん方なくして、「餘りな歎き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名殘は誰も同じ心ぞ」と慰めつゝ、「これを形見に」とて、「祐成に添ふと思し召せ」とて、鬢の髮を切りて取らせぬ。虎は涙もろともに受け取り、肌の守に深く納め、

物をもいはず伏し沈みぬ。同じ枕にうち傾き、涙に咽ぶばかりなり。日も既に暮れければ、今宵ばかりの名殘ぞ、と思ひ遣るこそ悲しけれ。千夜を一夜に重ねても、明けざれかしと思はるゝ。比さへ五月の短夜の、有明なれば宵の間の、待たるゝ程もなければや、出づると見ればその儘に、傾く空も怨めしく、八聲といふも鶏の、夜やしりふると明け易く、夢見る程もまどろまで、東にたなびく横雲の、東雲しらむ憂枕、まだ睦言の盡きなくに、後朝になる曉の、涙に床も浮きぬべし。互の名殘心のうち、さこそと思ひ知られたり。なほしも虎はうち臥して、消え入るやうに見えしかば十郎彼を勇めんとて、「暇申して祐成は、後生にて參り逢はん」とて驚かせば、起きなほりたるばかりにて、物いふまではなかりけり。「今を限の別なり。後の世までの形見」とて、十郎著たりける目結の小袖に、虎が紅梅の小袖に著換へて、心のあらば移香よ、暫し殘りて憂き別、慰む程も面影の、著換へし衣に留れかし。互の名殘つきせず」と、又諸共にうち伏しぬ。「幾萬世を重ねても、名殘つくべきにあらず。祐成も途まで送り奉るべし。日こそ傾き候へ」とて、葦毛なる馬に貝鞍置かせ、團三郎門の邊に控へたり。「この馬鞍返し給ふべからず。この三年通ひしに、馬は更れど鞍變らず。鞍かはれども馬更らず。今日を最後の別なれば、留めおきて、永き形見とも思ひ給ふべし。但し馬は生あるものにて更ることあり、鞍をば失はで持ち給へ」と、いひ〳〵馬にぞ乘せたりける。

十　山彦山にての事

祐成も送るべしとて、馬に鞍置かせ、打乗りて、「中村通に行くべし。大道は馬鞍見苦し。虎を祐成が思ふとは皆人知られたり。伴の者どもも、かひ〳〵しからず」とて、打連れてこそ送りけれ。曾我と中村の境なる、山彦山の峠まで送り來て、十郎こゝに駒を控へ、今少しも送りたくは候へども、必ずけさより出でんと定めしかば、定めて五郎も來たらん。名殘は盡くべきにあらず。この世にて相見ん事も今ばかりぞ、と思へば、遣る方なくして、涙に咽ぶばかりなり。遠近のたづきも知らぬ山中に、道もさやかに見え分ず、かの松浦佐用姫が領布振る姿は石になる、それは昔の事ぞかし。今の別の悲しさに、駒近々とうち寄せ、手に手を取り組み、涙に咽ぶばかりなり。稍ありて、「祐成が心のうち推し量り給へ。これにて年を送るべきにもあらず。唯一筋に淨土の緣を結ばん。來世を深く賴むぞ」と心强くも思ひ切り、控ふる袖を引き別けて、泣く〳〵立別れけり。げにやかん〳〵の床の上には、遙に契を千年の鶴に結び、ぢんじやの筵の上には、遠く齡を萬劫の龜に歸して契りしかども、遁れぬ別の途は力及ばず。互に後を返り見、坂中にやすらひて控へたり。幽に見えし姿も見えずなり行けば、そなたの空のみ返り見る。足曳の山の彼方の戀しさは、いづれも同じ

心にて、現ともなき涙の袖、夢の如くにうち別れにけり。思ひのあまりに虎が、馬の口控へたる團三郎に泣く〳〵いひけるは、「祐成を見奉らんも、今ばかりの名殘なり。何事も細々と、いひたかりつるを、涙にくれていひも盡さず、取りわき暇乞ひ給へるに、返事せざりし心許なければ、今一度呼び返し奉りてたび候へ。物一言申さん」といひければ、團三郎、「唯世の常の出家遁世にてもなし」とて、さしても騒がざりけるが、斜ならざる互の歎を見て、哀に思ひ、急ぎ走り歸り、遙に行きたりける十郎を呼び返し、もとの峠にうち上り、駒を控へて「何事ぞ」と問ひければ、虎は涙に目もくれて、思ひ設けし言の葉も、何時しか今は失せ果てゝ、鞍の前輪にうちかゝり、消え入るやうに見えしかば、十郎わきていふべき言葉もなくて、唯泣くばかりにてぞありける。稍ありて虎は、息の下にていひけるは、「何時となく、さぞと契らぬ夕暮も、駒の足並轡の音のする時は、若やと思ふ折々の、その人となく過ぎゆけば、その夜は空しく床に臥し、鳥もろともに泣き明かす、枕の上の塵の海、思ひを深く湛へつゝ、夕の鐘の響には、暮るゝ便を待ちかねて、乾されぬ袖のそのまゝに、はかなかりける契かな。三年の夢は程もなく、別るゝ現になりにけり。扨いつの世に廻り逢ひ、斯かる思ひの又もや」と、聲も惜まず泣き居たり。「祐成身の上をつく〴〵思ふに、罪の深きぞ知られたる。幼くして父に後れ、本領だに他所に見なし、母一人の養育にて身命を延ぶると雖も、あるか

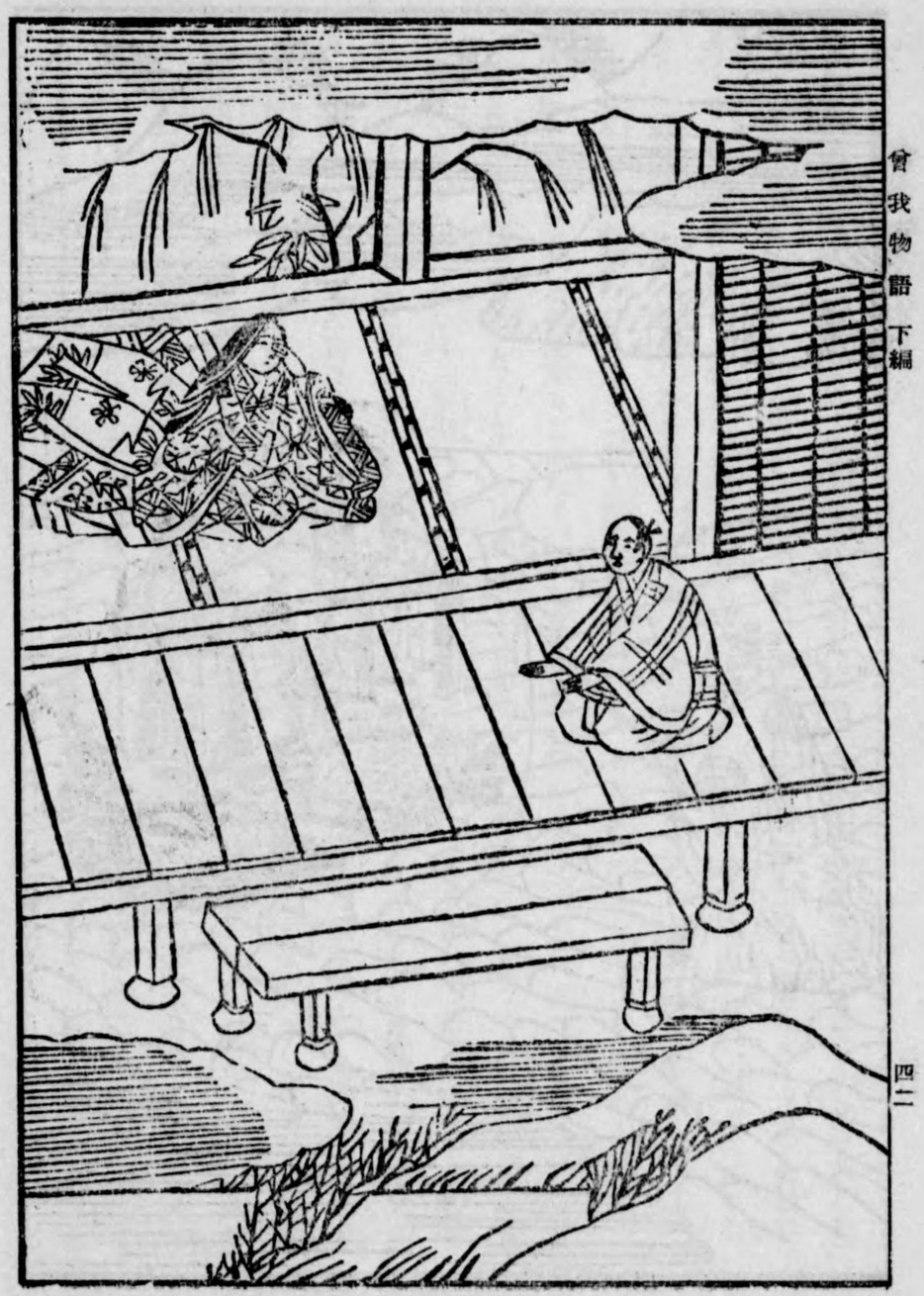


ひもなし。この三年御身にだにも相馴れて、飽かぬ別の悲しさは、歎の中の歎なり。五慾の無常は春の花、娑婆は假の宿なり。秋の紅葉の風散りて、草葉にすがる露の身、後生弔ひてたび給へ」とて、東西へうち別れけり。

十一　比叡山始の事

さても我が朝比叡山の始を聞くに、天地既に別ち、國未だ定らざる時は、人壽二萬歳を保ちける。迦葉尊者は西天に出世し給ふ。大聖釋尊はその教義を得て、都率天に住し給ふ「われ八相成道の後、遺教流布の地、何の處にかあるべき」といふに、この南閻浮洲を普く飛行して御覽じけるに、ゑん〳〵茫々たる大海の上に、一切衆生、四通佛性如來、常住無有變異、かくの如く立つ波の聲あり。この波止らん處、一つの國となりて、わが佛法を弘め、通達すべき靈地たるべしとて、彼の十萬里の滄海を凌ぎて行くに、葦の葉一つ浮びたる所に、この波流れ止りぬ。今の比叡山の麓、大宮權現のおはします波止土濃これなり。されば波止土濃なりと書けり。かく御覽じおきて、釋尊天に上り給ふ。されば葦原の中つ國と申しならはせるは、この一葉の葦の故とかや。日本わが朝は、葦の葉を表するとぞ申しならはせるとぞ聞えし。その後人壽百歳の時、悉達太子と生じて、

八十年の春の比、頭北面西の時、跋提河の波と消え給ふ。されども佛は常住にして、不滅なりしかば、無縁法界の妙諦をあらはし給ふなれば、葦の葉の島となりし、中つ國を御覽じける時、鷓鴣草葦不合尊の御代なれば、佛法の妙事を人知らず。こゝに漣や、滋賀の浦の邊に、釣をする老翁あり。釋尊彼に向ひ、「翁もしこの處の主たらば、この地を我に得させよ。佛法結界の地となすべし」と宣へば、翁答へて申さく、「吾人壽六萬歳の始より、この處の主として、この湖の七度まで、葦原になりしをも、正に見たりし翁なり。さればこの地、結界となるならば、釣する所なかるべし」と深く惜み申せば、釋尊力なくして、今は寂光土に歸らんとし給ふ時に、東方より淨瑠璃世界の藥師如來、忽然と出で給ひて、「善哉や〳〵はや〳〵佛法を弘め給へ。吾人壽八萬歳の始より、この處の主なれども、老翁未だ我を知らず、何ぞこの山を惜み申すべき。はや佛法を弘め給へ。吾もこの山の守護として、共に五五百歳まで佛法を弘むべし」とて、二佛東西に去り給ふ。その時の老翁は今の白鬚の大明神にてまし〳〵ける。東方よりの如來は、中堂の藥師にてぞまし〳〵ける。釋迦藥師の東西に歸り給ひき。今の十郎と虎がゆき別るゝには、違ひぬる心なるをや。蝸牛の角の上何事をか爭ふ、石火の光のうちに、この身を寄せつらん。名殘の道盡くべからず、後世參り逢はん、といふ中にも、團三郎が心も恥しとて、思ひ切りてぞ別れける。虎は峠に手綱ひかへ、祐成の後姿の



暮るゝまで見送りける。さてしもあらねば、泣く〳〵大磯にぞ歸りける。母の許に入りしかば、友の遊君ども廣縁に出でて、「思ひ掛けざる今の御入かな。何時となき山路の寂しさ、推し量りて」など戯れけれども、虎は馬より下るゝと同じく、衣ひきかづき打ち臥しぬ。遊君ども集りて、「何とてこれ程御歎き候やらん。十郎殿に捨てられおはしますか」と、様々に慰めけれども、かくといふべき事ならねば、唯うち臥し泣き居たり。人々討たれての後にこそ、かくとは申し聞かせけれ。團三郎申しけるは、「殿も今朝より御出あるべきにて候。急ぎ御暇を申さん」といふ。虎は彼を近く呼び寄せて、「三年が程馴れにし汝にさへ、別れなん事もやあらん、と思へば」とて、袖を顔におし當て、さめ〴〵と泣きければ、團三郎返事にも及ばず、涙を流しけり。「昔が今に至るまで、主從の緣淺からぬ事ぞとよ。構へて、思ひ忘るな。二世までも朽ちせぬものぞ」といへば、團三郎暇乞ひて出でにけり。志は二世までも盡きせじとこそ覺えけれ。

十二　ぶつしやうこくの雨の事

されば緣により佛果を得る事を思へば、昔ぶつしやうこくに血の雨降りて、國土、紅なり。帝大きに驚かせ給ひて、博士を召して御尋ありければ、占象をひき申しけるは、「今宵不思議の子を生む

ものあり。尋ね出して遠き島に捨てらるべし」と申しければ、舎衞城のうちに、その夜子生みしもの千人なり。その中より選び出して見るに、口より焔を吹き出す子を生みたる者あり。即ちこれを人まうとぞ名づけゝる。これ不思議の者とて、官人に仰せ付けて島に捨てけり。然るにこの人まう、やう〳〵成人する程に、猛き鬼の姿になりにけり。この島に來る者を洩さず取りて喰ふ。また國に罪ある者をこの島に流せば、これをも取りて喰ふ。七萬二千人までぞ喰ひける。その罪盡し難し。佛これを愍み給ひて、阿難尊者を使ひ奉りて、善知識たち引導し給ひけるとかや。人まうは阿難を七度見奉りし結縁に、七度天上に生じて佛果を得たりとなり。かやうの縁を思ふには、彼等が後世もなどや一つ蓮に生ぜざらん、頼もしくぞ覺えし。さて十郎が心の猛きこと、四方にも聞えしかども、さしあたりたる恩愛の道には、迷ふ習なり。實に夏の蟲の飛んで火に入り、秋の鹿の笛に心を亂し、身を徒になすこと、高きも卑しきも力及ばぬは、この道なり。八つの苦の中にも、愛別離苦と說かれたり。内典外典にも深く戒め給ふとなり。

十三　嵯峨の釋迦作り奉りし事

さても五郎待遠なる折節來りて、「この者を送りし今まで時を移しぬ。如何に遲しと不思議に思ひけん」とぞ申しける。五郎承り、「昔もさることの候。釋尊母の報恩の爲に忉利天に上り給ふ。帝釋聞き給ひて、毗首羯磨といふ天人を下し給ふ。優塡王悅びて旃檀にて如來を作り奉り、何を寫したる姿とも見えずぞ作りける。優塡王悅の餘りに、毗首羯磨を止められければ、「吾はこれ善法の胎宮なり。留るべからず」とて、遂に天に上りぬ。その像を、玄奘三藏盜み取りて、この國に渡し、多くの衆生を濟度し給ふ。今の嵯峨の釋迦これなり。ましてや人間として、如何でか恩愛を、思はざるべき」十郎聞きて「大きに違ふ心かな。優塡王は利益方便の戀なれば、愚癡凡夫輪廻の執着なり。一つにあらじ」と笑ひて、各富士野の出立をぞ急ぎける。

卷第七

一　千草の花見し事

それ迷の前の是非は、是非ともに非なり。夢の中の有無は、有無ともに無なり。されば我等が身の有様、あればあるが間なり。夢の憂世に、何か現と定むべき。されば刹那の榮花にも、心をのぶる理を思へば、無爲の快樂に同じ。いざや最後の眺して暫しは思ひを慰まんとて、兄弟ともに庭に下りて、植ゑ置きし、千草の榮えたるを、見るにも名殘ぞ惜しかりける。心のあらば草も木も、いかでか哀を知らざるべきと、彼方此方に休ひけり。是によそへて古き歌を見るに、

古里の花のものいふ世なりせばいかに昔の事を問はまし

今更思ひ出でられて、情を殘し、哀をかけずといふ事なし。五郎聞きて、「草木心なしとは申すべからず、釋迦如來、涅槃に入らせ給ひし時は、心なき植木の枝葉に至るまでも、歎の色を現しけり。我等が別を惜しみ候やらん。いかでか知り候べき」とて、草を分けゝれば、卯の花の莟みたるが一

房落ちたりけり。十郎これを取り上げて、「いかに見給へ五郎殿、老少不定のならひ、今にはじめぬ事なれども、老いたる母留り、若き我等が先立ち申さん事、是に等しきものを、開きたるは留まり、苔みたるは散りたるとや。名にし負ふ忘草ならば、名殘を思ひてや散りつらむ。それは昔住吉に、諸神影向なりける事あり。御歸を留め奉らんとして、此の花を植ゑて忘草と名づけ給ひけるなり。歌にも、

もみぢては花咲く色を忘草ひとあきながらふたまちのころ

其の忘草は、紫苑とこそ聞きて候へ」とて、なほ草村に分け入りければ、深見草の盛と咲きたるを見て、「卯の花は苔みてだにも散るに、此の花の思ふ事なげにさかりなるや。いかに咲くとも二十日草、盛も日數もあるなれば、花の命も限あり。あはれ身にしむ心かな」と涙ぐみければ、五郎聞きて、「此の草の事は、花開き落ちて千日同じく、一城の人誑すが如しと見えたり。これが樂府の詞なり。又歌にも、

名ばかりは咲かでも色の深見草花さくならばいかで見てまし

と口ずさみければ、十郎聞きて、「此の歌は未だ咲かざる時も、色深き草とこそ詠みたれ、盛の花には心や違ふべからむ」と戯れけるにも、哀を殘さぬ言の葉はなかりけり。無慙なりし志どもなり。

「さても我等が思ひ立つ事、母に露程もしらせ奉るべきか。はからひ候へ」といひければ、時致聞いて、「思ひもよらぬ御事なり。是程思ひ定めざるときは知らず、今はいかでか事變じ候べき。其の上人の子が、謀叛起して出で候はんに、其親聞きて、急ぎ死にてもの思はせよとて、悦ぶ母や候べき。それがしはたゞ、御形身を給はつて、最期まで身に添へ、此方よりもまた參らせて、罷り出でんとこそ存じ候へ」十郎聞きて、「實に此の儀然るべし。さらば其の序に、御分が勘當をも、申し許して見ん」とて、母の方へぞ出でたりける。

二　小袖乞の事

十郎御前に畏り、扇笏に執り申しけるは、「奉公を致し御恩被るべき身にては候はぬども、末代の物語に、富士野の御狩の御供に思ひ立ちて候ふ。恐入りたる申事にて候へども、御小袖一つ借し給はり候へ」と申しければ、母聞きて、「君臣を使ふに禮を以つてし、臣君に仕ふるに忠を以つてす、と論語の中に候ぞや。何の忠によつてか御感もあるべき。御恩なくば無益なり。あはれ此度の御供、思ひ止り給へかし。それをいかにといふに、伊東殿の父、奥野の狩場より、病づきて歸り、幾程なくて死に給ひぬ。御分の父河津殿、狩場にて討たれ給ひぬ。かゝる事どもを思ひつゞくるに、狩場

ほど憂き所なし。しかも謀叛の者の末、上にも御許なきぞかし。又馬鞍見苦しくて物を見れば、却つて人に見らるゝものを、思ひ留りて、親しき人々の方にて、慰み給へ。斯様に申せば小袖惜しむに似たり。善くは無けれども、紋柄面白ければ」とて、秋の野に、草盡縫うたる、練貫の小袖一つ、取り出してたびにけり。十郎畏つて障子の中にて着替へ、我が小袖をば打置きて出でぬ。亡き後の形見にとぞ思ひ置きたりける。五郎は不孝の身にて、兄が方に空しく泣き居たり。よく〳〵物を案ずるに、母の不孝を許されずして、死なん事こそ無念なれ。推參して見ばや。生きたる程こそ仰せらるゝとも、死して後悔み給はん事疑なし。思ひきり申して見んとて、母の方へは出でたれども、さすがに内へは入り得ず。廣縁に畏り、障子を隔てゝ、「そも誰が御子にて候はん。時致にも召替の御小袖一つ賜りて、狩場の晴に着候はん」母聞きて、「誰そや、來りて小袖一つといふべき子こそ持たね。十郎は只今取りて出でぬ。京の小次郎は奉公の者なり、二宮の女房は、又かやうにいふべからず。禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後にあり。又箱王とて惡物のありしは、勘當して行末知らず。是はたゞ、武藏相摸の若殿原の貧なる妾を笑はんとて、かく宣ふと覺えたり。然も留守居の體見苦し。早門の外に出で候へ」と、事の外にぞ宣ひける。時致思ひ切りたる事なれば、「箱王が參りて候」「それは誰が許しおきたるぞ。女親とて卑しみ候か。左様には候

まじ。とても斯様に侮らるゝ身、七代まで不孝するぞ。對面思ひもよらず」とぞ言はれける。五郎は許さるゝ事は叶はずして、結句後の世までと、深く勘當せられて、前後を失ひ、思ひにばうじ果てゝぞ居たりける。稍ありて小聲になりて申しけるは、「斯様の身に罷り成りて、重ねて申し上ぐべき事、上までは恐にて候へば、女房達、心ある人あらば、聞こしめせ。人の親のならひ、盗する子は憎からで、繩造る者を恨むるは、常の親のならひにて候ぞや」母聞きて、「左様ならん者を、和殿が母にして、妾がやうなる者をば、親とな思ひそとよ。人の言葉を重くせず、言葉をかへすは善き子かとよ」「御言葉を重くして、御返事を申さじとてこそ、御前の人々には申し候へ」「左様に申すはかへり事にては無きか。一念の嗔恚には、具胝劫の善根をたき、刹那の怨がいには、無量億劫の苦報を招く。聞けばいよ〳〵腹ぞ立つ。其の座敷立ちて」と宣ふ。「恐れながら普門品をば、遊ばし候はずや」「いかなる觀音の誓にも、捉を背く者を許し候へとは、説き給はぬぞとよ」

三　しやうめつ婆羅門の事

「恐れながら、事長く候へども、聞し召され候へ。昔天竺に、しやうめつ婆羅門といふ人あり。物の命を千日に千殺し、悪王に生れんといふ願を起し、早九百九十九日に、九百九十九の生物を

殺し、今千日に滿ずる日、西山に上りて見れども無し。曲江に下り船に乘り、海中に出でて、比翼の龜を一つ捕りて、害せんとす。母是を悲みて、渚に出でて見れば、波風高くして、雲雷電夥しき其の中に、婆羅門龜を害せんとす。母是を見て、其の龜放せ。汝が父の命日ぞ。婆羅門聞きて、忌日ならば沙門をこそ供養せめといひて、おさへて殺さんとす。龜涙を流して、我八十年後、可不墮地獄、大慈大悲故、畢生安樂國、とぞ泣きける。母是を聞き、汝龜の言葉を知れりや。知らずと答ふ。龜は罪深きものにて、萬劫の罪障を經盡し成佛すべきに、今劔に從はゞ、又多劫を經かへすべき事の悲しさよとなり。願はくは、其の龜を放して、自らを殺し候へ、といふ。誠に龜の命に代り給ふべきにや、と言ひも果てず、龜を海上に投げ入れ、即ち劍を拔きて母に向ふ時、天神地神も是を捨て給へば、大地裂け割れて、奈落に沈む。母を殺さんとする子の命を悲しみて、心ならずに母走り向ひて婆羅門が髻をとり給へば、即ち頭髮は拔けて、母の手にとまり、其の身は無間に沈みけり。されども龜を放せし功力によつて、佛果を得、法華經の普門品に、婆羅門神と說かれたり。斯樣の子をだにも、親は憐むならひにて候ものを」母聞きて、「や殿、それも、母がいふ事を聞きて、龜を放ちてこそ、成佛はし給へ。汝何とて妾が教を聽かざるぞ」「惡き子を思ふこそ、實の親の御慈悲にては候へ。又母の憐の深きには、事長く候へども、或國の王、一人の太子の無き事を歎

き、天に祈りし感應にや、后懐妊し給ふ。國王の悦び斜ならず。されども三年まで生れ給はず。公卿詮議ありて、博士を召して尋ね給ふ。勘文に曰く、御位は轉輪聖王たるべし。但し御産は平らかなるまじ、と申す。后聞き給ひて、賢王の太子いかでか空しくすべき。自らが腹を裂き破つて、王子を恙なく取り出すべしと宣ふ。大王大きに御歎あつて許し給はず。后さらば干死にせんとして、食事を留め給ひしかば、力なく大臣に仰せつけて、御腹を裂かれにけり。其のなかばに后仰せられけるは、太子の誕生如何と問はせ給ふ。御恙なしと申せば、悦び給ふ色見えて、うち笑みたるまゝ、御年十九にてはかなく成り給ひぬ。さて此の太子、御位に即き給ひしが、母の御志を悲み、御菩提の爲、三年胎内にして苦め奉りし日數、千日にあてゝ、千間に御堂を建て給ひけり。今のしかん寺是なり。日本には西の寺なり。さればにや、后即ち成佛し給ふ時に、こんれんだいを傾け來迎し給ふ。其のしこんに準へて、藤を多く植ゑられたり。さてこそ藤の名所には入りたりけれ。母親の慈悲は斯様に候ひしなり」母聞きて、「老いたる自らがあはぬ敎のむつかしくて、腹をも裂きて死に亡せよとな。汝も母と見ず、妾も子とも思はぬぞ」とて、障子荒らかにたて給ふ。時致は此の度許し給はずしては、永劫を經るとも叶ふまじければ、五郎うちふてゝ。

四　班足王の事

「仁王經の文をば、御覽じ候はずや。昔天竺に帝一人ましますに、太子おはしき。名をば班足王と申す。外道羅陀の教訓につきて、一千人の王の首を取り、塚の神に祭り、其の位を奪ひ、大王にならんとて、數萬の力士を集めて、東西南北、遠國近國の王城に、押し寄せ〳〵からめ捕り、既に九百九十九人の王をとり、今一人足らでいかゞはせん、といふ。或外道教へて曰く、是より北へ一萬里行きて王あり、名をふみやう王といふ。是をとりて一千人に足すべしといふ。やがて力士を差し遣し、彼の王をとりぬ。今は千人に滿ちぬれば、一度に首を斬らんとす。こゝにふみやう王合掌して曰く、願はくは我に一日の暇を得させよ。故郷に歸り、三寶を請じ頂戴し、沙門を供養して、闇路の便にせんといふ。易き間の事とて、一日の暇をとらす。其の時王宮に歸り、百人の僧を請じて、過去七佛の法より、般若波羅蜜を講讀せしかば、其の第一の僧、ふみやう王の爲に偈を說く。こうせうしうこつ、けんこんとうねん、須彌巨海、といけやう、と述べ給ふ。ふみやう王此の文を聞きて、四大十二因緣を得たり。法華無くうを悟る。さればにや班足王、諸法空の道理を聽聞して、忽に惡心を翻して、捕籠むる千人の王に曰く、面々の科にあらず。我外道に勸められ、惡

心を起す、不思議の至なり。今は功け奉るべし。急ぎ本國に歸り、般若を修行して、佛道をなし給へ。即ち道心起して、無上ほうにんを得たりと見えたり。是もふみやう王を許してこそ、俱に佛界を得給ひしなり」母聞きて、「其の如く佛果を請じて、多くの人を助くべき、汝などや法師になりて妾をば救はぬぞ。實や重きに從つて、道遠ければ、休む事地を選まずして仕へよとこそ、古き言葉にも見えたれ。何とて妾がいふ事を聞かざるぞ」五郎も思ひきりたる事なれば、居直り畏つてただ、「御慈悲には御許し候へ」とのみぞ申し居たりける。十郎は我が所にて、五郎を待てども見えざりけり。餘におそければ、又母の方に行きて見たれば、五郎内までは入り得ず、廣緣に泣きしをれて居たり。餘りに無慙に覺えて、障子を引き明け、畏つて、五郎が理をつく〳〵と聞き居たり。やゝありて、「某兄弟數多候へども、身の貧なるによつて、處々の住居仕る。たゞあの者一人こそ連れ添ひては候へ。祐成を不便と思し召され候はゞ、御慈悲を以つて御赦し候へかし。御子とても御身に添ふ者、我等二人ならでは候はぬぞかし」母聞きて、「心にあふ時は、吳越もらんていたり　合はざる時は、骨肉も敵たうたり。智者の敵とはなるとも、愚者の伴とはなるべからず。位の高からぬをば歎かざれ、智惠の深からぬをば歎くべしとは、漢書の辭ならずや」十郎承りて、「それはさる事にては候へども、觀經の文を見るに、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父

母と說かれて候。此の文を釋すれば、佛は衆生を思し召さるれども、衆生佛を思ひ奉らぬとこそ見えて候へ。親として子を思はぬは無き者をや」。母聞きて、「汝等は親のよきを申し集むるかや。いで又自ら子の孝行なる事をいひて聞かせん。孟宗は雪の中に笋を得、王祥は氷の上に魚を得、くわげんは眼を拔き、をんしやうは耳を燒き、ちそくは足をきる、せんめん舌を拔き、くわそくはを施し、くわうふめいは身を溫め、をしき子を殺す。是れ皆々孝行の爲ならずや。扁鵲もしんやくをしやうぜざる病をば治せず、げんしやう王も善言の聞かざる君をば用ひず、とこそ申せ。人の詞を聽かざる者、何の用にかたつべき。其の上不孝の者をば、同じ道をも行くべからず。急ぎ出でよ」とぞいひける。祐成重ねて申しけるは、「一旦の御心を背き法師にならざるは、不孝には似て候へども、父母に志の深き事は法師によるべからず。僧俗の形にもよらず。時致箱根に候ひし時、法華經一部讀み覺え、父の御爲にはや二百六十部讀誦す、毎日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向申す、と承り候へば、大地を戴き給ふ堅牢地神も、地の重き事は候まじ。不孝の者の踏む跡、骨髓に徹りて悲み給ふなり。一つは彼の御跡をも弔ひ、一つは御慈悲を以つて祐成に御宥し候へかし。父に幼少より後れ、親しき者は身貧に候へば、目も懸けず。母ならずして、誰か憐み給ふべきに、斯樣に御心强くましませば、立ち寄る蔭もなきまゝに、乞食とならん事不便に覺え候ぞや」あはれ實に今

を限りと申すならば、いかゞ安かるべきを、申すべき事ならねば、忍の涙に目もくれて、しばしは物をも言はざりけり。なほも「宥す」と宣はねば、十郎怒りて見ばやと思ひて、持ちたる扇さつと開き、大きに目を見出し、「兎ても角ても生甲斐なき冠者、ありても何か益あらん。御前に召し出し、紐首うち落して、見参に入れん」と、大聲を出して座敷を立つ。女房達驚き、「いかにや」とて取りつく袖にひかれて、板敷荒く踏み鳴し怒りければ、母も驚きすがりつき、「物に狂ふかや殿、身貧にして思ふ事叶はねばとて、現在の弟の首を斬る事やある。それ程迄は思はぬぞ。しばしや殿」とて取りつき給ふ。事こそ善けれと思ひければ、「助け候はん。御宥し候へ」といふ。母、「さらば宥す。留り候へ」と宣へば、其の時十郎怒を留めて、聲を柔にし座敷になほり、畏り居たりける。されども忍の涙のすゝみければ、とかく物をば言はざりけり。五郎も恨の涙をひきかへて、嬉しさの忍の涙しきりにして、前後を更にわきまへず、たゞ慎んでぞ居たりける。

五　母の勘當宥されし事

やゝありて十郎座敷を立ち、「御宥あるぞ時致、こなたへ參り候へ」五郎はしをるゝ袖に忍びかね、暫しは出でこそかねたりけれ。暫くありて時致袖うち拂ひ、顔おしのごひ出でければ、十郎も嬉しく

あはれにて、打傾き居たり。兄弟共に物をも言はす、只さめ〴〵と泣き居たり。母此の有様を見て、「實にや親子の中ほどあはれなる事なし。年老い身貧にして、人數ならぬ妾が詞ひとつを重くして、泣きしをるゝ無慙さよ。片端なる子をだにも、親は愛しむならひぞかし。いかでか憎かるべき。たゞ善かれと思ふ故なり」といひもわかで、母も涙を流しけり。其の後兄弟の者ども畏り居たるを、母つく〴〵と守り、いつしかの心地して、「汝自らを愚にやおもひけん、十郎がある處を見つるに、五郎ありといふ時は心やすし。無しと聞けば心許なくて、妾も立ちて見るぞとよ。此の三年が程うち添はで、怨めしく悔しく思はれて、つく〴〵と見るに、直垂の衣紋、袴のきぎは、烏帽子のざしきに至るまで、父の思ひ出でられ、昔に袖ぞしをれける。さても五郎は箱根にても聞きつらむ、十郎はいかにして經文をば知りけるぞや」祐成承つて、「馬瘠せては毛長く、嘶ふるに力なし。人貧にして智短く、言葉賤し。何によつてか尊くも候べき」女房達聞きて、勸學院の雀とかや申しければ、母打笑みて、「それ〳〵酒飲ませよ」と有りければ、種々の肴盃取り添へて、二人の前にぞ置きたるける。母取り寄せ飲みて、其の盃十郎飲む。其の盃五郎三度ほして置きければ、其の盃母取り上げて、「三年不孝の事只今宥したるしるしに、此の盃思ひどりにせん。但し親と師匠に盃さすは、必ず肴の添ふなるぞ。當時鎌倉にては、秩父の六郎が今様、梶原源太が横笛と聞く。されども他人なれば見もし聞きもせらればこそ。和殿は箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり。忘れずば舞ひ候へかし」十郎腰より横笛取り出し、平調に音とり、「いかに〳〵遅し」と責めければ、暫し辭退に及びけるを、十郎はやし立てゝ待ちければ、五郎扇ひらき、かうこそ謠ひて舞うたりけれ。

君が代は千代にひとたび居る塵の白雲かゝる山となるまで

とおしかへし〳〵、三遍踏みてぞ舞うたりける。其の儘調子をふみかへて、

わかれのことさら悲しきは親の別と子の歎、夫婦の思ひと兄弟と、

いづれをわきて思ふべき。袖に餘れる忍音をかへして留むる關もがな。

と二遍ぜめにぞ踏みたりける。母は昔を思ひ出づれば、彼等はさてもうき命、近きかぎりの涙の露、思はぬよそ目に取りなして、袖のかへしに紛らかし、しばし舞うてぞ入りたりける。かくて酒も過ぎければ、十郎畏つて、「今度御狩に罷り出で、兄弟が中にいかなる高名をも仕り、思はずの御恩にも預り候はゞ、卒塔婆の一本をも心易くきざみ、父聖靈に供へ奉らばやと存じ候」母聞きて、「などやらん此の度の御狩の御供、心もとなく覺ゆるぞや。よき程にも候はゞ、思ひ留り給へかし。さりながら衣裳の望もあれば、小袖惜むに似たり。それ〳〵女房達」と宣へば、白き唐綾に、鶴の丸ところどころ縫ひたる、小袖一つ取り出し、「十郎にも取らせぬるぞ。失はずして返し候へ。十郎

は常に小袖を借りて返さず。是は曾我殿の見知りたる小袖なり。二度とも見えずは、又例の子供に取らせたり、と思はれんも恥かしゝ。小袖をしたゝめて置くべし。構へて〳〵疾く歸り給へ」とありければ、「承り候」とて、綿貫の着損じたるに脱ぎ更へ、「見苦しく候へども、人にたび候へ」とてぞ置きにける。小袖のほしきにはあらねども、互の形見のかへ衣、袖なつかしく打置きけり。扨も兄弟は座敷を立ちければ、母見送り宣ひけるは、「過ぎにし比十郎小袖を借り二度とも見せず。いかなる遊びものにも取らせぬるよ、と思ひしに、さはなくして、弟の五郎に着せけるぞ。又近きころ大口直垂仕立てゝ取らせしを、是も二度とも見せざりしが、團三郎に着せたりと思へば、是をも弟に着せけるぞや。誠に兄弟をば、野の末山の奥にも持つべかりけるものをや。父には幼くして後れ、一人ある母には不孝せられ、貧なれば親しきにも疎くなり、あるか無きかの世になし者、誰やの人か憐むべき」とて、涙をはら〳〵と流し給ひければ、其座にありし女房達倶に袖をぞ濡らしける。さて兄弟の人々は、我が方様に歸り、小袖を中におき、「嬉しくも推參しつるものかな。只今宵されずしては、多生劫を經るとも叶ふまじ。生きて二度歸るべきやうに、小袖返せ、と仰せられつるこそ愚なれ。何しに返せとは言ひつらん、神ならぬ身の悲しさよ、と後悔し給はん事今の様に覺えたり」とて、打傾きてぞ泣き居たる。「我等世にありて、心のまゝに親孝養をも致さば、是程までに給へる父を思ひて、孝養せんとすれば、生き給へる母に物を思はせ奉る。されば我等ほど親に縁なき者はなし。後の世まで盡きせぬものは、たゞ手跡に過ぎたる形見はなし。今や我等一筆づつ忘形見を殘さん」とて、墨すり流しかくばかり、

今日出でてめぐり逢はずは小車のこのわのうちに無しと知れ君

祐成生年二十二、後の世の形見

とぞかきける。

ちゝぶ山おろす嵐のはげしきに枝散り果てゝ葉葉〔母〕いかにせん

五郎時致生年廿歳、親は一世の契とは申せども、必ず淨土にては參り逢ふべし

思はぬ事もありぬべし、此の三年こそ不孝の身にては候へ、それさへ戀しく思ひ奉りし折は、或時は物ごしにも見奉りて慰みしに、只今御宥を被り、一日だにもなくして出でん事こそ悲しけれ。死とこそ書きたりけれ。各々箱に入れて、「我等討たれぬと聞き給はゞ、此所に轉び入りて、伏し沈み給ふべし。いざやこしらへせん」とて、疊敷き直し、めん廊の塵うち拂ひ、先見給ふ様にとて、さしいりの障子の際にぞ置きたりける。「空しき人をば常の所よりは出さず、我等死人に同じ」とて、厩のあれ間より出でたりける。最後の文にこそかやうの事まで書きにけれ。かくて出でけるが、「い

ざや今一度母を見奉らん」とて、暇乞にぞ出たりける。母宣ひけるは、「構へて人と諍し給ふな。世にある人は貧なる者をば、烏滸がましく思ひ侮るべし。左様なりとも咎むべからず。三浦土肥の人々は、さやうにはあらじ。其の人々に交り睦び給へ。心のはやるまゝに、人のあひつけたる鹿射給ふべからず。公方の御許もなきに、弓矢持たずとも出で給ふべし。謀叛の者の末とて、咎めらるる事もやあらん。いかにも事過し給ふな。年比憎まれずして養ぜられたる曾我殿に、大事かけて恨かけ給ふな」と、細々とぞ教へける。五郎は聞きても色に出さず、十郎はかやうの教も今を限と思ひ、心の色も現れて涙ぐみければ、急ぎ座敷を立ちにけり。五郎も名残に涙を押へかね、よそめにもてなし立ちけるが、妻戸の敷居に蹴躓きうつ伏にこそ倒れけれ。されども人目に漏らさじとて、「色ある小鳥の、東より西の梢傳ひしを目にかけ、思はずの不覺なり」とて打笑ひける。母是を見給ひて、「今日の道思ひ留り候へ。門出悪しゝ」と有りければ、五郎立ち歸り、「馬に乗る者は墜ち、道行く者は倒る、皆人ごとのならひぞかし。さればとて留り候はんには、道行く者も候はじ」と、打連れてこそ出でにけれ。五郎はなほ母の名残を慕ひつゝ、今一度とや思ひけん、「扇の見苦しく候」とて歸りにければ、母是をば夢にも知らずして、「折節扇こそなけれども」とてたびにけり。時致これも形見の數と思ひ、母の賜りけるよ、と思へば、扇さへなつかしくて、開きて見れば、霞に雁

をぞ書きたりける。折にふれなば夏山の、繁る梢の松の風、五月雨雲の晴間より、遠里小野の里續き、我等が道の行末も、顯るべきに、さはあらで、其の色違ふも理なり。憂身の上と案ずれば、古き歌を思ひ出でて、

同じくは空にかすみの關守りて雲路のかりをしばしとゞめむ

これは爲世の卿の詠みし歌ぞかし。我等限の道を歎けども、誰ありて留むる者もなきに、扇心のあるやらん、しばしといふ言の葉の詠まれけるかな。さても十郎が供には團三郎なり。五郎が供には鬼王、其の他四五人召し具して、打出でける有樣、母は女房達ひき連れ、廣緣に立ち出で見送り、さま〳〵にぞ宣ひける。「直垂の着樣、行滕の引合、馬の乘姿、手綱の取樣、十郎は父に似たれども、器量は遙の劣なり。五郎は烏帽子のざしき、矢の負樣、弓の持樣に至るまで、穩なる體、父には少し似たれども、是も遙の劣なり。山寺にて育ちたれども、色黑くげすしく見ゆる。十郎は里に住みしかども、色白く尋常なり。我が子と思ふ故にや、いづれも清げなる者共かな。いかなる大將軍といふとも恥しからじ。あはれ世にあらば、誰にか劣るべき。同じくは彼等を、父諸共に見るならば、いかに嬉しくありなん」と、さめ〳〵とこそ泣き給ふ。女房達これを見て、「物への御門出に、御涙いまはし」と申しければ、「誠に彼等が貧なる出立、漫なる事ども思ひつらねられて、袖のみ昔

にぬれ候ぞや。げに〳〵千秋萬歳と、榮ゆるべき子どもの門出なり。嬉しくも言ひ出し給ふものかな。此の度御狩より歸りなば、上の御めん被り、本領悉く安堵して、思ひのまゝなる歸るさを、待つべき」とてぞ、急ぎ中にぞ入り給ふ。後に思ひ合すれば、これぞ最後の別なりと、今こそ思ひ知られけれ。哀なりし次第なり。

六　李將軍が事

扨も鎌倉殿は、相澤が原に御座の由聞えしかば、此の人々も駒に鞭を添へて急ぎける。道にて十郎いひけるは、「名殘惜しかりつる故郷も、一筋に思ひきりぬれば、心のひきかへて先へのみ急がれ候ぞや」時致聞きて、「さん候。思ふ程は現、過ぐれば夢にて候。心のまゝに本意を遂げ、浮世を夢になし果てゝ、早く淨土に生れつゝ、戀しき父、名殘惜しかりつる母、かく申す我等まで、一つ蓮の緣とならむ」とて、ひつかけ〳〵うつて行く。稍ありて十郎申しけるは、「我等が有樣をものに譬ふれば、命々鳥に似たり。それをいかにといふに、大唐しくう山に雪深うして、春秋をわかざる山あり。其の山に頭は二つ、胴一つある鳥あり。彼の山には、青き草なければ、食ふべきものなし。されば、其の左の頭、偶餌食を求め服せんとすれば、右の頭中にて、取りて奪うて食ふ。或時、思

ひけるは、所詮毒の虫を求め、右の頭を退治せんと思ひ、毒の虫を求めいつもの如く服せんとす。彼の頭また奪うて食ふ。されば胴一つにてありぬれば、其の身もいかでたまるべき、遂に空しくなる。其の鳥も明暮に、右は左をとらん、左は右をとらんとせしぞかし。我等も敵の手にやかゝらん、敵をや手にかけん、と思ふ憂身のながらへて、いつ迄物を思はまし。此の度はさりとも」と申しければ、五郎聞きて、「弱き御譬を仰せ候ものかな。何によつてか空しく敵の手にかゝり候べき。本意を遂げて後は知り候はず、それは兎も角も候ひなん。事長くは候へ共、昔大國に李將軍とて、猛く勇める武勇の達者あり。一人の子の無き事天に祈る憐みにや、妻女懷姙す。將軍喜ぶ處に、女房言ふ樣、「生きたる虎の肝をこそ願ひなれ」將軍易き事とて、多くの兵を引き連れ、野邊に出でて虎を狩りけるに、却て將軍虎に喰はれて亡せにき。乘りたりけるうんしやうれうと言ふ馬、鞍の上空しくして歸りぬ。女房怪みて將軍虎に喰はれけるや、と問へば、れう涙を流し膝を折り泣けども叶はず。わが胎内の子は、父を害する敵なり、生れ落ちなば捨てん、と日數を待つ處に、月日に關守無ければ、程無く生れぬ。見れば男子なり。いつしか捨つべき事を忘れ、取り上げ、名をかうりよくと付けて、もてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より、父虎に喰はれけるを安からず思ひ、敵取るべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよく早七歳にぞなりにける。或時、父重代の刀

をさし、角の着きたる弓に、神通の鏑矢を取添へ、厩に下り、父乗りて死にける、うんしやうれうに向つて曰く、汝馬の中の將軍なり。然るに父の敵に志深し。父の取られける野邊に、我を具足せよ、と言ふに、馬黄なる涙を流して膝を折り、高聲に嘶えけり。かうりよく大きに喜びて、かのれうに乗り、馬に任せて行く程に、千里の野邊に出でて、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半に及びて、ある谷間に、獸多く集り居たる其の中に、臥長一丈餘りなる虎の、兩眼は日月を雙べたる樣にて、紅の舌を振りて臥しければ、肝魂を失ふべきに、さる將軍の子なりければ、是こそ父の敵よ、と矢取つてさし番ひ、よつぴいて放つ。過たず虎の左の眼に射立てたり。少し弱ると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀を抜き、虎を切らんと見れば、虎にては無くして、年經たる石の苔蒸したるにてぞありける。かやうの志にてつひに敵を討つ。今の世の石竹といふ草、かうりよくが射ける矢なりとぞ申し傳へたる。されば弓取の子は、七歳になれば、親の敵を討つとは、此のこゝろなり。志により、石にも矢の立ち候ぞや。歌にもこのこゝろをよみけるにや、

虎と見て射る矢の石に立つものをなど我が戀のとほらざるべき」

十郎聞きて、「や殿、歌物語心得ず。祐成如何なる鬼神なりとも、遁さじとこそ思ふぞとよ。などわが敵討たであるべきと語れかし」「げにや折による歌物語、あしく申すと覺ゆるなり。歌は鬼も

あれ角もあれ、此の度は敵討たん事易かるべし。老少不定の習なれば、我等が空しくなり、敵に先立たば、悪霊ともなりて、取るべき者をや」と戯れつゝ、馬に鞭打ち急ぎけり。

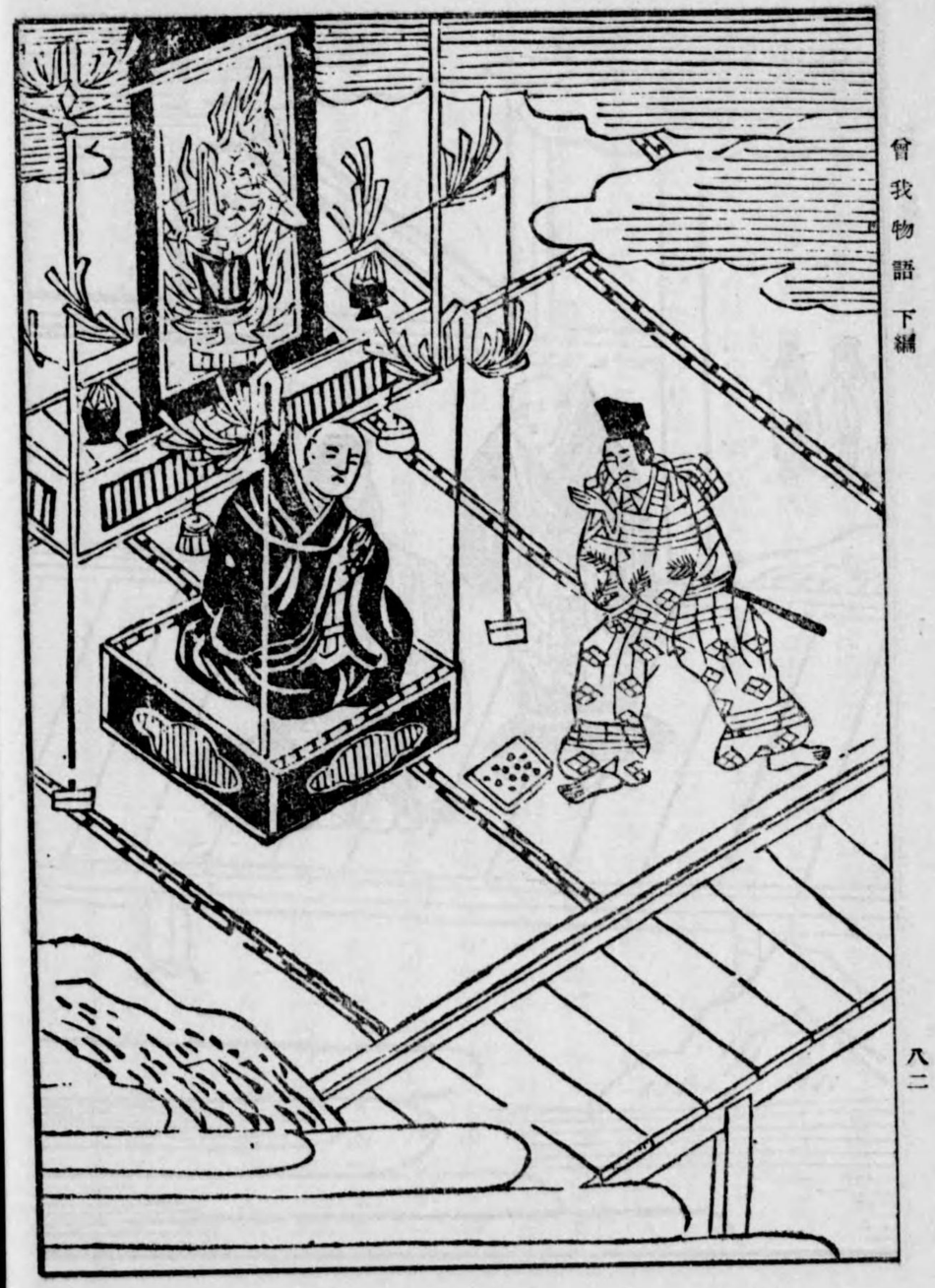
七　三井寺の智興大師の事

十郎は、「足柄を越えて行かん」と言ふ、五郎は、「箱根を越えん」と言ふ。所謂有り。此の三四年別當の呼び給へども、男になりける面目なさに、見參に入らず、序に打寄りて、御目に掛るべし。最後の暇をも申さんとて參りたり、と思し召さば、聖經の一巻も、陀羅尼の一遍なりとも、弔ひ給ふべき善知識なり。其の上、師の恩を重くすれば、法にあづかる例あり。近き比の事にや、園城寺に知興大師とて、めでたき上人渡らせ給ひけり。顯密有驗の高僧と聞えけれども、未だ肉身を離れ給はざりける故に、重病に冒されて、苦痛惱亂辨へ難し。則ち晴明を呼びて占はせけるに、「定業限りて助かり給ふべからず。たゞし多き御弟子の中に、報恩重くし命を輕くして、師の御命に代るべき人ましまさば、まつりかへん」と申す。上人は苦痛の儘に、誰とはのたまはねども、御目を上げて、御弟子を見廻し給ふ。竝び居給ふ御弟子、二百餘人あれども、我代らんと仰せらるる方一人も無し。目を互に見合せ、赤面し給ふ色あらはれにけり。うたてかりし御事なり。爰に證空阿闍梨

と申して、十八に成り給ふが、末座より進み出でて、「吾報恩のあはれみ盡し難し、何とかして報じ奉るべき。吾等が命なりとも、代り奉る身なりせば、喜びの上の喜び、何事かこれにしかんや。はや〳〵」とて、墨染の御袖をかきあはせ給ひて、晴明が前に跪き給ふ。上人聞こし召し、惱める御眦に御涙を浮べさせ給ひて、御顔を振り上げ、本尊の御方を御覽じけるは、證空の命を御惜みありて、御身はいかにもと思し召さるゝ御容顔顯れたり。是又御慈悲の御志とぞ見えける。證空重ねて申されけるは、「深く思ひ定めて候。變ずべきにも候はず。其の上上人の苦惱を見奉るに、刹那の間も惜しくこそ候へ。御心に任すべきに非ず。急ぎ法會を行ひ、祀を急がれ候へ。但し八旬に餘る母を持ちて候。今一度今生の姿を見々え候ひて歸り參るべし。暫し待ち給ふべし」とて、暇請うてぞ出で給ふ。證空阿闍梨を、哀と言はぬ者はなし。其の後母の許に行き、此の事委しく語り給ふ。母聞きも果てず、證空の袖に取り付き、「思ひも寄らず、師匠の御恩許にて、母があはれみをば捨て給ふべきか。御身を殘し、みづから先立ちてこそ順次なるべけれ。思ひもよらぬ例」とて、證空の膝に倒れかゝり、涙に咽ぶばかりなり。證空は母の心をとり靜めて、「よく〳〵聞こし召せ。師匠の御恩德には、何をか譬へて申すべき。はかなき仰ともおぼえて候へ」「はかなき母が生み置きてこそ、尊き師匠の恩德をもかうぶり給へ。母の恩大海よりも深しとは、誰やの人がいひおきける」「親は

一世、師は三世、淺き憐なり。知らせ給ふらん」「何とて情はましまさぬぞ。今日の命を知らぬ身の、恥をば誰か隱すべき。叶ふまじ」とて取りつきたり。「聞き給はずや、淨飯大王の御子悉多太子は、一人おはします父大王を振りすて、阿羅々仙人に給仕し給ひしぞかし」「それは生きての御別、これは死すべき別なり、喩にもなるべからず」「御詞の重きとて、只今かくれ給ふ師匠をや、殺し奉るべき」「誠にみづからものならずば、暇を乞ひても何かせん。七生まで不孝するぞ」と言はれつゝうち轉び給ひけり。かくて證空進退こゝに谷まり、師匠の恩德を報じ奉らんとすれば、母の不孝、永劫にも遁れ難し。身の置きどころなかりければ、母の御前に跪き、「不孝の仰せ悲みても餘りあり、奈落の責いつをか期せん。此の世は假の宿なり、未來こそ實の住所にて候。師匠の命に代り奉らば、御迎にも參るべし。さあらば一つ蓮の緣にも、などかはならで候べき。思し召しきり候へ」とて、名殘の袂をひき分る。母はなほも慕ひかね、「さらばみづからをも連れて、ひとつ蓮の緣にな し給へや。捨てられて老の身の何となるべき」と、たゞ悲み給ふ。阿闍梨は母をなだめかね、斯樣ならんと思ひなば、中々申し出すまじかりつるものを、又は母に暇申さずとも、思ひ定むべかりつる事を、心弱くて斯樣に憂目を見ることよ。惜み給ふも道理なり。只一人ある子なり、一日片時も見奉らぬだに心もとなくて、暇なき行法の間にさへ、心ならず思ひ見奉る事なし。まみゆる事遲き時

は、杖にすがり來り給ひて、跪き背後に立ち、夏は扇をつかひ、冬は暖むるやうにしたゝため給ふ。「これ然るべからず」と、申せども、「幾程もなきみづからが、心に任せてくれよ」と仰せられければ、上人も憐みありて、心に任せよと御慈悲あるによつて、片時も離れ給ふ事なし。我また御憐のもだしがたさに、隙をはからひ見奉らんと、通ひしぞかし。げにも今更別れ奉りなば、さこそ悲しくましまさめと思へば、涙もせきあへず。誠にみづから亡せなば、やがても絶え入り給ふべき志なれば、立つも立たれず、居るも居られず、只惘然として泣く許なり。なほしも母は、ひかへたる袂を放さで寄りかゝり、泣き沈み給ひければ、袖ひきわき難くて、掌を合せ、「みづからが申す道理、よく〳〵聞こしめし候へ。惜み思しめさるゝ御事、僻事には存じ候はず。さりながら豫ても申しゝ如く、此の世は夢幻と住みなし給へ。佛と申す事は外になし。我がなす胸のうちに明かなり。月輪の曇らぬを悟と申す、埋るゝを迷と申し候。されば佛は、衆生に善惡へだてなきよし、說きおかせおはしますものを、然あらば親となり、子となり、師となり、弟子となる、これ皆一心の願により、三箇大事悉く阿字の一字にこそ、をさまりて候へ」と怒りければ、母ひかへたる袖を少しゆるしける處に、棄恩入無爲信實報恩謝の道理を、つぶさに說きければ、母涙をおさへて、「さらば」とて許しけり。證空は嬉しくて、急ぎ坊に歸りけり。誠に孝行の程、天衆地類もあはれみを爲し給ふべき



にや。

八　泣不動の事

晴明、遅しと待ちし事なれば、七尺に床をかき、五色の幣を立て竝べ、きんせんさんぐ數の供具、菓子を盛り立て、證空を中にすゑて、晴明禮拜恭敬して、珠數さら〳〵と押しもみ、上は梵天帝釋、四大天王、下は堅牢地神八大龍王まで勸請して、既に祭文に及びければ、牛王の渡ると見えて、種々のきんせん幣帛、或は空に舞ひ上りて舞ひ遊び、或は壇上を跳り廻る。繪像の大聖不動明王は、利劍を振り給ひければ、其の時晴明座を立つて、珠數をもつて證空の頭を撫で、「平等大慧一乘妙典」と言ひければ、すなはち上人の苦惱さめて、證空に移りけり。頓て五躰より汗を流し、五臟を破り、骨髓を碎く事いふに及ばず。是を見る人、晴明が奇特の貴さ、證空の志のありがたさに、上下袖を絞るばかりなり。さて證空の頭より烟立つて、苦痛忍びがたかりしかば、年來賴み奉る、繪像の不動明王を睨み奉り、「わが二つ無き命師命に奉ず、召しとらしめ、屍を壇上に留めん」と正念に住して、「安養淨刹に迎へ取り給へ。知我心者、卽身成佛、あやまち給ふな」と、一心の願をなしければ、明王あはれとや思しけん、繪像の御眼より、紅の御涙をはら〳〵と流させ給ひて、「汝貴くも報恩を

重くして、一人の親をふりすて、師命に代る志は褒じても餘あり。我またいかでか汝が命に代らざるべき。行者を助くる大聖明王の誓、地藏薩埵に限らず、受くるところの苦痛を見よ」と、新に靈驗顯れければ、明王の御頂より、猛火ふすぼり出で、五體より汗を流し給ふ。貴しとも忝しとも、言葉にもいひがたし。すなはち證空が苦惱止まり、智興大師も助かり、證空も誓にあづかり給ふこと、有難かりし例なり。されば三井寺に泣不動とて、寺の寶の一なり。流させ給ひし御涙紅にして、御胸まで流れかゝりて、今にありとぞ承る。誠に師匠の恩、かやうにこそ有り難きものなれ。

九　鞠子川の事

「箱根を忍び出で候ひし時は、權現に御暇をも申さず、まして師匠にかくと申さゞりし事、今に其の恐れ殘りて覺え候」と申しければ、十郎もさこそとて、箱根にぞ懸りける。鞠子川を渡りけるが、手綱かいくり申しけるは、「和殿三つ、祐成五つの年より、廿餘の今まで、此の川を一月に四五度づつも渡りつらん。いかなる日なれば、今渡り果てん事の悲しさよ。何どやらんいつよりも、此の川の水濁りて候。心許なし」といひければ、五郎申す樣、「皆人の冥途に赴く時は、物の色變り候とな。我等が行くべき道、曾我を出づるは、娑婆を別るゝにて候。此の川は三途の川、湯坂の峠は死出の山、鎌倉殿は閻魔王、御前祇候の侍どもは、獄卒阿防羅刹、左衞門の尉は善知識、箱根の別當は、六道能化の地藏菩薩と念じ奉る。此の川の水、色變ると見えて候へ」とて、駒うち入れけるが、やゝありて十郎、

さみだれに淺瀨も知らぬ鞠子川波にあらそふ我が涙かな

五郎聞きて、歌の心あしくや思ひけん、むかばきつづみ打ちならし、かくぞ詠じける。

渡るより深くぞたのむ鞠子川親のかたきに逢瀨と思へば

かやうに思ひつらね、通るところは阿彌陀の院じゆ、かさま寺、湯本の宿を打過ぎ、ゆさかの峠に駒を控へ、弓杖突きて申しけるは、「人生れて三箇國にて、果つるとは理なり。我等生るゝ所は伊豆の國、育つところは相摸の國、最期どころは駿河國、富士の裾野の露と消えなん不思議さよ」五郎聞きて、「其の最期所が大事にて候ぞ。心得給へ」といさむれば、「仰せにや及ぶ」と宣へども、さすが故郷の名殘や惜しかりけん、我が故郷の方をはるゞと眺むれば、只雲のみかゝり、何處をそことも知らねども、「烟少し見えたるは、もし曾我にてや候らん」團三郎これをかへり見て「烟は曾我にて候はず。それより南の黑き森に、雲のかゝりて候こそは、曾我にて候へ」と申しければ、古き事

どもの思ひ出されて、十郎、

曾我はやしかすみなかけそ今朝ばかりいまを限の途と思へば

とうち眺め涙ぐみければ、五郎此の有様を見て、此の人に同心しては、はか〳〵しき事あらじ。いさめばやと思ひければ、怒り聲になりて、「殿こそは、大磯、小磯、曾我故郷をも眺め給へ。時致に於ては思ふ事こそ急がはしく候へ」とて、駒ひき退け駈け出し、二町計駈け通りぬ。十郎興さめて思ひながら、駒駈け出し、追ひつきけり。五郎ひきさがり、口説きけるは、「人界に生を受くる者、誰かは最後の名残惜しからで候べき。鬼王、團三郎が心をも御恥ぢ候へかし。彼等をば曾我へ歸し候べし。若し此の事叶ひて候はば、申すにや及ぶ。仕損ずる者ならば、此の人々が、此處にては歌をよみ、彼處にては詩を詠じて、しもたてぬ事なんど嘲られんも口惜し。いかばかりとか思し召し候」と申しければ、道理とや思はれけん、其の後は歌をもよまず、横目をもせず、うちける程に、大くづれにこそつきにけれ。

十　二宮の太郎に逢ひし事

隙ゆく道を見渡せば、馬乘五六騎出できたる。誰なるらんと十郎見るに、二宮殿と覺えたり。「い

ざや此の事いつばし語らん」といふ。五郎聞きて、餘の事なれば返事もせず。ややありて申しけるは、「いかでかやうの大事、聟には知らせ候べき。異姓他人にては候はずや。いかなる人か、世になき我等が、死にゝ行くとかたらはんに、同意する者や候べき。たゞ對面ばかりにて御通り候へ」十郎聞きて、「御分の心を見んとてこそ」と相談し、あひ近くなりければ、此の人々馬より下り、弓取りなほし色代す。「人々は何處へ往き給ふぞや」「鎌倉殿富士の御狩とうけたまはり、狩場の體見まゐらせて、末代の物語と思ひ立ちて罷り出で候」と申す。義實聞きて、「あはれ人々無用の見物かな。馬鞍見苦しくての見物然るべからず。これより歸りたまへ。某も御供と仰せられつるを、見苦しさに、風の心地と梶原が方へ申して遣し候。面々もたゞ是より歸り給ひて、二宮に逗留し、笠懸など射て遊び給へ」と申しければ、十郎、「畏り存し候へども、斯樣の事は重ねて有難き見物と存じ、既に思ひ立ちて候。馬弱くば山をば牽かせ候べし。歸りには參り、暫くも逗留仕り候べし。設の肴御用意候へ」と申しければ、「此の上は御歸りをこそ待ち申すべし」とて、馬ひき寄せ打乘り、東西へ打別れにけり。只世の常とは思へども、是ぞ最後の別れなり。さても我等討死の後、形見ども曾我より二宮へも送りなん。其の時にこそ、男子なりせば一みちにならで有るべきに、女の身の悲しさは、其の事こそ叶はずとも、せめて道よりなど最後の言傳だになかりつるぞと、怨み給はん事さぞ

あらんと、思へば包む其の涙、先立ちぬるこそ悲しけれ。

十一　矢立の杉の事

「とても捨つべき命ども、遲速は同じ事ながら、さりぬべき便宜もこそあらめ、一時も急げや」とて、駒を早めて打つ程に、矢立の杉にぞ着きにける。此の杉と申すは、元は湯本の杉といひけるを、一年九州阿蘇の平權守とて、虎狼の逆臣あり。九國をうち從へて、ちやうずる事四箇年なり。軍する事五十餘度なり。度ごとに勝てり。其の時の齡七十二歳なり。剩天下をなやまし奉らんとて、國を催す聞えありければ、六孫王の御時、其の討手の爲に、關東の兵を召されのぼりしに、此の杉のもとに下り居て祈りけるは、九州に下り、權守をうち從へ、難なく都に歸りのぼり、名を後代にあぐべくは、一の矢受け取り給へとて、各射けるに、一人も射損ぜず。さて筑紫に下り合戰するに、なんなくうち勝つて歸り上りぬ。其の時よりして矢立の杉と申しけり。「門出目出度き杉とて、上下旅人、心あるもなきも、此の木に上矢をまゐらせぬはなし。況や我等思ふ事ありて行く者ぞかし。いかでか上矢を參らせざらん」とて、十郎一の枝にとゞむ。五郎二の枝にぞ射立てける。何となく射けれども、十郎はよひに討たれ、五郎はあしたに斬られにけり。此の杉の瑞相現れて、一二

の枝のへだて不思議なりける次第とは、今こそ思ひ合せけれ。さても兄弟は、駒を早めてうつ程に、箱根の御山にぞ着きにける。

卷第八

一　箱根にて暇乞の事

抑箱根山と申すは、關東第一の靈山なり。後には高山峨々と連りて、眞如の月影を宿す。前には生死の湖漫々として、波煩惱の垢をすゝげば、無始の罪障も消滅すと覺えたり。本地文殊師利菩薩、衆生を化度し給へば、有爲の都と名づけたり。されば一度緣を結ぶ者は、長く惡所に墮さじと誓ひ給ふ事、頼もしくぞ覺えける。此の人々は御前に參り、「歸命頂禮、願はくは淨土に迎へとり給へ。時致十一よりこの御山に參り、今に至るまで毎日三卷づつ、普門品怠らず讀み奉るも、只此の爲なり、憐み給へ」と念誦して、別當の坊へ行きにけり。

二　同じく別當に逢ふ事

行實やがて出で逢ひ給ひて古今の物語し給ふ。「男になり給へばとて、昔になりかはり思ふべき

にあらず。御身こそよそがましくし給へ、面々の心中はじめより委しく知りて候ぞ。哀にのみこそ思ひ奉れ。いかでか怨み申すべき。人に賴まるゝ事、在家出家によらず、愚僧も年だに若く候はゞ、などかは、たよりに成らざるべき」とて、墨染の袖を顏におしあて、さめ〴〵と泣き給へば、十郎承り、「御意畏り入り候へども、さらに野心の候はず。時致も其の後やがて罷り上り、男に成りて候おこたりをも、申すべきにて候ひしを、母に不孝せられて候ひぬ。また恐をなし奉るゆゑ、今に遲なはり候」別當聞き給ひ、「祈禱はたのもしく思ひ給へ。千騎萬騎の方人と思し召せ」とて、酒取り出し、三々九度勸め給ひけり。

三　太刀刀の由來の事

「何を以つてか、方々の門出祝はん」とて、鞘卷一腰取り出し、十郎にひかれける。此の刀と申すは、木曾義仲の三代相傳とて、三つの寶あり。第一にりうわう作りの薙刀、第二にくもをどしと言ふ太刀、第三に此のかたななり。名をばみぢんと言ふ。通らぬ物なければなり。されば此の三つの寶を祕藏して持たれたり。御子清水の御曹司、鎌倉殿の聟になり給ひて、國の大將軍賜はつて、海道を攻め上り給ひ候由聞えければ、彼の寶を祈の爲とて此の御山へ參らせらる。寶殿の事は、一

向別當の計ひたるに依て、是を御邊に奉る。高名し給へ」とてひかれけり。五郎には、兵庫鎖の太刀を一振取り出しひかれけり。「此の太刀と申すは、昔頼光の御時、大國より、武悪大夫と言ふ鍛錫を召し、三箇月に作らせ、一箇月に磨かせ、二尺八寸に打ち出す。祕藏竝ぶ者無くして持たれける。或時二つの太刀を枕上に立てられし時、俄に雨風吹きて此の太刀を吹き動しければ、双風に傍なりける草紙、三帖の紙數、七十枚切れたりけり。頼光、てうかと名付けて持たれたり。夫より、河内守頼信の許へ譲られぬ。夫にての不思議には、此の太刀を抜かれければ、四方五たんぎりの虫も翼も切れ落ちにければ、むしばみとぞ附けられける。夫より頼義の許へ譲られたり。夫にての不思議には、折々御所中震動して、人死し失すること度々なり。或時頼義、此の太刀を枕に立てられしに、例の如く雷電はげしくして、御所中騒し。此の太刀已と抜け出でて、大地一丈が底に入り、かゝる悪事仕る大蛇の尾頭、九尋ありけるを、四つにこそは切りたりけれ。其の後よりぞ御所中の狼藉も止りける。怪みて跡を尋ね見給へば、かゝる不思議をしたりければ、毒蛇と名付けて持たれたり。夫よりして八幡殿へ譲られける。夫にての不思議には、其の比宇治の橋姫の、あれて人を取りけり。或夕暮に八幡殿、宇治へ參られけるに、人の申すに違はず、川の水浪しきりにして、十八九許なる美女一人橋のうへに上りて、八幡殿を馬より抱き下し、川の中へ入れんとす。彼の太刀おのれと抜

け出でて橋姫の左手の腕を斬り落す。力及ばず川へ飛び入りぬ。夫より狼藉も止りけり。然れば此の太刀を姫斬と名付けて持たれたり。夫より六條の判官爲義の許へ譲られたり。夫にての奇特には、此の太刀に六寸計り勝りたる太刀を添へて置かれたるに、夜に入りぬれば斬り合ひけるを、判官此の由聞き給ひて、豫てよりやうある者をとて、五夜までこそ立て添へて置かれけれ。五夜の間隙なく戰ひて、六夜と申すに我が寸に勝りたるを、安からずや思ひけん、餘る六寸を斬り落す。されば友切と名付けて持たれたり。源氏重代にも傳ふべかりしを、保元の合戰に、爲義斬られ給ひ、嫡子左馬頭義朝の手へ渡りけるに、佛法守護の佛とて、鞍馬の毘沙門に籠め給ふ。されども過ぎにし合戰に、父を斬り給ひしかば、多門も受けずや思しけん、合戰に打負け、東國指して落ち給ふ。尾張の國知多の郡、野間の内海と言ふ所にて、相傳の家人、鎌田兵衛正清が舅、長田の四郎忠致に討たれ給ひて後、傳ふべき人なかりしに、義朝の末の子、九郎判官殿未だ牛若殿にて、鞍馬の東光坊の許に、學文しておはしけるが、如何にしてか聞給ひけん、折々毘沙門に詣り、歸命頂禮願はくは、父義朝の太刀、此の御山に籠められて候。父の形見に一目見せしめ給へと、祈念申されければ、多門哀れと思し召しけるにや、此の太刀を下し給ふと夢想を蒙り、喜びの思ひをなし、急ぎ參りて見奉り給へば、御戸開けて此の太刀あり。盜み出して深く隱し置きて、十三になり給ひける年、相傳の郎黨

奥州の秀衡を頼み、商人に伴ひ下り給ひけるに、美濃の國垂氷の宿にて、商人の寶を取らんとて、夜討の多く入りたりしかども、起き合ふ者も無かりしに、牛若殿一人起き合ひ、究竟のつはもの十二人斬り止め、八人に手を負はせて、多くの强盜追つ返す。高名したる太刀なりとて、奥州まで祕藏せられけるに、十九の年兵衛の佐殿、謀叛起し給ふと聞こし召し、鎌倉に登り見參に入り、幾程無くして、西國の大將軍にて發向せられけるに、今度の合戰にうち勝たせ給へとて、此の御山へ參らせ給ひて候。自然に僻事し出し候ひて、上より御尋ねあらば、法師が御邊に奉りて、狼藉なりと御不審あらん時は、京に上り、四條の町にて買ひ取りたる由申さるべし。御分男になり給へば、今は見參に入れ度は無けれども、志を思ひやられて哀れなるぞとよ。祈禱は頼母しく思ひ給へ、此の法師が息の通はん程は、明王を責め奉らんに、何の疑かあるべき」と宣ひけり。時致承つて、「仰かたじけなけれども、更に野心の儀は候はず。御不審の條尤もにて候へども、恐れ奉つて參らぬなり。狩場より歸りには參るべく候。又は思し召し合する事も候ひなん」とて罷り立ち、さらぬ體にはもてなせども、今を限なれば、忍びの涙を流しけり。別當も緣まで立ち出で給ひて、遙々見送りつゝ、名殘惜しくぞ思はれける。兄弟の人々は、駒に鞭をうち、急がれける程に、三島近くぞなりにける。

四　三島にて笠懸を射し事

十郎道にて申しけるは、「只今別當の御詞、偏に御託宣とおぼえたり。其の上我等に權現より劔一つ宛給はり候上は、今度敵を討たんこと疑ひあるべからず」と喜びて、三島の大明神の御前にこそ着きにけれ。此の人々疊紙を挾み、七番宛の笠懸を射て、法樂し奉り、敵の事心の儘にぞ祈られける。「誠に思ふ事叶はずば、我等敵の手にかゝりて、足柄を東へ二度歸し給ふべからず、南無三島の大明神」とぞ念じける。皆人は、神や佛に詣りては、或は壽命長遠と祈り、諸病悉除とこそ祈るに、此の人々の明暮は、父の爲に命を召せとのみぞ申しける。無慙なりし事どもなり。斯樣の事迄も、最後の文に詳しく書きて、富士野より曾我へ返しける。母見給ひて、五つや三つより思ひ立ちけるとも知られけり。

五　浮島が原の事

偖も御寮は、浮島が原に御座の由承り、曾我兄弟も急ぎ追つ付き奉りぬ。浮島が原を通りけるに、彼の原の昔は、海にてありけるに、大國より愛鷹山と言ふ山、富士と丈競せんとて、來りけるを、

權現蹴崩し給ひければ、其の山海に浮きて、今の浮島が原になりにけり。一方は海漫々として雲行客の跡をうづみ、一方は横折り伏せる小夜の中山、宇津の山へ續ぎ、東路わけて遙かなり。或人東國に下りけるが、此の原にて、滄波路遠くして雲千里と云ふ、詩の上の句を作り、下の句をよせかねたりける折節、十六歳になりける娘を連れたりけるが、詩をば作り得ずして、

路遠く雲井はるけき山中に又ともきかぬ鳥の聲かな

と詠みたりければ、父聞きて、先の下の句を繼ぎけり。白霧山深うして鳥一聲、と言ふ詩も、今更思ひ知られたり。其の夜は君浮島が原に御泊りあり。此の人々も便宜好くばと、窺ひけれども、用心隙なかりければ力なし。其の夜も其處にて窺へども、北條殿の警固にて隙もなし。

六　富士の狩場への事

御寮は相澤の御所にましましけるが、梶原源太左衛門を召して、仰せ下されけるは、「昨日の狩場より勢子少くては叶ふまじ。其のよし相觸れよ」承つて人々に觸れ、射手を揃へけり。先武藏の國には、畠山の庄司次郎重忠、三浦の和田左衛門義盛、三浦の介義澄、下總の國には千葉の介、古郡左衛門兼忠、武田の太郎信義、下野の國には宇都宮の彌三郎友綱、横山の藤馬の丞、相摸の國には

松田河村の人々を先として、以上三百餘人なり。若侍には、畠山の次郎重保、梶原源太左衞門景季、朝比奈三郎義秀、同じくひこ太郎、御所の太郎、森の五郎、林の四郎、小山の三郎、葛西の六郎、板垣の彌次郎、本間の彦七、澁谷の小五郎、愛甲の三郎を始めとして、四百五十餘人なり。總じて弓持ち馬に乘る侍、三百萬騎もあるらんと見えし。其の後勢子を山へ入れけるに、東は愛鷹の峯をさかひ、西は富士川を際として、引き廻されけり。勢子は雲霞の如し。嶺に登り谷に下り、野干を平野に追ひ下し、思ひ〳〵に射止めけり。御寮の其の日の御裝束には、羅綺の重衣のふぢまつの、風折したる立烏帽子に、狩衣は柳色、大紋の指貫に、熊の皮の行縢、しばうちながにめし、連錢葦毛なる馬の五尺に餘りたるに、白鞍置かせ、厚房の鞦かけてぞ召されける。御劍の役は江戸の太郎、御笠の役は豐島の新五郎、沓の役は小山の五郎、御敷皮は金子の十郎なり。其の外一人當千の武士、六七百人御馬の廻りと見えたりし。其の中に殊に勝れて見えたりしは、五郎丸なり。萌黃縅の胴丸に、一尺八寸の大刀指し、四尺八寸の太刀を佩き、黑金の棒の三人して持ちけるを、もと輕げにつきて、御馬の前にぞ立ちたりける。御陣の左右には和田畠山いづれも鷹をぞ据ゑさせける。馬うち靜かにして、又竝ぶ人なくぞ見えし。其の外數千騎の出立、花を織り月を招く粧、廣き富士野も所なくぞ見えし。かくて山より鹿ども多く追ひ下し、思ひ〳〵に止めて、御寮の御見參にぞ入

れにける。畠山の六郎重保、左手右手に相付けて、鹿二頭止む。宇都宮五頭、一條板垣五頭、武田小山の人々も、五頭こそ止めけれ。その狩場の物數は此の人々とぞ聞えし。爰に葛西の六郎清重日の暮方に至るまで、鹿一頭も止めずして、勢子に漏るゝ鹿もやと、繁み〳〵に目をかけて廻りける。折節右手の繁みより、鹿一頭出で來る。願ふ所と見渡せば、矢比に少し延びたり。鐙に鞭を打ち添へて、下り樣にぞ落しける。既に二三段切り違へて、弓打ち上げて引かんとする所に、思はぬ岩石に、馬を乘り掛けて、四つ足一つに立てかねて、わなゝきてこそ立ちたりけれ。おろすべき樣もなく、進退こゝに谷れり。上下萬民これを見て、唯「あれは〳〵」とぞ申しける。今は馬人諸共に、微塵になるとど見えたりける。清重手綱を靜に取り、とねりなしを結び置き、かゞみの鞭を打添へて、二つ一つの捨手綱、むくんりうに落ちかゝり、放せば後に下り立つたり。馬は手綱を捨てられて、眞砂につれて落ちて行く。かづき弓のもと、岩角にえり立て、暫しこらへて立ち直る。諸人目をこそすましけれ。「乘りたり下りたり、据ゑたりや堪へたり」と暫しは鳴も靜まらず。君も御感の餘りにや、常陸の國小栗の庄三千七百町下されけり。時の面目、日の高名、何事かこれにしかんと、感ぜぬ人こそ無かりけれ。

七　源太と重保が鹿論の事

斯かる所に上の繁みより、鹿一頭出で來り、梶原源太ひかへたる、左手を通りてぞ下りける。景季幸にやと喜びて、鹿矢を打番ひよつぴき放つ。追つ様筋かひに首をかけ、つゝとぞ射貫きたる。されども鹿はものともせず、思ふ繁みに飛び下る。二の矢を取つて番ひ、鞭打ち下す所に、不思議に馬を乘り懸けて、足竝亂るゝところに、下り立つて、馬引つ立つる其の隙に、畠山の六郎重保、馳せ竝べてよつぴいて放つ。源太が矢目をはぎり迄ぞ射ける。源太にはしたゝかに射られぬ。鹿は少しもはたらかず、二つの矢にてぞ止まりける。重保馬うち寄せ見る所に、源太も駈け寄せて、「鹿は景季止めて候ぞ」重保聞いて、「心得ぬ事を宣ふものかな。鹿は重保が矢一つにて止めたる鹿を、誰人が主あるべき」源太弓取り直し嘲笑ひて申す様、「狩場の法定まれり。一の矢二の矢次第あり、矢目は二つも有らばこそ、一二の論もあるべけれ。景季も正しく射つるものを」とて、見れば實に矢目は一つならでは無かりけり。さりながら御前で、取らるゝ者ならば、時の恥辱に思ひければ源太大きに怒りをなし、「勢子の奴原は無きか、寄りて此の鹿を取れ」重保も駒打ち寄せ、「雑人は無きか、重保が止めたる鹿のかはたて」源太さる者なりければ、少しも怯む氣色はなし。「臆した

る奴原かな。景季が止めたる鹿のかはたてかきて取れ」重保さらぬ體にて、駒駈け廻し、「雑色共は、など鹿をば取らぬぞ」と、早事實なる詰論なり。源太は手綱搔くり駒打寄せて小聲に言ふ様、「戀路に迷ふ隱し文やる者こそ主候よ」。重保聞いて、「優しく宣ふ譬かな。思ひの色の數夜まで、空しく返すには、返し得たるぞ主となる」源太打ち笑ひ、「吉野龍田の花紅葉、誘ふ嵐は主ならずや」重保聞きて、「言はれずや誘ふ嵐も其の儘に、終に連れても行かばこそと宣ふ、龍田の河の河波に、散りて流るゝ花の雪、紅葉の錦渡りなば、中や絶えなんさりながら、流れて止る所こそ、誠の主と思はるれ」「實に故ありて聞えたり。波にも連れて行かばこそ。かゝる井堰の主なるべき」「井堰も留め果てばこそ。流れて止る湊こそ、誠の主とは覺えけれ」源太此の詞を打捨てゝ、「更け行く月の傾くをも、詠むる者こそ主となれ」重保聞きて高らかに打笑ひ、「世界を照す日月を、主と宣ふ過分なり」「過分は人によるものを、御分一人に歸すかとよ」重保たまらぬ男子にて、「獨に歸すか歸せざるか、手竝の程を見せん」とて、既に矢をこそ抜き出す。源太も白まぬ者なれば、「案の内よ」と言ふまゝに、既に中指抜き出す。梶原が郎黨は、言ふに及ばず時の綺羅、竝ぶ者なかりしかば、知るも知らぬも押し竝べて、梶原方へぞ馳せ寄りける。三浦の人々も是を見て、源太に意趣ある上は、秩父方へは疎遠なり、見放すまじとて、馳せ寄りける。以下の人々兒玉の人々は、梶

原方へぞ與力する。みま本間の人々は、秩父方へぞ寄せ來る。駿河の國の人々は、梶原方へぞ寄りにける。伊豆の國の人々は、北條殿を先として秩父方へぞ馳せ寄りける。安房と上總の侍は、二つに割れて寄りにける。常陸下總の人々は、秩父方へぞ集りける。八箇國のみにあらず、日本國中に名を知らるゝ程の侍、魚鱗に重なり、鶴翼に連りて、ひたひしめきに犇きけり。畠山殿は、始めより知り給ひしが、如何思はれけん、知らぬ由にてぞましける。頼朝これを御覽じて、「あれあれ義盛靜め候へ」と、仰せ下されければ、和田殿、兩陣の間へ馬駈け入れ、「上意にて候ぞ。鹿論の事互に其の理あり。所詮鹿をば上へ召され候。兩人御前へ參られよとの、御諚にて候」と、大音聲にて言ひ、其の後勢子を召し、彼の鹿を舁かせ、六郎と源太と引き連れ、御前差して參られけり。さてこそ兩陣は破れにけれ。危かりし事共なり。さればにや、君の御惠遍く、御憐み深くして、事靜まりぬ。方々も安穩なるにて、昔を思ふに、

八　燕の國旱魃の事

大國の燕の國、旱魃すること三箇年なり。然れば草木悉く枯れ失せ、人民多く亡びける上は、鳥獸に至るまで、生き殘るべしとは見えざりけり。國王大きに歎き給ひて、大法祕法殘さず行ひ、

雨を祈られけれども驗なし。大王思ひの餘りに、諸天に恨み奉りて曰く「我生れてより此の方、禁戒を犯さず、事を安りに行ふとも思はず候に、斯の如く旱魃して、人の生命すくなし。若我が身に過る所あらば、戒め給へかし」と歎き申さるれども、其の驗なし。今は身命を民の爲に捨てんには如かじとて、廣き野邊に出で、萱を多く集めて、高さ廿丈に積み上げさす。公卿大臣、奇異の思ひをなす所に、國王臨幸なりて、其の萱の上に登り給ひて、「火をつけよ」と綸言なりければ、臣下大きに辭してつくる者なし。其の時大王宣ふ、「若し過りて、政治猥なること有らば、燒けぬべし。燒くる程の身ならば、命生きても益なし。若又過らずば、天是を守るべし」とて、大きに逆鱗ありければ、綸言背き難くして、四方より火をつけゝれば、猛火山の如くに燃え上りて、炎空に滿てり。大王も烟に咽び、前後辨へ難し。已に御衣に火の付きければ、目を閉ぎ掌を合せて、正念に住じて、火坑變成池と念じ給ひければ、天是を憐みて、大雨俄に降り下りて、山の如くなりつる猛火を消し、國王も助かり給ひ、人民も命を繼ぎ、五穀成就しけるとなり。されば論語に曰く、過りて改むるに憚る事勿れ。過りて改めざるは、賢かへりて愚なり、と見えたり。此の文の名を圓珠と言へり。まどかなる玉の、盤を走るとよそへてなり。君御言葉の重き一つにて、多勢の靜まりけるにて知られけり。曾我の人々は、あはれ事の出で來れかし。荷擔人する風情にて、狙ひ寄つて一刀、刺

さむと許り思ひけり。斯くて日も暮方に成りしかば、今日を限りと、傾く日影を惜しみけり。

九　新田が猪に乗る事

爰に伊豆の國の住人、新田四郎忠常、未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を相待つ處に、幾年經るとも知らざる猪が、ふしくさかく十六つきたるが、主を知らぬ鹿矢ども、四つ五つ立つたりしが、大きに猛つて駈け廻る。譬へば、養由が術、きよりくりうが神變も、及ぶべしとは見えざりけり。近づく者をたければ、落ち合ふ者もなくして、徒らに中を明けてぞ通しける。忠常是を幸と、駈け寄せけり。御前近うなりければ、「よしや新田よしや忠常」とぞ仰せ下されける。人もこそ多き中に、斯樣の御諚蒙る事、生前の面目、何事か是に如かんと存する間、鐵銅を丸めたる猪なりとも、餘さじものをと思ひければ、大の鹿矢を拔き出し、只一矢にと引いて放つ所に、矢よりも先に飛び來たり、乘りたる馬の主共に、宙にすくうて投げあげ、落ちば懸けんとする所に、叶はじとや思ひけん、弓も手綱も打捨てゝ、向樣にぞ乘り移る。されども倒にこそ乘つたりけれ。猪は乘られて腹を立て、馬を彼處へ駈け倒し、雲と霞に分け入つて、虛空をとんで廻りしは、周の穆王、釋尊の教法を聞かんとて、八匹の駒に鞭を上げ、萬里の道刹那に飛び着きしも、是には爭で勝るべき。

新田は、習ひし手綱の様、腰もきれよと挟みつけ、尾筒を手綱に取り、樂天の傳へし三頭王良が祕せし手綱、是なりけりと堪へけれども、詮方なくぞ見えたりける。猪は愈猛りをかき、木の下、萱の下、巖岩石を嫌はずして、宙に飛んで廻りしかば、烏帽子、竹笠、沓、行縢、一度に切れて落ちにけり。大童になりて、只落ちじとばかりぞ堪へける。大きに猛き猪も、數多手は負ひぬ、新田が威にや押されけん、御前近き枯杭に、躓き弱る所に、過たず腰の刀を拔き、胴中に突き立て、肋骨二三枚搔き切りければ、猪は四足を四五寸土に踏み入れて、立すくみにこそなりにけれ。新田は急ぎ飛び下りて、かずの止を刺す。上下の狩人これを見て、「前代未聞の振舞かな。面白くも止めたり。乘りも乘つたり、堪へも堪へたり」と、感ぜぬ人こそ無かりけれ。君も此の由御覽じて、「狩場の中の高名は、是に如かじ」と御感あり。富士の下方にて、五百餘町を賜りけり。勢餘りてぞ見えし。されども此の猪は、富士の裾隱居の里と申す處の、山の神にてぞ座しける。凡夫の身の悲しさは、夢にも是を知らずして、止めにける御咎にや、やがて其の夜、曾我の十郎に打ち合ひ、數多の手負ひ危かりし命、幾程なくて、田村の判官が謀叛同意の由、讒言せられて、討たるべかりしを、重保につき申し開き、御目にかゝらんとて參じける折節、めしの御馬放れたりしが、御庭狹しと馳廻る。日本一の荒馬なれば、追ひ廻す人々是を見て、「よしや新田、取れや忠常、繩を懸けよ、過す

な」と、聲々に呼ばはりて、庭上騒動す。新田が郎黨門外に集りて、「我等が主、只今搦め取らるゝぞや。主の討たるゝを見捨てゝ、何處迄か逃るべき」とて、思ひきつたる兵ども、二三十人拔き連れて、御前指して斬つて入る。新田が運の極なり。御所方の人々是を見て、「新田が謀叛眞なり。餘すな方々」とて、非番當番の人々出で合ひて、火出づる程こそ戰ひけれ。御所方の人々數多討たれしかば、新田がちんぼう逃れずして、二十七にて討たれにけり。不便なりし事どもなり。是然しながら富士の裾野の猪の咎なりとて、舌を卷かぬは無かりけり。是や靈神怒る時は、災害衢に滿つるなるも、今こそ思ひ知られたれ。

十　船の始りの事

偖も御寮は、何時の暮より、御狩の興に入り、四方の海山をぞ眺めさせ給ひける。折節冲つ島の木の間より、漕ぎ浮べたる蜑小舟、同じ風にぞ行き違ふ。「實に不思議なる舟のあやつりかな。誰人か仕初めつらん」と仰せられけり。千葉の介が申しけるは、「船の始は昔黃帝の御時、蚩尤と云ふ逆臣ありて、おほごうと言ふ海を隔てゝ、攻むべき樣なかりけり。爰にくわてきと言ふ臣下あり。折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉の上に乘りつゝ、次第々々に小蟹の、いとはかなくも柳の葉の、汀に寄りし秋霧の、立ち來るくもの振舞、實にもと思ひそめしより、たくみて船を造らせ、おほごうを易く渡り、蚩尤を平げ、御代を治め給ふ事、一萬八千歳となり。然るに船の船の字を、君に薦むと書きたり。又天子の御駕を龍駕と名付け奉り、又船を一葉と言ふ事も、此の時よりぞ始りける。又君の御座船を、龍頭鷁首と申すも、此の御代よりぞ起りける」と申しければ、「偖極樂の弘誓の船は如何にや」「夫は菩薩聖衆の御法にて、凡夫の及ぶ所に候はず」とぞ申されける。同じく、富士の高嶺を遙々と見上げさせ給ひて、昔竹取の翁、鶯の卵を養じて、赫夜姫となりし行方、又、

風に靡く富士の烟の空に消えて行方も知らぬ我が思かな

と詠ぜし西行法師が下心まで、思し召し出しけり。

十一　祐經を射んとせし事

梶原源太左衞門景季は、未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を待ちかけつゝ、駈け竝べ、よつぴいて放つ。されども上を遙に射越して通しけり。景季取り敢ずかくこそ申しけれ。

夏草の繁みが下を行く鹿のそでの横矢は射にくかりけり

君聞こし召して、神妙なりとて、これも富士の裾野にて、百餘町をぞ賜りける。人々是を聞いて、「鹿射外し歌よみてだに恩賞に預る。況て好く止めたらん輩は、如何に」とぞ申しける。御寮、左衛門の尉祐經を召して、「不審なる事あり、用心せよ」と仰せ下されければ、畏り存じ候由を申しける。爰に梶原源太景季、侍の所司にて、總奉行第一の者なれば、上の御諚を承り、曾我の人々を近付けて申しけるは、「神妙に御供申されて候。奉公は何れも同じ事。御宿に大事の御物具あり、留守の御宿直申されよ。如何様今度鎌倉へ入らせましまして、御免蒙り給ふべし。奉公心に入れられよ」と申しければ、祐成是非に及ばずして、「畏り入り候。よき様に御申し候へ。頼み奉る」とぞ返事しける。源太重ねて申す様、「御給仕によつて、本領仔細あらじと存じ候」と言ひてこそ歸りにけれ。時致是を聞きて、「あはれ源太、我々を賺さんと思ひたる氣色の、さし現はれたる奴かな。蛇は一寸を出して其の大小を知り、人は一言を以つて其の賢愚を知る。狐の子は小狐より、父が孫を繼ぎて、此の冠者が頬の白さよ。いつの奉公によりてか、御氣色もよかるべき。定めて御寮の仰には、其の冠者原は誰が許して、狩場へは出でけるぞ。よく〳〵賺し置きて、首を斬れとの御諚か、流罪せよ、との仰にてぞあるらん。實にや古き詞を案ずるに、國の賢を以つて興し、諛を以つて衰ふ。君は忠を以つて安じ、僞を以つて危し。人は巧にして僞らんよりも、拙うして誠あるには如かず。

此の者の振舞は、世の煩ともなりぬべし。其の上奉公申すべき爲ならず。哀れ身に思ひだに無かりせば、此の冠者が頬一太刀斬つて、慰まんずるものを」とぞ申しける。偖兄弟は、見え隠れに連れつ離れつ、心を盡し狙ひけるこそ無慙なれ。十郎が其の日の裝束には、萌黄匂の裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に、夏毛の行縢深くひつこうで、たかうすべうの鹿矢、筈高に取つてつけ、重籐の弓の眞中取り、葦毛なる馬に貝鞍置きてぞ乘つたりける。五郎が其の日の裝束には、薄紅にて裏打つたる、ひやう紋の竹笠眞深に被て、からざいみに蝶を二つ三つ、所々に附けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行縢、たぶやかに穿き下し、鶴の本白の征矢、筈高に負ひなし、二所籐の弓の眞中取り、鹿毛なる馬に、蔣繪の鞍置きて乘つたり。遙に遠き敵を見付けて十郎につげ、下にて祐經を見附けて五郎につげ、互に心を通はしけり。人は皆、鹿に心を入れ、如何にもして、上の見參に入らんと、嶺に登り谷に下り、野を分け里を尋ねけれども、よそめいかゞと思ひしに、列卒を破りて鹿こそ三頭出で來りけれ。是は如何にと見る所に、彼の祐經こそおつすがひて落しけれ。其の日の裝束花やかなり、浮線綾の直垂に、大斑の行縢に、切斑の矢負ひ、吹寄籐の弓の眞中取り、金砂にて裏打ちたる浮紋の竹笠、嵐に吹き靡かせ、黑き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置いてぞ乘つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も究竟の乘手なり、三つある鹿に目を懸けてこそおつすがうたれ。三つある鹿

には隔りぬ、馬の駈場もよかりけり。十郎是を見て、「此の鹿は埒の外に列卒を破りて落ち來るにや追ひ返し奉らん」とて、十三束の大の中差取つて番ひ、矢所多しと言へども、奥野の狩場の歸り様に、父の射られけん鞍の山形の端、行滕の引合、報のしらする恨の矢、餘の所をば射べからず、如何なる金山鐵壁なりとも、志のなどかは通らざらんと、弓手になしてぞ下りける。五郎も同じく、中差取つて差し番ひ、左衛門の尉が首の骨に目をかけて、大磐石を重ねたりと言ふとも、などか斬つて捨てざらんと、鞭に鎧を揉み添へて、右手に相付け馳せ竝べ、三つある鹿と左衛門を眞中に取り込め、矢先を左衛門に指し當てゝ引かんとする所に、祐經が暫しの運や殘りけん、祐成が乘つたる馬を、思はぬ伏木に乘りかけて、眞倒にころびけり。あやまたず弓のもとを越して、馬の頭におり立つたり。五郎は之を知らずして、矢筈を取り立ち上りけるが、兄の有様を一目見て、目もくれ心も消えにけり。此の隙に、敵は遙に馳せ延びぬ。鹿をも人に射られけり。五郎空しく引き返し、急ぎ馬より下り立つて、兄を介錯しける、心の内こそ悲しけれ。「あはれ實に我等程、敵に緣なき者あらじ。只今はさりともとこそ思ひしに、馬强かりせば、斯様にはなりゆかじ。是も貧より起る事なり、人を恨むべきにもあらず。叶はぬ命ながらへて物を思はんよりも、自害して惡靈にもなりて、本意を遂げん」とぞ悲しみける。十郎是を聞きて、「暫く待ち給へ。それ泰山の龜は巖を穿ち、雷は

石を穿つ、彈極の釣瓶の縄は井桁をきる。水は石の鑿にあらず、索は木の鋸に非ず、漸靡の然らしむる所なり。只心をのべて功を積み給へ」とて、馬引き寄せ打乘りける。

十二　畠山歌にて訪はれし事

其の後は人々如何に見るらんとて、十郎駈くれば五郎控へ、五郎行けば十郎止り、他目をも包みければ、時移り事延び行きければ、其の日も已に暮れなんとす。畠山殿は程近くましませば、兄弟の有様をつく〴〵と御覽じて、今まで本意を遂げざるぞや。あはれ平家の御代と思はゞ、などか矢一つとぶらはざらん。當君の御代には、斯様の事も叶はず、重忠も若き子供を持ちぬれば、人の上とも思はずして、誠に無慙に覺えたり。梶原觸狀には、明日鎌倉へ入らせ給ふべきなれば、今宵討たでは叶ふまじ。此の由知らせんと思ひ給へども、人々數多有りければ、歌にてぞ訪ひ給ひける。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮を待ちて見よかし

と詠め給ひて、涙ぐみ給ひけり。折節梶原源太左衛門が、近う控へたりしが、「何事にや曾我の殿原に、まだしきに色づくと詠じ給ふは心得ず」重忠聞いて、「夏山に夕日影のさし殘る風情、初紅葉に似ずや。この夕こそ猶も移り行かば、誠秋にやなり行かん」源太猶も言葉あり顔なりしを、君より

急ぎ召されしかば、駈け通るとて、「重忠の御歌の不審殘りて」と言ひながら、馳せ過ぎければ、人人聞きて、「今に始めぬ梶原が和讒とは言ひながら、ことにかゝりて見えぬるをや」と申し合ひける。重忠仰せけるは、「命を養ふ者は病の先に藥を求め、世を治むる者は亂れぬ先に劒を習ふと、三部論に見えたり。夫迄こそ無くとも、斯樣のえせ者を近く召し使ひて、末の世如何」とぞ仰せける。其の後曾我の人々を近付けて、「今宵重忠が所へましませ、歌の物語を申さん」と宣へば、畏り存じ候由返事して、十郎弟に言ひけるは、「畠山殿は情を以つて、早此の事を知り給ひけるぞや。耳を信じて目を疑ふ者は、耳の常の弊なり。遠きを尊みて近付くを賤む者は、人の常の情と、抱朴子に見えたり。されども歌の心は如何に」と問へば、「知らず」と言ふ。十郎は萬に情深くして、歌の心を得たり。「思ふ事あらば今宵限りと告げ給ふぞや。君は明日伊豆の鄕、明後日鎌倉へ入らせましまし由、其の聞あり。思ひ定め給ふべし」と言ふ。「珍しくも思ひ定め候べきか」「申すにや及ぶ」とぞ申しける。元來剛なる時致が重忠には勇められ、愈今宵を限とぞ定めける。豫てより思ひ定めし事なれども、差當りて心細さ、思ひやられて無慙なり。日暮れ、君井出の館へ入り給ひしかば、國々の大名小名、御供してぞ歸りける。曾我兄弟も人竝々に柴の庵へぞ歸りける。

十三　館廻りの事

道にて十郎申す樣、「和殿は館へ歸り給ふべし。二人連れては人も怪しく思ひなん。祐成許り行きて、館の案内見て歸らん」とて、太刀ばかり持たせ、館々を廻りけり。思ひ〳〵の幕の紋、心々の館の次第、なか〳〵言葉も及ばれず。爰に二つ木瓜の幕打ちたる館あり。誰が幕やらん、是は我等が家の紋なり。御敵となり亡びぬ。伊東と名乘る者無ければ、此の幕打つべき者なし。誰なるらんと不思議にて立ち寄り、幕の物見より見入れければ、敵左衞門が館なり。是は如何に、彼等は一つ木瓜の幕をこそ打つべきに、心得ぬ者かな。誠や人人に非ず、しるを以つて人とし、家家に非ず、何處を以つてか家とす。繼ぐべきをば繼がで、すずろなる曾我の某と呼ばれぬる上は、家の紋いるべからず。祐經は誠やらん、我々が先祖の知行せし所領を知るによつて、斯樣になり行く者をや。哀昔は斯樣に無かりし者をと、見入れて通りけり。

十四　祐經が館へ行きし事

かくて祐經が嫡子犬房、祐成を見つけて、「只今十郎通り候」左衞門聞きて、「玉の井の十郎か、横山

の十郎か」と問ふ。「曾我の十郎殿」と言ふ。「是は祐經が館にて候。立ち寄り給へ」と言はせければ、祐成少しも憚らず、館の内へ入り見給へば、手越の少將は、左衞門の尉が君と見えたり。黄瀨川の龜鶴は、備前の國吉備津宮の王藤内が君と見えて、嫡子犬房に酌取らせ、酒盛しける折節なり。幾程の榮華なるべき。今宵の夜半にひきかへん事の無慙さよと、思ひながら座敷にぞ直りける。祐經、敷皮を去りて、「是へ」と言ふ。十郎、「かくて候はん」とて、押し退け居たり。祐經が初對面の詞ぞこはかりける。「誠や殿原は祐經を敵と宣ふなる、努々用ひ給ふべからず、人の讒言と覺えたり。差當る道理に任せて、人の申すも理なり。伊東は嫡々なる間、祐經こそ持つべき所なるを、面々の祖父伊東殿横領し、一所をも分けられざりしかば、一旦は恨むべかりしを、第一養父なり、第二叔父なり、第三烏帽子親なり、第四に舅なり、第五に一族の中の長者なり。一方ならざるによつて、堪へて過ぎしに、是は只高きに望み登らざれ、賤しきを謗り笑はざれ、と言ふ本文を捨てゝ、我等を員外に思ひ給ふ故なり。面々の父河津殿、奥野の狩場の歸りに討たれ給ひぬ。獵師多き山なれば、丘越しの矢にや當り給ひけん。又は伊豆、駿河の人々多く打ち寄り、角力とりて遊び給ひけるに、股野の五郎と勝負を爭ひ、當座に喧嘩に及びしを、御寮の御成敗に依り靜りぬ。左樣の宿意にてもや討たれ給ひけんを、在京したる祐經に、かけて申されけるなれども、更に知らず。剩へ祐經が郎

黨共數多失ひぬ。其の時分頓て對決を遂げたりせば、のこるべかりしを、幾程無くして當御代となりて、面々親しき人々皆御敵とて、ながらへ給はぬ。只祐經一人になりて、終に此の事さんだんせずして止みぬ。然れば只祐經がしたるになりて、年月を經候。是不祥と言ふも餘りあり。よく聞き給へ十郎殿」祐成聞きて、兎角言ふに及ばず、只謹んで居たり。「是なる客人をば知り給ふにや」「今日初めて見參に入り候へば、爭でか見知り奉るべき」「あれこそ、備前の國、吉備津宮の王藤内とて、さる人なるが、今年七年君の御不審を蒙り、所領召されて有りつるを、この三箇年祐經とりつぎ申しつる間、御免を蒙り、所領に安堵して、蒲原まで上り給ひしが、祐經に名殘惜しまんと て歸り給ふ。斯樣に、他人だにも申し承れば、親しくなるぞかし。まして殿原と祐經は、從兄弟甥と言ふ者なれば、今は親とも思ふべし。便宜然るべく候はゞ上樣へ申し入れ、奉公をも申し、一所をも賜りて、馬の草飼所をばし給へ。殿原は祐經が思ひ奉る樣には、思ひ給はじ。北條へは、常に越えて遊び給へども、何を恨みてか、更に伊豆へは見え給はず。しもたてぬ賢人顏せんよりも、我々に睦びて、若き者共に背かれずしてましませ。面々の馬の樣を見るに痩せ弱り候。伊東に馬ども數多候へば、乘りつけて乘り給へ。懇に人の言ふ事について、祐經討たんと思ひ給はん事、今生にては叶ふまじ。曾我殿原」と、廣言しけるが、如何思ひけん、言葉をかへて言ひけるは、「醉狂の餘

り。言失仕ると覺えたり。今より始めて、互の遺恨を止めて、親子の契たるべし」とて、盃取り寄せ客人なればとて、王藤内にはじめさせ、其の盃珍しきとて、十郎にさす。其の盃少將にさす。其の盃祐經にさす。其の盃を十郎にさす。酒を八分にうけて思ひけるは、憎き敵の廣言かな。身不肖なり、何事かあるべき、と思ひこなし、初對面に、さんざんに言ひつるこそ奇怪なれ。此の君共が耳こそ、東八箇國の侍の聞くところ、日比は親の敵、只今は日の敵、襖に衣を重ねても逃すべきに非ず。うけたる盃、敵の面にうちかけて、一刀刺し、如何にもならばや、と千度百度進めども、心をかへて思ふ樣、待て暫し、兄弟と言ひながら、祐成と時致は、父の敵に志深くして、一所にて兎にも角にもと契りしに、心はやりの儘に、祐成いかにもなるならば、五郎空しく縛められ、恨みん事こそ不便なれ。爰は堪ふる所と思ひ靜めて止りしは、情深くぞ覺えける。左衛門の尉は神ならぬ身の悲しさは、我を心にかくるとは、夢にも知らずして、「十郎殿、盃は如何にほし給はぬ。御前達數多ましませば、肴待ち給ふと覺えたり。今樣を謠ひ給へ」と言ひければ、二人の君、扇拍子を打ちながら、

蓬萊山には千年經る、千秋萬歲重れり。松の枝には、鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ

と言ふ一聲を返し、二遍迄こそ謠ひけれ。其の時盃取り上げて、三度迄こそ乾したりけれ。其の

土器、祐經乞うて、「方々は何とか思ひ給ふらん、知らねども、今日よりして、親子の契約あるべし。あの小童奴を弟と思し召され、汝も兄と思ひ奉れ。他人の惡しからんは恨みにあらず。親しき中の疎きをば、神明も憎み給ふ事なれば、今より後、互に憚あるべからず。此の盃賜りて、祝ひ候はん。但し所望候ぞや、十郎殿は亂拍子の上手と聞けども未だ見ず、一番舞ひ給へ。一つは客人の爲、一つは祐經が祝のあやにく如何あるべき。御前達面白く候べし、早々」と責めければ犬房囃ぞ立てたりける。祐成、仔細に及ばずして、持ちたる扇さつと開きて、「君が住む、龜尾が山の瀧つ瀨は」と言ふ一聲を揚げて暫し舞ひけるが、ちゞに心を通して、兎やせん角やせましと、思ひ亂るる舞の手に、夜更けば入るべき道づたひ、番はづさん長舞に、此處より入り彼處より廻らん。彼處はつまり此處は通路、忍びて入らば音は立たじ、入るとも知らじ。さす腕、袖の返に目を遣ひ、半時許ぞ舞うたりける。座敷に連る人々は、見知る印の無き儘に、興を催す許りなり。君どもを始めとして、囃すも覺えぬ風情なり。かくて十郎舞ひ入りければ、祐經盃思ひがへしとて、十郎にさしたりければ、十郎取り上げ、三度乾して扇取り直し、畏つて申しけるは、「今宵は是に御宿直申したく候へども、北條殿に申し合する仔細候。何樣明日參りて、常々宿直申すべし」と、暇乞うて出でにける。祐成案者第一の男子にて、敵何とか言ふらんと思ひ、小柴垣に立ち隱れ、聞く事は知らで、王藤內、

「此の殿原の父をば、誠に討ち給ひけるか」と問ふ。左衞門の尉聞きて、「今は彼等が聞かばこそ、以前具に申しつる樣に、我等嫡孫にて持つべき所領を、彼等が祖父に横領せられぬ。某が在京ながら、田舍の郎黨共に申し付けて、彼等が父河津の三郎と言ひし者を討たせしなり。人もやさぞ知りて候らん。此の者共の子孫は、皆謀叛の者、君に失はれ奉り、今祐經一人に罷りなる。然れども君不便の者に思し召し、先祖の所領拜領の上は、祐經に狹められ、思ひながらぞ候ふらん。かれが此の比の分限にて、祐經に思ひかゝらんは、蟷螂が斧を取つて隆車に向ひ、蜘蛛が網をはりて、鳳凰を待つ風情なり。哀れなる」とぞ申しける。王藤内聞きて、「それこそ僻事よ。世にある人は所領財寶に心が留り、思ふ事は滯るなり。されば寸の金を切る事なし。貧なる侍と鐵とは、あなづらぬものをや。何とやらん惡しき樣に仰せつる時には、頻りに目をかけ奉り、刀の柄に手を掛け、片膝押し立てつる時、事出で來ぬと見えしが、されども色には出さず、よき兵かな」とぞ譽めたりける。左衞門の尉是を聞き、「何程の事か仕るべき。龍は眠りて本體を現はす、人醉ひて本心を現はす。思ふ事こそいはれ候へ。恒河沙はつき、螢の火にて須彌は燒くるとも、討たるゝ事あるべからず。南無阿彌陀佛」とぞ申しける。後に思ひ合はすれば、是や最後の念佛と、哀れにぞ覺えし。十郎かく言ふを立ち聞きて、即ち館の内へ走り入り、如何にもならばや、と思ひしが、五郎に憂身の惜しまれて、只空しく歸りける、心の中こそ無慙なれ。抑只今の言葉ども、よく〳〵思へば、唯王藤内が言はする言葉なり。今宵は落ちば落さんと思ひつれども、今の言葉の奇怪なれば、一の太刀には左衞門、二の太刀には王藤内、と思ひ定めて、館よりこそ歸りけれ。

十五　屋形の次第五郎に語る事

五郎兄を待ち兼ねて、心もとなくして佇みける處へ、十郎來りて、「いかに待遠なるか」五郎聞きて、「さらぬだに人を待つは悲しきに、疎に思し召すものかな」「祐成もさ存ずるを、敵左衞門が屋形へ呼び入れられ、酒をこそ飲みつれ」「さていかに、便宜あしく候ひけるか」「言ふにや及ぶ。亂舞のをりふし、あはれと思ひしかども、御分一所にこそと存じて、堪へつる志おし量り給へ」五郎も聞きて、「御ふちはさる事にて候へども、是程よりつかずして心をつくす、便宜よく候はゞ御うち候べきものを、さりながら一太刀づつ、ともゝ〳〵に斬りたく候ぞかし。其の屋形の樣御覽じ候ひけるにや」「其の爲案内はよく見おき候ひぬ。但し屋形の數多くして、見知りたる人は所々にこそ候ひつれ。扇開きてこそは數へけれ。先君の御屋形に竝べてうちたりしは、北條の四郎時政、御一門には、一條、板垣、逸見、武田、小笠原、南部、下山、山名、里見の人々、石山、山形、梶原、

屋形を並べて候なり。東には、和田、畠山、黒戸、姉崎、本田、榛澤、池邊、兒玉、小澤、山口、丹野、横山、きいの兩黨、岡部、榛澤、金子、村山、村岡、なかさや、折原、比企、中條、みたむろの人々、屋形をならべて候。常陸の國には、佐竹、山内、志田、とう、近島、行方、こく、宍戸、森山、ちちばの殿原、下總の國には、千葉介常胤、相馬次郎諸胤、けしの三郎種盛、こくぼの五郎胤道、たうの六郎胤兼、葛西三郎清重、大猿島、大原、小原、屋形をならべ候なり。上野の國には、伊北、伊南、廳北、廳南、印藤、金岡、小寺、深須、山上、大越、大室、上總の國には、桐生、黒川、丹後、片山、新田、園田、玉村、安房の國には、安西、金丸、東條、信濃の國には、内藤、片桐、黒田、周防、齋藤、村上、井上、高梨、海野、望月、屋形を並べ候なり。下野の國には、小山、宇都宮、結城、長沼、氏家、鹽谷、木村、皆川、足柄、まのだの人々、屋形を並べ候ひぬ。相摸の國には、座馬、本間、土屋、愛甲、土肥の次郎父子、糟屋の藤五、澁谷、佐藤、秦野の右馬丞、岡崎、三浦の人々、伊豆の國には、入江、藁科、木津川、船越、大森、桂山、遠江の國には、石尼、清水、三河の國には、設樂、中條、尾張の國には、大宮司、宮の四郎、關の太郎、美濃の國には、高島、松井、近江の國には、山本、柏木、たつゐ、錦織、佐々木黨、屋形を並べ候ふなり。當番の人々には、結城の七郎、川越、高坂、大胡、大室、難波の太郎、上總介父子、屋形を並べしなり。坂東八箇國、海道七箇

國のみに非ず、三年の大番、訴訟人といふ程の者の屋形、雲霞の如くなり。さて君の御座所をば眞中に、四角四面に瑠璃を延べ、五十九間に飾られたり。面々思ひ〳〵の屋形造、いろ〳〵の幕の紋、金銀を鏤めてこそ飾られけれ。およそ屋形の數二萬五千三百八十餘軒なり。總じて上下の屋形の數、十萬八千軒のきを竝べてこうぢをやり、甍を竝べてうちたりけり。東にそうたるは梶原平三景時、西のはづれは左衛門の尉祐經が屋形なり、幾程とこそ思ひけん」五郎聞きて、「さて客人は何處の國の如何なる人にて候ひける」「備前の國の住人、吉備津宮の王藤内、手越の少將、黄瀬川の龜鶴を並べおきて、酒盛半なりしに呼び入れ、祐成も舞をまふ程の事なりつるに、面にあてゝ廣言どもしつる無念さよ。一刀さし、いかにもと思ひけれども、和殿に命が惜しまれて、手に握りたる敵を逃しつるこそ無念なれ」五郎聞きて、「是や寶の山に入り、手を空しくする風情なり。嬉しくも御こらへ候ものかな。餘し候べきにも候はず。南無阿彌陀佛」とぞ申しける

卷第九

一　和田の館へ行きし事

「來つて暫くも留らざるは、有爲轉變の悟、去りて再び歸らざるは、冥途黄泉の別なり。愛傷戀慕の悲み、今にはじめぬ事なれども、日本國に我等程、物思ふ者あらじ、と案ずるに、劣らず歎をする者のあるべきこそ不便なれ」五郎聞きて、「たれやの者か我等に勝りて候べき」「さればこそとよ、備前の王藤内が、七年御不審蒙り、此度安堵の御下文を賜りし使さきに下り、かくといはゞ、國に留る親類、集り悦びあはん處に、又人下りて、討たれぬといふならば、さこそ歎かんずらんと、深き言葉を案ずるに、人として能あるものは、天の加護により、人として財あるものは、歎によると見えたり。されば王藤内助けばやとは思へども、雜言餘りに奇怪なれば、祐成に於ては餘す可からず。御分も漏すな」と申しければ、「承る」とぞ申しける。「かくて夜の更けん程待たんも遙なり。いざや和田殿の館へ行き、最後の對面せん」「然るべし」とて、二人うち連れ、義盛の館へぞ行きけ

る。頓て義盛出で合ひて、「いかに殿原達、はるかにこそ存ずれ。狩くらの體是が初にてぞましますらん。何とか思ひ給ひけん。誠に見物には上やあるべき」十郎扇笏に取り直し畏つて、「さん候、斯様の事は珍しき見物、末代の物語に、あの冠者に見せ候はん爲、二三日の用意にて罷り出で候が、餘りの面白さに、斧の柄の朽つるを忘れ、曾我へ人をこして候。其の程と存じまゐりて候」といひければ、和田聞きて、何條其の儀あるべき。日比の本意を遂げんとするが、一家のみはてに、義盛に今一度對面せんとてぞ來りぬらんと、哀れに思ひければ、「さぞ思すらん。數多度見て候だにも面白く候。まして若き人々の、初めて見給はんにさぞ思し召すらん。嬉しくも來り給ふものかな。豫てより知り奉りなば、初めより申すべかりつるものを」とて、酒取り出し勸めけり。盃二三度廻りて後、和田宣ひけるは、「相構へて、爲ば善く爲給へ、爲損じなば一家の恥辱なるべし。後楯には成り申すべし。賴もしく思ひ給へ」とて、盃さゝれけり。折節梶原源太館の前を通りけるが、かくいふを聞き、「何事ぞや和田殿、曾我の人々にせばよくせよと、仰せられつる不審なり。御耳にや入り候べき」といふ。和田殿聞きて、こは如何に、曲者通りけるよ。さりながら陳じて見んと、思ひければ、「自然の物語何と聞きて、御分御耳に入らんとは宜ふぞ。この面々我に親しき事、上にもしろし召されたり。それにつきては御狩と承り、必ず召はなけれども、末代の見物に、忍びて御

供仕り候。若き者の習、黄瀬川にて女共と遊び候ひしが、君相澤の御所に御入の由承り、急ぎ參り候ひし間、引出物をせず候。歸りに何にても取らせんと申し候間、道の者は恥しきぞ、引出物爲ば善くせよ。爲損じなば一家の恥ぞと申しつるが、此の事ならでは何申したりとも覺えず。急ぎ御申ありて、義盛失ひ給へ」と高聲なりければ、景季も、「一興にこそ申し候へ。何とて和田殿は某に逢ひ給へば、よし無き事にも角を立てゝ宣ふらん、是は苦しからぬ」とて、空笑して通りけり。なほも和讒の者にて、何とか言ふと暫し佇む。是をば知らで、和田殿宣ふは、「水をよく泳ぐ者は埋れ、馬によく乘る者は落ち、日は晝中に移る、月は滿つるに傾く、昊天に蹋れ厚地に拔足せよ、とあるをや、此のものは十分に過ぎて如何ぞと覺ゆる」五郎是を聞き、「御ちんぽうを用ひず通る者ならば、しや細首ねぢ切つて、捨て候べきを」と申しければ、梶原立ち聞きて、誠や此の者は、朝比奈にみぎは勝の大力、烏滸の者と聞きたり。此處にて事爲出し勝負せんより、上樣へ申しあげ、我が力もいらで失はん事、易かるべしと、思ひ定めて、聞かざるよしにて通りけり。和田宣ひけるは、「今暫くも候ひて物語申したけれども、源太と申す曲者が御前に參りつるが、いか樣にか申し上げ候はんずらん。相構へて爲損じ給ふな」といひ置きて、和田は御前へぞまゐられける。此の人々は館に歸り、夜の更くるを待ちけるが、やゝありて十郎申しけるは、「件の梶原が御分がいひつる事を

立ち聞きけるが、いか様大勢にて寄せぬと覺ゆる。館を替へん」と言ひければ、五郎聞きて、「源太程の奴何十人も候へ、一々に切り伏せなん」と申す。十郎聞き、「身に大事さへなくば、いふに及ばず、但し某に任せ候へ」とぞ申しける。

二　兄弟館をかへし事

かくて兄弟の人々は、柴の庵をひきはらひ、思はぬ所へより居つゝ、時を待つこそ哀れなれ。是をば知らで、源太百餘人の兵を引き連れて、人々の館へぞ押し寄せたる。されども人なかりければ、日本一の不覺人、かやうに有るべしと思ひしに違はず、人にてはなかりけり、と高言して歸りしは、をこがましくぞ見えし。是や鼠深く穴を掘りて、群禽の害を遁れ、鳥高く飛んで、さうめいの害を遠ざけるとは、かやうの事なり。危ふしかりし事どもなり。

三　曾我への文かきし事

さても兄弟の人々は、更けゆく夜半を待ち兼ねて、十郎いひけるは、「いざや此の隙に、幼少より思ひし事を委しく文に書きて、曾我へ參らせん」「然るべし」とて、各文をぞ書きける。我等

五つや三つの年より、父の討たれにし事忘るゝ隙なくて、七つ九つと申せしに、月の夜に出でて、雲井の雁金を見て父を戀ひ、明くれば小弓に小矢を取り添へて、障子を射通し、敵の命に準へ、彼を討たん事を願ひ歎きしを、母の制し給ひし事、また父の戀しき時は、一間所にて、二人は語りて慰めども、人々には言はざりしなり。祐成は十三にて元服し、五郎は十一より箱根に上り學問せしに、十二月の末つ方に、里々より衣裳音物、取り添へ〳〵餘の稚子達には送れども、箱王が里よりは贈物もなし。まして父の文もなし。明暮父を戀しく思ひて、權現へ參り、敵を見んと祈りしに、程なく御前にて、祐經を見そめし事不思議なりとて、法師になるべかりしを、此の事によりて、只一人夜に紛れて、曾我へ逃げ下りしなり。男になりて、母の勘當蒙りし事、又打ち出でし時、互の形見給はり參らせ置きて出でし事、信濃の御狩に徒にて下り狙ひし事、虎に契をこめし事、鞠子川、湯坂の峠、箱根寺、大崩までの有樣、矢立の杉の事ども、今の樣に覺えたり。思ふ事ども詳しく書き、命をば父に回向申し、讀誦の御經は母に手向け奉る。親は一世の契と申せども、これを形見にて來世にては參り逢はんと、同じ心に書き止めければ、大きなる卷物一つ宛ぞ書きにける。十郎が言葉の末、五郎に變りたるは、大磯の虎が事なり。五郎が言葉の十郎に變りたるは、箱根の別當の事なり。扨いづれも同じ文章なり。哀れにこそは覺えけれ。

四　鬼王團三郎曾我へ歸りし事

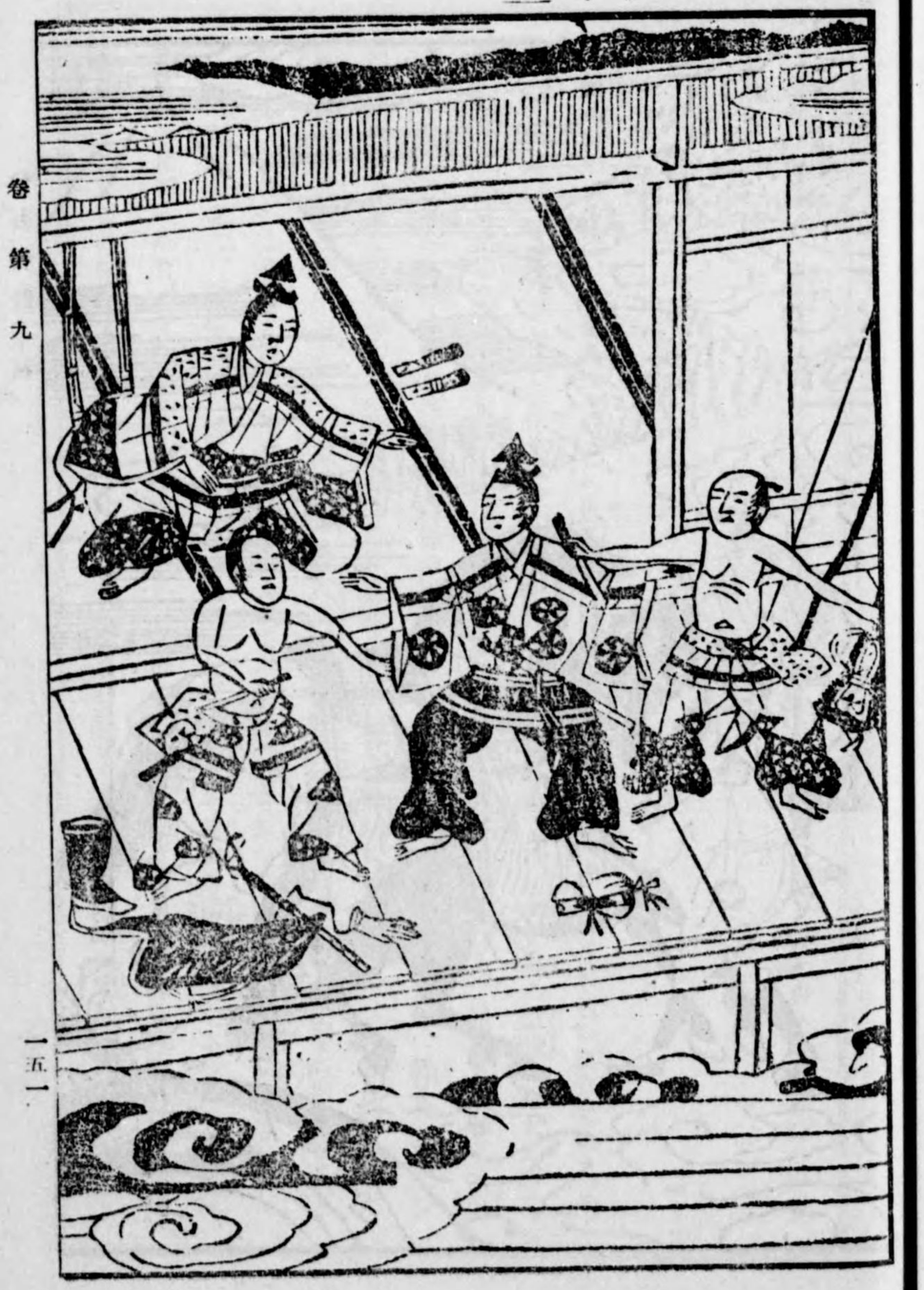
扨鬼王團三郎を呼びて、「汝は急ぎ曾我へ歸るべし。小袖をば上へ參らせよ。馬鞍は曾我殿に奉れ。自然の時は御先途に代り參らせ候べき由、隨分心に懸けしを、父の敵に志深くして、先立ち申す事無念に存じ候へども、恐れながら二人の子供の形見に御覽候へ。五つ三つよりして、左右の御膝にて、育てられ參らせし御恩、忘れ難くこそ存じ候へ。肌の守と鬢の髮をば、弟どもの形見に御覽じ候へとて、二宮殿に參らせよ。弓と矢は汝等に取らするぞ。亡き後の形見に見候へ。鞭と弓懸をば二人の乳母が方へやるべし。沓、行縢は守り育てし二人が守に取らせよ。夜もこそ更くれば、是を持ちて落ち候へ」と有りければ、二人の者共忍びの形見を受取りて申しけるは、「我等相摸を出でしより、自然の事候はゞ、君より先に命を捨て、死出三途の御供とこそ存じ候に、下郎をば命惜しむ者と思し召し、斯樣に承り候か。只召し具せられ候へ。ゆゝしき御用にこそ立ち申さずとも、志ばかりの御供」と申しければ、十郎聞きて「各が思ひ寄る所、誠に神妙なり。斯樣なる者共を、世に無ければ、恩をもせで、離れん事こそ無念なれ。浮世の中何事も思ふやうにならば、いかで叶はぬ事あらん。師君は三世の緣あり。來世にて此の恩をば報ずべし。唯此の形見どもを、悉く曾我へ

届けたらんは、最後の供に勝りなん。狩場に事出で來ぬと聞えなば、物思ふ子持ち給へる母の、我が子供やらんと歎き給はんに、急ぎ參りて此の由かくと申すべし。今少しも疾く急げや」とありければ、團三郎承つて、「かへり候まじ。聞こし召せ。君をば乳の中より某こそ取り上げ奉りては候へ。されば九夏三伏の暑き日は、扇の風を招き、玄冬素雪の寒き夜は、衣を重ねて肌を溫め參らせ、膽心を盡し育て、月とも星とも明暮は、見上げ見下し賴み奉り、御世にも出でさせ給ひ候はゞ、誰やの者にか劣るべきと、賴母しくも可憐しくも思ひ奉り、今まで影形の如く附き添ひ參らせたる印に、情無くも落ちよと承る。假令罷り歸りて候とも、千年萬年を保ち候べきか、只御供に召し具せられ候へ」とて、稚き子の親の跡を慕ふ如くに、聲も惜しまず泣き居たり。兄弟の人々も、心弱くぞ見えける。いかにもして歸すべき者をと聲を高くして、「如何に未練なり、君臣の禮默止し難けれども、心に從ふを以つて孝行とせり。其の上終に添ひ果つまじき身なれば、名殘惜しき事盡くべきにあらず。急ぎ出で候へ」とて、荒らかにこそ宣ひけれ。鬼王居直り、畏つて申しけるは、「某も母の胎内を出で、竹馬に鞭をあてしより、君に附き添ひ申し、成人の今に到るまで、片時も離れ奉る事なし。其のしるしにや落ちよとの仰こそ、誠に御怨めしくは候へ。捨てられ參らせて後、何に懸りて片時のながらへもあるべき。憂身の果こそ悲しけれ」と、さめ〴〵と泣き居たり。誠に志

深く、なじみの久しければ、互に語り給へば、憂につけても、夜や明け日や暮れん。「既に明方近くなるものを、急げや汝等、早くも行け」と重々責めければ、二人の者共言ひかねて、「御供申すべき命何處も同じ事よ。住み果つべき終の住處、後れ先だつ道芝の、變らぬ露の濡衣、拂ひて御供申さん」とて、二人が袖をひきちがへ、既に刀を拔かんとす。時致早くも座敷を立ち、二人が間に押し入つて、涙と共に言ひけるは、「誠に汝等が志は切なり。然りとも雖も、我々是程様を變へ制するを聞かずして、狼藉を致すものならば、淺間大菩薩も御照覽候へ。未來永劫不孝すべし。我等に命を捨つると言ふとも、故郷へ形見を屆けずば、長く志に受くべからず。此の上は制するに及ばず」と、荒らかにこそ叱りけれ。あかぬは君の仰なり。次第の形見を給はつて、曾我へとてこそ歸りけれ。互の心の内、さこそは悲しからめと、思ひ遣られて哀れなり。

五　悉達太子の事

斯て鬼王團三郎は、次第の形見賜り、泣く〳〵曾我へぞ歸りける。是や悉達太子の十九にて、菩提の志を起し、檀特山に入り給ひしに、車匿舍人、犍泥駒を賜り、王宮へ歸りし思ひ、今更思ひ知られたり。鞍の上空しき駒の口を引き、故郷へとは急げども、心は後にぞ止まりける。五月雨の雲間



も知らぬ夕暮に、何處を其所とも知らねども、其方ばかりを顧みて、涙と共に歩みけり。心の中ぞ無慙なる。

六　兄弟出立つ事

扨も此の人々は、郎黨共はこしらへ返しぬ。今は思ひ置く事なし。「いざや最後の出立せん」「然るべし」とて、十郎が其の夜の出立には、白き帷子の腋深く搔きたるに、群千鳥の直垂の袖を結びて肩に懸け、一寸斑の烏帽子懸を強くかけ、黒鞘卷赤銅造の太刀をぞ持ちたる。同じく五郎が裝束には、袷の小袖の腋深く搔きたるを、狩場の用意にやしたりけん、唐貲布の直垂に、蝶を二つ三つ所々に書きたるに、紺地の袴の括ゆるらかに寄せさせ、袖をば結びて肩に懸け、平紋の烏帽子懸を強くかけ、赤木の柄の刀を差し、源氏重代の友切肩に打懸け、誠に進める姿、ふきうが昔とも言ひつべし。頼母しとも餘りあり。十郎松明振り上げて、「此方へ向き候へや時致、飽かぬ顏容見ん」と言ふ。五郎聞きて、敵に逢ひ刹那の隙もあるまじければ、是こそ最後の見參の爲なるべし。誠に祐成を兄と見奉らんも、今許りと思ひければ、兄が顏をつくづくと守りけり。十郎も又弟を見んも是を限りと思ひければ、松明差し上げつくづく見、涙ぐみけり。互の心の中推し量られて哀れなり。

「今は是まで候。御急ぎ候へ」とて、五郎先に進みけるを、十郎袖を控へて、「女數多あるべきぞ、太刀の振り廻し心得候へ。罪造に手ばしかくるな。後日の沙汰も憚りあり」と言ひければ、「さうにや及び給ふ」とて、足早にこそ急ぎけれ。

七　館々の前にて咎められし事

此處に座間と本間と館數十軒、向ひ合ひてぞ打ちたりける。彼の兩人が郎黨籌を數多ところに焚かせ、木戸を結ひ重ね辻を固め、通るべき樣なかりけり。如何せんとやすらふを見て、「何者ぞ是程に夜深けて通るは。殊に其の體事がましく出で立ちたり。怪しや通すまじ」とぞ咎めける。「苦しからぬ者なり。是も用人の態人をこそ咎むべけれ」「いや誰にてもましませ、五つ打ちて後叶ふべからず、との御掟なり。通すまじき」とぞさゝへける。十郎うち向ひて、「御咎あるまじき者なり。是は土屋殿より愛甲殿への御使なり。通し給へ」と言ひければ、「さらば通せ」と許しけり。此處をば過ぎぬれど、いまだ幾個の木戸、幾重の關、警固をか通るべき。事難しき折節かな、と足早に行きけるに、千葉の介が館の前をぞ通りける。此處にも木戸おきぶくたてゝ、番裝束の警固の者數十人、これも籌を焚きてぞ固めける。「何者なれば是程夜更けて通るらん。遣るまじき」とぞ咎めける。五

郎うち寄りて、「御内方の者なり。苦しからず」とて打寄り、木戸を押し開く。「おさへて通るは様あり。我等が知らぬ人有るまじ。御内方とは誰なるらん。苗字を名乗れ」とぞ咎める。「我等は苗字もなきものなり。通し給へ」と言ひければ、「御内方へとは虚言なり。やはか通る」と廣言して、木戸を荒くぞ押し立てたる。五郎は木戸を閉てられて、大きに怒つて言ひけるは、「苦しからねば通るなり。苦しき者の振舞をみよ。これこそさる所へ强盗に入る者よ。止めんと思はん奴原は組み止めよ。手には懸けまじきものを」と言ひければ、番の者共是を聞き、「夜半の兵士は何の用ぞや。斯様の狼藉靜めん爲なり。討ち止めよ」と追つ駈けたり。五郎も「心得たりや、事々し。懸かりて見よ」と言ふ儘に、太刀取り直し待ちかけたり。十郎少しも騒がず、靜々と立ち歸り、「是は更に苦しからぬ者にて候。廳南殿より廳北殿へ大事の御物具の候を、取りに參り候が、夜深に候間人を連れて候へば、若き者にて酒に醉ひて雜言申し候。只、某に御免候へ」と、打笑ひてぞ言ひたりける。御免と言ふに勝に乘り、「さればこそとよ不審なり。其の儀ならば事易し。廳南殿へ尋ね申す可し。其の程待ち給へ」とぞ怒りける。十郎聞きて、かゝる笑止こそなけれ、さりながらも陳じて見んと思ひければ、此の者共怒りける其の中へ、ながゝと立ち交り、「御分達我々をば見知り給はずや。廳南殿の御内に、彌源次彌源太とて、兄弟の厩の者なり。何時ぞや宇都宮殿北山へ御出の時、見參

に入りたりしをば、忘れ給ひ候や」と言ふ。其の中に大人しき雜色歩み出でて、十郎が顏をつくづくと守りけり。祐成彼奴は怖しと思へば、松明少し側へ廻し、眼を少し眇めて居たりけり。此の者共よくくと守りて、「誠に思ひ出したり、片瀨より關戸へ御歸りに、參り逢ひたる樣に覺ゆるぞや」十郎、事こそよけれと思ひければ、「さぞとよ殿原、其の時の酒盛には、座敷の一の狂人ぞかし。忘れ給ふか」と言ひければ、「實に其の人にてましましけり。殿は人をば宣へども、二王舞をばし給はぬか」傍なりける男が、「是程の知音にてましますや。御使なるに急ぎ通し給へ」と言ふ。「哀れ濁酒一桶あらば、如何なる御使なりとも、得手の二王舞を所望申さぬか。一番見たし」とこそ言ひければ、十郎聞きて、「同じ心にて候。さりながら後日に參り逢はん」とて、側目にかけてぞ通りける。此の者共うち寄りて、「誤りけん、通り給へや人々」とて、木戸を開きて押し出す。兄弟の人々は、鰐の口を逃れたる心地して、十郎言ひけるは、「斯樣の處にては、如何にも降を乞ふべきに、御分の雜言心得ず。孔子の言葉をば聞き給はずや。事を見ては勇む事勿れ。大事の前に小事なし、とこそ見え候へ。身ながらも善くこそ陳じぬれ。是や富樓那の辯舌にて、波斯匿王の憤りをやめけるも、今に知られたり」とぞ申し合ひける。

八　波斯匿王の事

抑富樓那の辯舌にて匿王の怒をやめける由來を尋ぬるに、むかし釋尊靈山にて法を說き給ひしに、波斯匿王問法結緣の爲に參らせられたり。富樓那尊者と申すは、辯舌第一の佛弟子にてましましけり。然れども匿王の臣下の子なり。敎法に心を染めて、匿王の方をだに見遣り給はざりけり。匿王怒りを爲して曰く、「扨も尊者は自ら佛前にありつるを、終に夫とだにも見られざりつる奇怪さよ。此の度參らん時は、其の色見すべし」とて、高臣數相具し、怨敵を含みて參られける時、富樓那尊者は路中にて行き逢ひ給ひ、「如何に尊者、何處へ」と宣ふ。尊者聞き給ひて、殊の外恭敬して、過ぎにし佛の御說法の時、君參り給ひしかども、法文歡喜の砌、身を忘れ他を知らざりし事なれば、其の禮更に無かりしなり。匿王は未だ心ぞく殘り、是非にたづさはり給ひき。それ亦道理なきに非ず。御憤默止し難し。王宮よりの御企、さぞと知られて急ぎ參りたり。誠に此の道理辨へ給ふにや、眞如禪定の時は、無二亦無三と說かれてこそ候へ。さるにおきて自も無く他もなく、法界平等なり。何物かありて、邪とも又正とも隔てん。萬法一如にして、阿字本不生の願をなし給へ、と示し給ひければ、匿王猶しも邪に入つて、自らが言葉徒になりて、無禮に等しく候べきにや。愈怒

を高くして、尊者の理に受け候はず。是ひとへに驕慢嗔恚の外道と、あさましくこそ覺えけれ。其の時富樓那、「にやくいしきたんかいをんしむしやうくが、斯樣の人は、正に邪道を行じて、如來を見る事叶ふべからず、とこそ說かれて候へ。色に耽る言葉に尋ねんは、むじやうしはく、かん〳〵と見えたるをや」匿王猶承つて、「其の繩は誰が致しける」其の心に歸りて尋ね給へど、外には無し、と宣ひける所に、匿王一理を受けて、恭敬禮拜して、佛果に生じ給ふ。卽ち尊者引き具し、靈山に參り給ふ。實にや本文に、私の志を忘れ、誠の苦行によつて、波斯匿王も方便の敎化によれる。かへすゞ〳〵私なしとこそ示されてこそ候へ。「但し梶原と言ふ曲者の館の前如何すべき。我等を見知りたる者なり。されども歸るべき道にもあらず。浮沈爰に極れり。運に任せよ」とて通る。案の如く辻固の兵、數十人長道具立て並べ、誠に嚴しく見えたり。詮方なくして、「南無二所權現助け給へ」と念じて、知らぬ樣にて通りけり。されば神慮の御助にや、咎むる者も無かりけり。「すはや好きぞ」と呼きて、足早にこそ通りけれ。唯事ならずとぞ見えける。

九　祐經館をかへし事

既に祐經が館近くなりて「此處ぞ」と言へば、打頷き、既に館へ入らんとしける時、十郎弟が袖を

控へ、「我々敵に打逢ひなば、刹那の隙も有るまじ。今こそ最後の際なれ。心靜に念佛せよ」と言ひければ、「然るべし」とて、兄弟西に向ひて手を合せ、「臨命終の佛達、親の爲に回向する、迎へ取り給へ」と祈念して館の中へぞ入りにける。されども王藤内が申す樣に隨ひ、祐經思はぬ所に館をかへたりければ、唯空しく土器踏み散して、人一人も無かりけり。是は如何にと松明振り上げ見れば、館も同じ館、座敷も宵の所なり。人は多く伏したれども、晝の狩場に疲れ、酒に醉ひ伏しければ、誰そと咎むる者もなし。此の人々は力無く館を立ち出でて、天に仰ぎ地に伏し、悲みけるぞ道理なる。「敵に緣なきものを尋ぬるに、我等には過ぎじ。今宵はさりともと思ひしに、あましぬるこそ口惜しけれ。斯樣にあるべしと知るならば、曾我へ人は返すまじきものを、さなきだに世間に披露せられんこそ悲しけれ。自害して失せなん」とて立ちたりけれ。

十　祐經討ちし事

去る程に兄弟の人は、敵は討ち漏しつ、呆れて立ちたる處に、秩父殿の御内なる、本田の次郎親經、具足さし固め、夜廻の番なりしが、庭上に、「今宵も餘しけるよ」と、小聲に言ふ音しけり。いかに樣伊豆駿河の盜賊の奴原にてあるらん。討ち止め高名せんと思ひ、太刀の鍔元二三寸透し、足早に

歩み寄りけるが、心をかへて思ふ様、一定曾我の殿原の、日比の本意を遂げんとて、夜晝附け廻りつるが、左様の人にてもやと、障子の隙より忍びて見れば、案にも違はず、兄弟は敵のかへたる館を知らで、呆れてこそは居たりけれ。痛はしく思ひ、左衞門の尉が臥したる館の、妻戸を密に押し開き、何とも物をば言はずして、扇を出して招きたり。五郎此の由きつと見て、本田が我等を招くは、様こそあれと思ひ、松明わきに引き側め、廣縁につと上り、「何事ぞや本田殿」と呼けば、本田小聲になりて、「夜陰の名字は詮無し。波にゆらるゝ沖つ船、知邊の山は此方ぞ」と言ひ捨てゝこそ忍びけれ。「其所とも知らぬ夜の浪、風を頼りの港入り、心有るよ」と戯れて、館の内へぞ入りにける。兄弟ともに立ち添ひて、松明振り上げよく見れば、本田が教に違はず、敵は此所にぞ伏したりける。二人が目と目を見合せ、あたりを見れば人もなし。左衞門の尉は、手越の少將と伏したり。王藤内は疊少しひき退けて、龜鶴とこそ伏しにけれ。十郎敵を見付けて弟に言ひけるは、「和殿は王藤内を斬れ。祐經をば祐成に任せよ」とこそ言ひける。時致聞きて、「愚なる御詞かな。我々幼少より佛神に祈りし事は、王藤内を討たんが爲か。此の者は逃げば逃すべし。立て逢はゞ斬るべし。祐經をこそ千太刀も百太刀も、心の儘に斬るべけれ。早斬り給へ、斬らん」とて、勇み懸りて立ちたりけり。果報目出度祐經も、無明の酒に醉ひぬれば、敵の入るをも知らずして、前後も知らでぞ

伏したりける。二人の君どもをば衣に押し巻き、疊より押しおろし、「汝聲立つな」と言ひて、松明側に指し置き、十郎枕に廻りければ、五郎は後にぞ廻りける。二人の君共はじめより知りたりけれども、餘りの恐しさに、音もせず。兄弟の人々は、祐經を中に置きて各目と目を見合せ、打頷きて喜びけるぞ哀れなる。三千年に一度、花咲き實なる、西王母が園の桃、優曇華よりも珍しや。優曇華をば拜みて手折ると言ふなれば、それに譬ふる敵なれば、拜みて斬れや斬れとて、二人が太刀を左衛門の尉に、當てゝは引き、引きては當て、七八度こそ當てにけれ。やゝありて、時致、此の年月の思ひ、唯一太刀にと思ひつる氣色顯はれたり。十郎是を見て、「待て暫し、寢入りたる者を斬るは、死人を斬るに同じ。起さんものを」とて、太刀の切先を祐經が胸もとに指し當て、「如何に左衛門殿、晝見參に入りつる曾我の者共參りたり。我等程の敵を持ちながら、何とて打解け伏し給ふぞ。起きよや左衛門殿」と起されて、祐經も「よかりけり、心得たり。何程の事あるべき」と、言ひも果てず起き様に、枕元に立てたる太刀を取らんとする所を、「やさしき敵の振舞かな。起しは立てじ」と言ふ儘に、左手の肩より右手の脇の下の板敷までも通れとこそは斬り付けゝれ。五郎も「得たりやおう」と罵りて、腰の上手をさし上げて、疊板敷斬り通し、下もち迄ぞうち入りたる。道理なるかな、源氏重代友切、何者か堪るべき。當るに續く所なし。「我幼少より願ひしもこれぞかし。

妄念拂へや時致、忘れよや五郎」とて、心の行く〳〵三太刀宛こそ斬りたりけれ。無慙なりし有様なり。

十一　王藤内を討ちし事

斯て後に伏したる王藤内、寢おびれて、「詮なき殿原の、夜中の戯れ哉。過ちし給ふな、人違ひし給ふな。人々をば見知りたり。後に爭ふな」とは言ひけれども、刀をだにも取らずして、高這にして ぞ逃げたりける。十郎追つ懸けて、「晝の詞には似ざるものかな。何處迄逃ぐるぞ。餘すまじ」とて、左の肩より、右の乳の下かけて、二つに斬つて押し退けたり。五郎走り寄り、左右の高股二つに斬りて押し退けたり。四十餘りの男なりしが、時の間に四つになりてぞ失せにける。逃げば逃がすべかりしものを、搔伏しては逃げずして、懇なる詞言ひて四つになるこそ無慙なれ。五郎、王藤内が果を見て、一首取り敢へず詠みたり。

馬は吠え牛は嘶くさかさまに四十の男四つになりけり

十郎聞きて「よく仕りたり。一期詠じても、是程こそ詠み候はんずれ。秀歌に於ては、時致、集に も召されなん。思ふ本意をば遂げぬ。今は憚る事無し」と、高聲に言ひ散し、どつと笑ひて出でに

けり。

十二　祐經にとゞめを刺す事

扨も兄弟は、敵を心の儘に討ちて、門より外に出でけるが、十郎言ひけるは、「祐經にとどめを刺しけるか。とゞめは敵討つての法なり。實檢の時、とゞめの無きは、敵討ちたるに入らず」「さらばとゞめを刺し候はん」とて、五郎立歸り、刀を拔き取つて押へ、「御邊の手より賜はつて候刀ぞかし。只今返しぬるぞ、確に受け取り給へ。取らずと論じ給ふな」とて、柄も拳も通れ〳〵と刺す程に、餘りに繁く刺しければ、口と耳と一つになりにけり。扨こそ後に人の申しけるは、「宵に惡口せられしその嫉たに、態と口を裂かるゝ」とぞ申しける。幼少より敵を見んと箱根に祈請申し、御前にて祐經を見初むるのみならず、一腰の刀を得たり、今とゞめを刺したる刀是なり。權現の御惠とて感じける。流石に離れぬ一門の中、哀れとや思ひけん、「我過去の宿業と言ひながら、一念の嗔恚により、敵味方とは隔たるなり。慚愧懺悔の力により、六根の罪障を消滅し、因果の輪廻を只今盡し果てゝ、一念の菩提心誤り給はで、一つ蓮の緣となし給へ。阿彌陀佛」と回向して、館をこそは出でたりけれ。十郎は庭上に立ちて、五郎を待ち得て言ひけるは、「我々名乘りて人々に知られ

ん」「尤も」とて、大音聲にて、罵りけり。「遠からん人は音にも聞け、近からん者は目にも見よ。伊豆の國の住人、伊東の次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致とて、兄弟の者共、君の館の前にて、親の敵一家の工藤左衛門の尉祐經を討ち取り罷り出づる。我と思はん人々は、討ち止め名せよ」と言へども、晝の狩場に疲れければ音もせず。小柴垣の下に跳り寄り、猶聲を擧げて呼ばはりけれども、東西南北に音もせず。三浦の館には、かねてより知りたれば、態と出づる者もなし。次の館に聞き付けて、坂西、赤澤、柏原を始として、宗徒の者共出でんとする所を、重忠聞き、「餘りな騒ぎそ。一定曾我の人々が本意を遂ぐると覺えたり。如何に嬉しく思ふらん、心靜によくさせよ。さらぬだに若き者は、心騒ぎて仕損ずる事ありぬべし。靜まり候へ」とありければ、出づる者こそなかりけれ。兄弟の人々は暫し休らひ、敵を待てども無かりければ、十郎言ひけるは、「いざや時致一先落ちて、今一度母に逢ひ奉り、思ふ事をも語り申し、猶事延びば髻切り、如何ならん野の末、山の奥にも閉ぢ籠り、父の孝養をもせん。それ叶はずは心靜かに念佛申し、自害するまで」と言ひければ、五郎聞き、餘りの憎さに音もせず。稍ありて、「此の仰せこそ條々然るべしとも覺えず候へ。弓矢取る者の習には、假初にも一足も逃ぐると言ふ事、口惜しき事にて候。命の惜しき者こそ入道をもし山林に閉ぢ籠り候はんずれ。幼少より思ひし事は遂ぐるなり。何事を思ひ

殘して落ち候べき。母に對面の事は科を懸け奉るべき爲か、させる孝養報恩をこそ送らざらめ。科も無き母痛められ、子供の行方知らぬ事あらじとて責め問はれ、禁獄死罪にも行はれば、我等がいたさずして叶ふまじ。懇に逃げ隱れ居て、彼所此所より搦め出だされ、あまつさへ諸國の侍共に、幾程の命惜しみて、曾我の者共が髻切り乞食をすと、沙汰せられん事は恥かし。其の上一旦隱れ得たりと言ふとも、東は奥州外の濱、西は鎭西鬼界が島、南は紀伊の路熊野山、北は越後の荒海までも、君の御息の及ばぬ所あるべからず。天に翔り地に入らざらん程は、一天四海の内に、鎌倉殿の御權威及ばざる事なし。唯羅網の鳥、鈎を含む魚の如し、信實の仰せとも覺えず。時致におきては、向ふ敵あらば、太刀の目釘堪へん程は、命こそ限りなれ」と申しければ、十郎聞きて、「和殿が心見んとてこそ言ひたれ。祐成が心もかねてより知りぬらん。一足も引き候まじき」と語らひて、寄する敵をぞ待ちかけたり。

十三　十番斬の事

去る程に夜討の時、恐しさに聲も立てざりし二人の君共が、「御所中に狼藉人ありて、祐經も討たれたり、王藤内も討たれたる」と聲々にこそ呼ばはりければ、鎧、甲、弓矢、太刀、馬よ、鞍よ、

とひしめき周章つる程に、具足一領に二三人取り付きて、引き合ふ者あり、繋馬に乗りながら、打ち合ふる者もあり、某かれがしと罵る音は、唯六種震動にも劣らず。稍ありて武者一人出で來て申しけるは、「何者なれば我が君の御前にて、斯る狼藉をば致すぞ。名乗れ」とぞ言ひける。十郎うち向ひて、「以前名乗りぬれば、定めて聞きつらん。斯く言ふ者は如何なる者ぞ」「是は武藏の國の住人、大樂の平右馬の助」と名乗る。祐成聞きて「薫蕕は入る者を同じくせず、梟鸞は翼を交へず、我等に逢ひて斯様の事は過分なり。これこそ曾我の者どもよ、敵討ちて出づるぞ。止めよ」と言ひて追つ駈けたり。右馬の助詞には似ず、搔いふつて、逃げにけるが、押付のはづれに胛骨かけて打込れ、太刀を杖につき引き退く。二番に是等が姉聟、横山黨愛甲の三郎と名乗つて押し寄せたり。五郎打ち對ひ言ひけるは、「紫燕は柳樹の枝に戯れ、白鷺は蓼花の蔭に遊ぶ、斯様の鳥類までも、己が友にこそ交はれ。御分達相手には不足なれども、人を選ぶべきに非ず。時致が伎倆の程を見よ」とて、紅に染りたる友切眞甲に差し挿し、電の如くに飛んで懸る。叶はじとや思ひけん、少し痿む處を、進みかゝりて討ちければ、五郎が太刀を受け外し、弓手の小腕を打ち落されて引き退く。三番に駿河の國の住人、岡部の三郎、十郎に走り向ひて、左の手の中指を二つ討ち落されて逃げけるが、御所の御番の内に走り入り、「敵は二人ならでは無く候。いたくな騒ぎ候ひそ」と申しければ、

「神妙に申したり。いしくも見たり」とて、高名の御意にぞ預りける。四番に遠江の國の住人、原の小次郎斬られて引退く。五番に御所の黒彌五と名乗り押し寄せ、十郎に追つ立てられ、小鬢斬られて引退く。六番に伊勢の國の住人、加藤の彌太郎攻め來つて、五郎が太刀を受け外し、二の腕斬り落されて引退く。七番に駿河の國の住人、船越の八郎押し寄せ、十郎に高股斬られて引き退く。八番に信濃の國の住人、海野小太郎行氏と名乗りて、五郎に渡り合ひ、暫し戰ひけるが、膝を割られて犬居に伏す。九番に伊豆の國の住人、宇田の小四郎押し寄せ、十郎に打合ひけるが、如何がしけん、首討ち落されて廿七歳にて失せにけり。十番に日向の國の住人、臼杵の八郎押し寄せ、五郎に渡り合ひ、眞向割られて失せにけり。此の次に、安房の國の住人、安西の彌七郎と名乗つて、「敵は何處にあるぞや」とて立ちけるが、十郎うち向ひて、「人々は優くも面も振らで討死したるは見つらん。愚人は銅を以て鏡とす、君子は友を以つて鏡とす。引くな」と言ひて討ち合ひけり。彌七も然る者なり、「左右にや及ぶ」と言ひもあへず飛んで懸る。十郎足を踏み違へ、側目にかけてちやうど打つ。肩先より高紐の端へ切先を打込まれ、引き退くとは見えしかど、それもその夜に死にけり。比しも五月廿八日の夜なりければ、闇さは闇し、降る雨は車軸の如くなり。「敵は何處にあるぞや」とて、走り廻る所を、小柴垣に立ち隱れて、出づるをちやうど斬りては蔭に引き籠り、向ふ

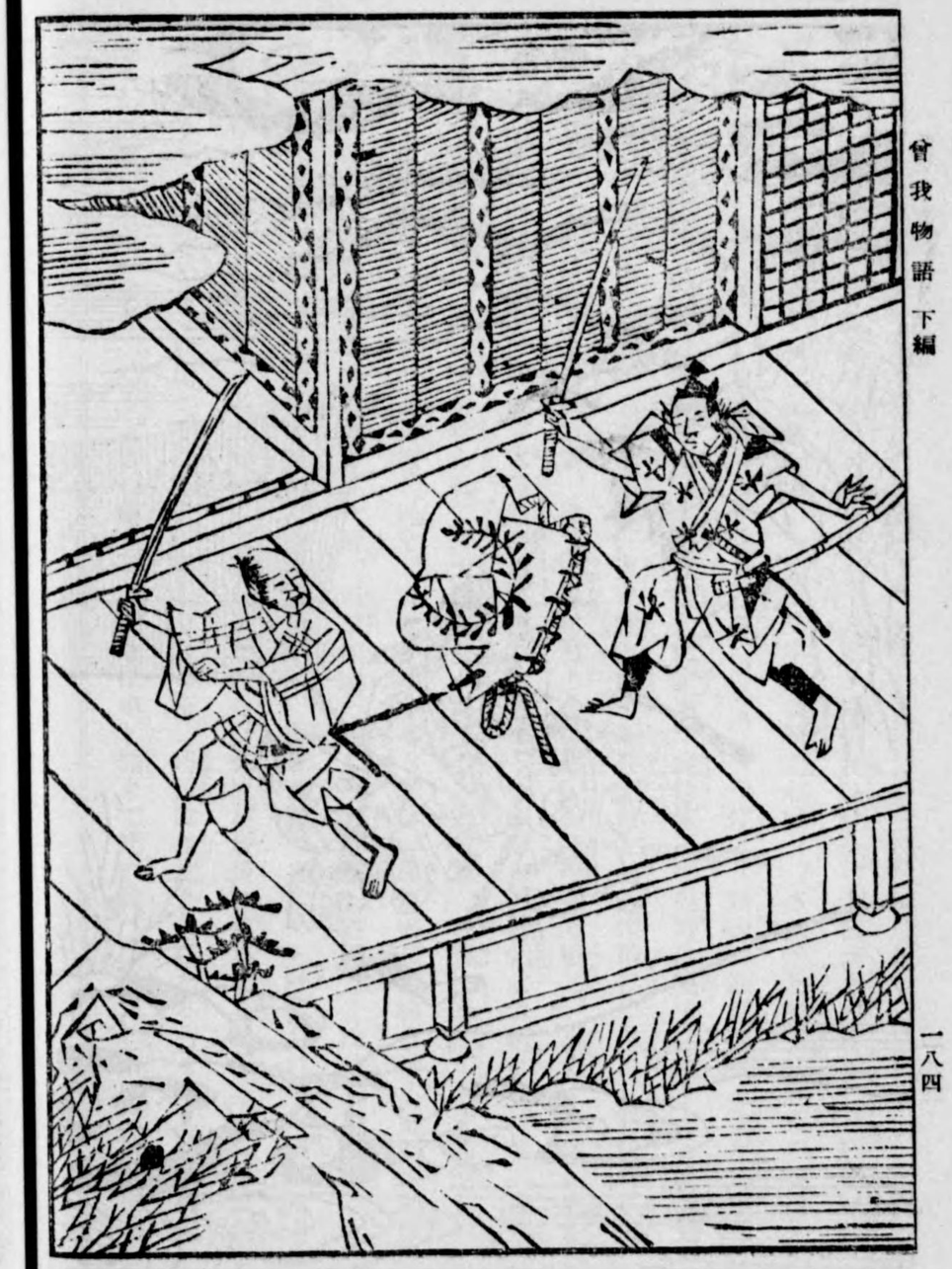
者をばはたと斬る。斬られて引き退く者を、後陣に受け取りて、味方討する所もあり。二人の者共、呼ばはりけるは、「武藏相摸の逸者共は如何に。是も重代、是も重代と思ふ太刀と、刀の鐵の程をも見せよかし。敵は十人あり、二十人あると、後日に沙汰するな。我等兄弟許りぞ。火を出せ、其の明にて名乘り合はん。無下なる者共かな」と呼ばはりければ、御厩の舍人、時武と言ふ者、傘に火を付けて投げ出す。之を見て館々より我劣らじと雜人の、蓑笠に火を付けて投げ出す。二千軒の館より、松明を出しければ、萬燈會の如し、白晝にも似たり。彼等二人は素肌にて、敵に逢はんと走り廻る有樣、小鷹の鳥に逢ふが如し。斯る處に、武藏の國の住人、新開の荒四郎と名乘りかけて、進み出でて申しけるは、「敵は何十人もあれ、某一人にや越ゆべき。出で會へや、對面せん」とぞ言ひたりける。十郎うち向ひて、「優しく聞ゆるものかな。大將に代りて仕へる者は、必ず其の陣を破るとは、文選の詞なるをや、引くな」と言ひて飛んで掛る。言葉は主の恥を知らず、「御免あれ」とて逃げにけるを、十郎繁く追つ駈けたり。餘りに逃所なくして、小柴垣を破りて、高這にして逃げにけり。次に甲斐の國の住人、市河黨に、別當の次郎進み出でて申しけるは、「如何なる白痴なれば、君の御前にて斯る狼藉をば致すぞ。名乘れ聞かん」と言ふ。五郎申しけるは、「事新しき男の問ひ樣かな。曾我の冠者原が、親の敵討ちて出づると幾度言ふべきぞ。聽して耳が潰れたるか。親の

敵は陣の口を嫌はず。扨斯様に申すは誰人ぞ、聞かん」と言ふ。「是は甲斐の國の住人、市河黨の別當の大夫が次男、別當次郎定光」とぞ答へける。五郎聞きて、「吾殿は盗人よ。御坂片山つるばんどうに籠り居て、京鎌倉に奉る年貢御物の兵士の少なきを、遠矢に射て追ひ落し、片山里の下司人の立て逢はざるを夜討などにし、物取る様は知りたりとも、恥ある武士に寄り合ひ、晴の軍せむ事は、いかでか知るべき。今時致に逢ひて習へ、教へん」とて、躍り懸り打つ太刀に、高股きられて引き退く。是等を始めとして、兄弟二人が手にかけて五十餘人ぞ斬られける。手負ふものは三百八十餘人なり。數々出づる松明も、一度に消えて元の闇にぞなりにける。人は多くありけれども、此の人々の氣色を見て、此所や彼所に群立つて、寄する者こそ無かりけれ。

十四　十郎討死の事

稍暫くありて、伊豆の國の住人に、新田の四郎、十郎に打向ひ、「如何に曾我の十郎祐成か」「むかひは誰そ」「新田の四郎忠常よ」「扨は御分と祐成は正しき親類なり」「其儀ならば互に後ばし見するな」「左右にや及ぶ。今宵未だ尋常なる敵に逢はず。言甲斐なき人の郎黨の手に懸らんかと、心に懸りつるに、御邊に逢ふこそ嬉しけれ」「一家のしるしに同じくは、忠常が手にかけて、後日

に勸賞に行はれ給はゞ御邊の奉公と思ひ給へ」と言ひて打合ひける。十郎が太刀は少し寸延びければ、一の太刀は新田が小肘に當り、次の太刀にて小鬢を斬られけり。されども忠常、究竟のつはものなれば、面も振らず、大音聲にて罵りけるは、「伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、生年二十七歳、國を出でしより、命は君に奉り、名をば後代に止め、屍は富士の裾野に曝す。さりとも後は見すまじきぞ。御分も引くな」と言ふ儘に、互に鎬を削りあひ、時を移して戰ひけるに、新田の四郎は新手なり、十郎は宵よりの疲武者、多くの敵に打ち合ひて、腕下り力も弱る。太刀より傳ふ血ののりに、手の内繁く廻りければ、太刀を平めて討ちければ、十郎が太刀鍔元より折れにけり。忠常勝に乘つて討つ程に、左の膝を斬られて、犬居になりて腰の刀を拔き、自害に及ばんとする所を、忠常太刀取り直し、右の肘の端を指し通す。忠常今はかうと思ひ、館を差して歸りけるを、十郎伏しながら、かけたる言葉ぞ無慙なる。「や殿、新田何處へ行くぞ、情なし。同じくは首を取つて、上の見參に入れよ。親しき者の手に懸らんは本意ぞかし。返せや殿、忠常」と呼ばられて、實にもとや思ひけん、即ち立ち歸り、乳の間斬りて押し伏せたる。祐成が最後の言葉ぞ哀れなる。「五郎は何處にあるぞや。祐成こそ新田が手に懸り、空しくなるぞ。時致は未だ手負ひたるとも聞えず、如何にもして君の御前に參り、幼少よりの事ども、一々に申し開きて死に候へ。死出の山にて待ち申す



べきぞ。追つ付き給へ南無阿彌陀佛」と言ひも果てず、生年廿二歳にして、建久四年五月二十八日の夜半許りに、駿河の國富士の裾野の露と消えにけり。弓箭取る身の習、今に始めぬ事なれども、親の爲に命を輕くし、屍は路邊の岐に捨つれども、名をば龍門の雲井にあぐる、哀れと言ふも愚なり。五郎は兄が最後の言葉を聞きて、死骸なりとも今一目見んと思ひ、又忠常を討つべきとや思ひけん、太刀振り廻し、大勢の中を斬り分けて走り寄り、兄が死骸に轉び懸り、「恨めしや、時致をば誰に預け置き、いつ〳〵まで生きよとて、捨てゝは何處へ御座するぞや。ながらへ果つべき憂身にも非ず。連れてましませや」とうち口説き、涙に咽びて伏したりけり。實にや同じ兄弟と言ひながら、互の志深ければ、別の涙さぞ有るらんと推し量られて哀れなり。玆に又堀の藤次と名乗りて、武者一人出でて、「五郎は何處へ行きたるぞや。兄が討たるゝを見捨てゝ落ちけるかや。未練なり」とて尋ねける。五郎此の言葉を聞きて起き上り、太刀取り直し、「や殿、藤次殿、兄の討たるゝを見捨てゝ、何處へか落つべき。祐成は新田が手にかゝりぬ。時致をば和殿が手にかけて首を取れ。惜しまぬ身ぞ」と言ひければ、藤次は五郎が太刀影を見て、搔伏いて逃げにけり。五郎追つかけ、「汝は何處まで逃ぐるぞ」とて追つ驅けゝれば、他所へ逃げては叶はじとや思ひけん、御前さして逃げにけり。五郎も續いて入りければ、親家幕をつかんで投げ上げ、御侍所へ走り入り、五郎も幕を投げ上げ

て、親家を掴まん掴まんと思ひける風姿は、只天魔の如く雷の落ちかゝるかとぞ覺えける。

十五　五郎召し捕らるゝ事

爰に五郎丸とて、御寮の召し仕はるゝ童あり。元は京の者なりしが、叡山に住して十六の年師匠の敵を討ち、在京叶はで東國に下り、一條の次郎忠頼を頼みたりしに、忠頼御敵とて討たれ給ひて後、此の君に參りたりしが、究竟の荒馬乘の剛の者、七十五人が力を持ちけり。宵の程は、夜討といへども音もせず、御前近く祗候せしに、五郎が親家を追うて入るを見て、薄衣引き被き、幕の傍に立ちけり。五郎は一目見たりけれども、館を出でし時、女房に手ばしかくるなと、兄が言ひし言葉ありければ、太刀の背にて通り様に、一太刀當てゝぞ過ぎにける。五郎丸と知るならば、唯一太刀に失はれんと、危ふくこそ覺えけれ。時致も親家を手捕にせんと追ふ所を、五郎丸我が前をやり過し、續いて懸る腕をくはへて取り、「得たりやおう」と抱きける。五郎は大力に抱かれながら、物ともせず、「こは如何に女にては無かりけり。物々しや」と言ふ儘に、續いて内へぞ入りにける。五郎丸叶はじとや思ひけん、「敵をばかうこそ抱け、斯樣にこそ抱け」と、高聲なりければ、彼等が傍輩、相摸の國の前司太郎丸走り寄り、「逃すな」とて取り付く。其の後御厩の小平次を始めとして、

手柄の者共走り出でて、四五人取り付きけれども、五郎は物ともせず、二三人をば蹴倒し、大庭に踊り出でんと心ざしけるが、板敷こらへずして、五郎は足を踏み落し、立たん〳〵とする所に、小平次起き上り、双の足に取り付きければ、其の外の人々、「餘すな漏すな」とてかなぐり附く。是や文選の辭に、百足虫は死に至れども戯れずとなり。心は猛く思へども多勢に叶はずして、空しく搦め捕られけり。無慙なりし有様なり。君も此の由聞こし召して、糸毛の御腹卷に御重代の鬚切ぬき、出でさせ給ひける所に、相摸の國の住人、大友左近將監が嫡子に、一法師丸とて生年十三になりけるが、御前さらぬ者なるが、小賢しく御寮の御袖を控へ奉り、「日本國をだにも君は居ながら從へ給ふに、是は僅なる事ぞかし。いか様若き殿原の醉狂か、又は女の盃論か、宿論か、いづれにてか候はんに、御座ながら尋ね聞こし召され候へ」と止め申しければ、實にもとや思し召しけん、止まり給ひけり。さしも出でさせ給ひて、五郎に見えさせ給ふものならば、危くぞ覺えける。後に彼の一法師いしくも申したりとて、御恩賞にぞ預りける。誠に古き言葉を見るに、大ざうとうけいに遊ばず、君子はふんしに拘はらず、と言ふ事、今こそ思ひ知られたれ。其の後小平次御前に參り、畏りて申し上げけるは、「曾我の五郎をば搦め捕りて候。十郎は討たれて候」と申したりければ、「神妙に申したり。五郎をば汝に預くるぞ」と仰せ下されける、哀れなりし次第なり。

卷第十

一　五郎御前へ召し出され聞こし召し問はるゝ事

扨も仰を承つて小平次罷り出で、御厩の下部、總追國光五郎を預り、既に御厩の柱に縛り付けて、其の夜は守り明しける。「大將殿より尋ね聞こし召さるべき事あり、曾我の五郎、連れて參れ」との御使ありければ、小平次縄取りにて參りけるを、母方の叔又、伊豆の國の住人に、小川の三郎祐定申しけるは、「如何に小平次、侍程の者に縄付けずとも、具して參れかし。山賊海賊の輩に非ざれば、逃げ失すべきにも非ず。事により人にこそよれ。無下に情無し」と言ひければ、五郎聞きて、「誰一言の情を殘す者のなきに、御分の芳志の嬉しさよ。さりながら御分、時致に親しき事、皆人知れり。斯樣になりて親類入るべからず。詮無き沙汰して人に聞かれ、方人したりと言はれ給ふな。人の上を善く言ふものは無きぞとよ。時致は、盜强盜せざれば、干筋の縄は付くとも恥ならず。是は父の爲に誦み奉りし、法華經の紐よ」とて、事とも思はざる氣色して、御坪の内へぞ引き入れら

れける。「其の上敵の爲に捕はるゝ者、時致一人にも限らず、殷湯は夏臺に捕はれ、文王は羑里に捕はる、更に恥辱に非ず」とて、打笑ひてぞ居たりける。哀れと言はぬ者ぞなき。五郎御前に參りければ、君御覽ぜられて、「これが曾我の五郎といふ者か」「某が事候よ」とて立ち上り、繩取中に引き立てければ、警固の者共、狼藉なりとて引据ゑたり。其の時相摸の國の住人新開の荒四郎實光、伊豆の國の住人、狩野の助宗持座敷を立つて、「申し上ぐべき事あらば、急ぎ申し候へ」と言ふ。時致聞きて大の眼を見出して、彼等を礑と睨みて、「見苦しきぞ人々、御前遠くばさもありなん、近ければ直に申すべし。左樣なれば問はれて申す白狀に似たり。問はるゝによりて申すまじき事を申すに非ず。面々骨折りに退き候へ」とて、嘲笑ひてぞ居たりける。君聞こし召され、「神妙に申したり。各〻退き候へ。賴朝直に聞くべし」と仰せ下されけり。扨五郎居直り、顏振り上げて、高らかに申しけるは、「兄にて候十郎が、最期に申し置きて候。我等が父を祐經に討たせ候ひしより以來、年月狙ひし心の內、如何許りとか思し召され候。それにつき候ひては、一年君御上洛の時、酒匂の宿より附き奉り、祐經が御供して候ひしを、泊泊に徘徊し、便宜を窺ひ候ひしかども叶はで京に上り、四條の町にて鐵よき太刀を買ひ取り、昨夕の夜半に御前にて、本意を遂げ候ひぬ。今は何をか思ひ殘して、命惜しく候べき。御恩には、今一時も疾く頭を刎ねられ候へ」とぞ申しける。彼は京へは

上らざりしかども、箱根の別當に契約せし故、太刀の出所をも隱し、又は別當の罪科もやと思ひて、斯樣にぞ申したりける。君聞こし召され、「此の太刀の出所、隱さん爲にこそ申すらん。更に別當の咎にあらず。先祖重代の太刀、箱根の御山に籠めし由、兼てより傳へ聞く。如何にもして取り出さばや、と思ひしを、神物になる間、力及ばざりつるに、只今賴朝が手に渡る事、偏へに正八幡大菩薩の御計ひと覺えたり。斯樣の事無くては、如何にして再び主になるべき」とて、自ら御頂戴ありて、錦の袋に入れ、深く納め給ふ。御重寶の其の一なり。代々傳はりけるとかや。やゝありて君仰せられけるは、「此の事曾我の父母に知らせけるか」五郎承つて、「日本の大將軍の仰とも存じ候はぬものかな。當代ならずいづれの世にか、繼子が惡事企てんとて、暇乞ひ候はんに、神妙なり、急ぎ僻事して、我まどひ者になせとて、喜ぶ父や候べき。又母の慈悲は、山野の獸、江河の鱗族までも、子を思ふ志深き事は、父には、母すぐれたりとこそ申し候へ。況や人界に生を受けて、廿歲餘の子供が、命死なんとて母に知らせ候はんに、急ぎ死にて、物思はせよとて、喜び出したつる母や候べき。御けいしやく」とぞ申しける。「扨親しき者共には、如何に」「身貧にして、世にある人々にかくと申し候はんは、只手を捧げて、是を縛らせ、首を延べて、これを斬れとこそ申し候はんずれ。誰かは賴まれ候べき。愚なる御諚かな」とぞ申しける。君げにもとや思し召しけん、「父母親類

に至る迄も仔細なし。又祐經は、伊豆より鎌倉へ繁く通ひしに、道にては、狙はざりつるか」「さん候。この四五箇年の間、足柄、箱根、湯本、國府津、酒匂、大磯、小磯、砥上が原、もろこし、相摸川、懐島、やつまとが原、腰越、稻村、由井の濱、深澤邊に徘徊し、野路、山路、宿々、泊々にて狙ひしかども、敵の連るゝ時は四五十騎、連れざる時も二三十騎、我々は、つるゝ時は兄弟二人、連れざる時は只一人、思ひながらも空しく今迄延び候ひぬ」又「祐經は敵なれば限あり、何として頼朝が、そぞろなる侍共をば、多く斬りけるぞ」「それこそ理にて候へ。御所中に參りて、かかる狼藉を仕る程にては、千萬騎にて候ふとも、餘さじと存ずる所に、こざかしく、敵は何處にあるぞ、と尋ね候間、公には忠を盡し、忠には命を捨つる習、神妙に存じて、是にありと申す聲に驚きて、足の立處も知らず、逃げ候ひし間罪つくりと存じて、追うて斬り殺すに及ばず、戰ふ許りの側太刀、かたの如く當てたる迄にて候。面傷はよも候はじ。只今召し出して御覽候へ」と申しければ、軈て御使して聞こし召されけるに、申す如く面傷は無かりけり。面目なうぞ聞えける。「又王藤内をば何とて討ちけるぞ」「恐れ入つて候へども、年比の傍輩の討たれ候を、見捨てゝ逃ぐる不覺人や候べき。誠に健氣に振舞ひ候ひつる者をや。人富みて故郷に歸らざるは、錦を着て夜行くが如しと言ふ、古き言葉をや知りたりけん、所領安堵の印、本國に下りしが、祐經に暇乞とて、道より

歸りての討死、不便なり」とぞ申しける。此の言葉により、「神妙なり。是も頼朝が先途に立ちけるよ」とて、「本領子孫に於いて仔細なし」と、重ねて御判下されけり。是も兄の十郎が館を出でし時、王藤内が妻子、さこそ歎かざらん、無慙なりしと言ひし、言葉の末にぞ申しける。偏に時致が情によつて、所領安堵す、有難しとぞ感じける。稍ありて、「頼朝をも、敵と思ひけるか」と御尋ねありければ、五郎承つて、「さん候。身に思ひの候ひし時は、木も萱も怖しく、命も惜しく存じ候ひしが、敵討つての後は、如何なる天魔疫神なりとも、と存じ候。まして其の外は、生きたる者とも思ひ候はず。されば千萬人の侍よりも、君一人をこそ思ひ掛け奉りしかども、御果報目出度き御事にて渡らせ給へば、御運におされて、斯樣に罷りなりて候」と申したりければ、君聞こし召されて、「敵討つての後、身を輕く思ふは道理なり。頼朝を何とて敵と思ひけるぞ」「自業自得果とは存じ候へども、伊東入道が謀叛により、我等が本領永く絶えぬ。先祖の敵にては渡らせ給はずや。又は閻魔王の前にて、日本の大將軍、鎌倉殿を手に掛け奉りぬと申さば、一の罪や赦さるべきと、隨分窺ひ申しつれども」と申す、「扨五郎丸には如何にして抱かれけるぞ」「それは彼の童を女と見なし、何事か候はんと存じて、不慮に捕られて候。斯樣なるべしと存ずるものならば、只一太刀の勝負にて候はんずるものをとて、後悔益なし。是偏に宿根の盡きぬる故なり。げにや羅網の鳥は、高く飛ばざ